平成２４年度

浜松市文化財調査報告

２０１４

浜松市教育委員会

例　言

1. 本書は、浜松市教育委員会(市民部文化財課が補助執行)が平成 24 年(2012)度に実施した市内文化財調査の報告集である。
2. 試掘・確認調査は、国及び静岡県の補助金を得て実施した調査、市単独費で実施した調査、原因者負担で実施した調査があり、本書には工事立会に伴う成果も含めた。
3. 本書は、第 1 章に本発掘調査概要、第 2 章に試掘・確認調査概要、第 3 章に試掘・確認調査報告、第 4 章に分布調査報告、第 5 章に詳細報告、第 6 章に文化財年報を掲載した。第 1 章の本発掘調査概要は、平成 24 年(2012)度に実施した本発掘調査、第 2 章の概要は、平成 24 年(2012)度に実施した試掘・確認調査、第 3 章の報告は、平成 24 年(2012)度に実施した試掘・確認調査のうち、特筆すべき遺跡についてその概略を掲載した。第 4 章の分布調査報告には、平成 24 年(2012)度に実施した分布調査の内容を掲載した。第 5 章の詳細報告には、平成 24 年(2012)度に実施した試掘調査や工事立会のうち、特に重要な成果があがっている遺跡について報告を掲載した。第 6 章の文化財年報は、平成 24 年(2012 年)度における浜松市の文化財の新指定等を掲載した。
4. 本書の執筆と編集は、浜松市文化財課が行い、文責は文末に記した。
5. 本書にかかわる遺跡の調査記録と出土品は、浜松市埋蔵文化財調査事務所で保管している。

平成 24 年度 浜松市文化財調査報告

目　次

例　言

第 1 章　本発掘調査概要 ……1

第 2 章　試掘･確認調査概要 ……5

第 3 章　試掘･確認調査報告 ……25

第 4 章　分布調査報告 ……85

第 5 章　詳細報告 ……93

1. 神目代屋敷跡調査報告……94
2. 浜田遺跡 1 次調査報告……99
3. 万斛西遺跡(旧鈴木家屋敷跡)概要報告……104
4. 郷ヶ平古墳群 5 次調査報告……111
5. 泉Ａ古墳群(将軍塚古墳)調査報告……117
6. 中屋遺跡工事立会報告……119
7. 浜松城跡工事立会報告……121
8. 辺田平 1 号墳出土墳輪の再検討……123

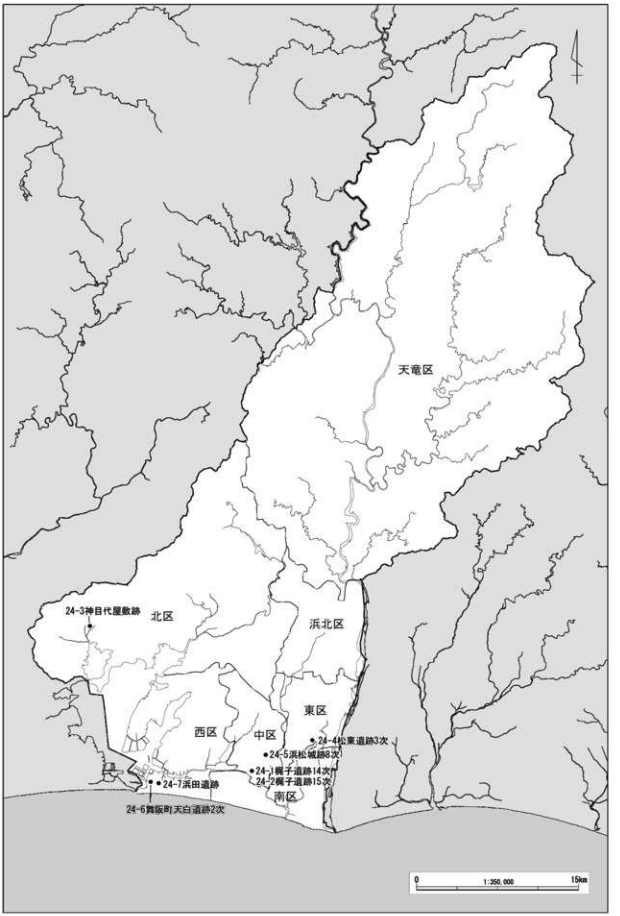
第 6 章　文化財年報 ……129

文化財の新指定等 ……130

第１章

本 発 掘 調 査 概 要

（平成２４年度）


天竜区
北区
浜北区
東区
西区
中区
南区
24-3神目代屋敷跡
24-4松東遺跡3次
24-5浜松城跡8次
24-1梶子遺跡14次
24-2梶子遺跡15次
24-7浜田遺跡
24-6舞阪町天白遺跡2次
0
1:350,000
15km

本発掘調査　位置図

本発掘調査一覧

No.	遺跡名 所在地	調査原因 調査月日	調査面積 (㎡)	調査結果	位置図 担当
24-1	かじこいいせき14じ 梶子遺跡14次 中区南伊場町	工場立替 4月～3月	整理作業	平成23年度に実施した発掘調査の報告書作成。	2 井口智博
24-2	かじこいいせき15じ 梶子遺跡15次 中区南伊場町	工場立替 4月～3月	4,377	弥生時代後期集落の調査。集落を囲む環濠を確認した。	2 井口智博
24-3	じんもくだいやしきあと 神目代屋敷跡 北区三ヶ日町	道路建設 5月	103	古代から中世の集落遺跡の調査。戦国時代のかわらけ埋納坑を確認した。	2 井口智博
24-4	まつひがしいせきさじ 松東遺跡3次 東区天龍川町	道路建設 6月～3月	2,102	弥生時代と奈良時代の集落遺跡の調査。銅鐸の鈕破片や、古代の銅印が出土した。	2 鈴木京太郎
24-5	はままつじょうあとはじ 浜松城跡8次 (天守門) 中区元城町	史跡整備 6月～3月	62	天守門建設に伴い、天守門の礎石、排水溝、階段などを確認した。	2 影山重広 和田達也
24-6	まいさかちょうてんぱくいせき2じ 舞阪町天白遺跡2次 西区舞阪町	放課後児童会施設建設 8月	237	弥生時代、鎌倉時代、戦国時代の集落の調査。完形に近い弥生土器が複数出土した。	2 影山重弘 川西啓喜
24-7	はまだいせき 浜田遺跡 西区舞阪町	津波避難塔整備 10月	200	飛鳥時代の溝と近世の耕作痕跡を確認した。	2 影山重弘 川西啓喜

平成24年度　刊行報告書一覧

No.	遺跡名	報告書名
24-1	梶子遺跡14次	梶子遺跡14次
24-2	梶子遺跡15次	平成25年度　発行予定
24-3	神目代屋敷跡	本報告書詳細報告
24-4	松東遺跡3次	平成25年度　発行予定
24-5	浜松城跡8次	浜松城跡8次
24-6	舞阪町天白遺跡2次	舞阪町天白遺跡2次
24-7	浜田遺跡	本報告書詳細報告
	浜松城跡9次(確認調査)	浜松城跡9次

24-1 梶子遺跡14次

24-2 梶子遺跡15次

24-3 神目代屋敷跡

24-4 松東遺跡3次

24-5 浜松城跡8次(天守門)

24-6 舞阪町天白遺跡2次

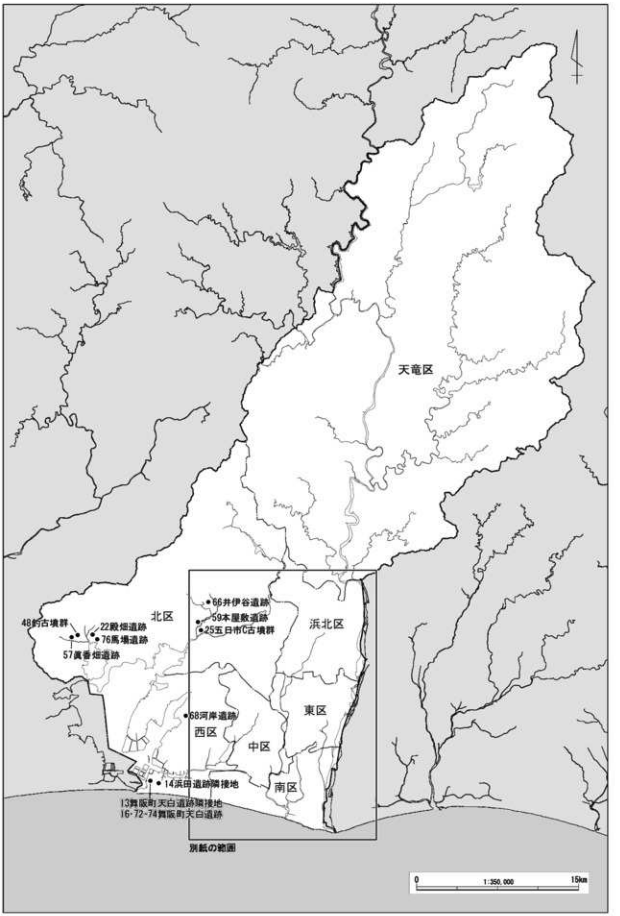
24-7 浜田遺跡

本発掘調査の写真

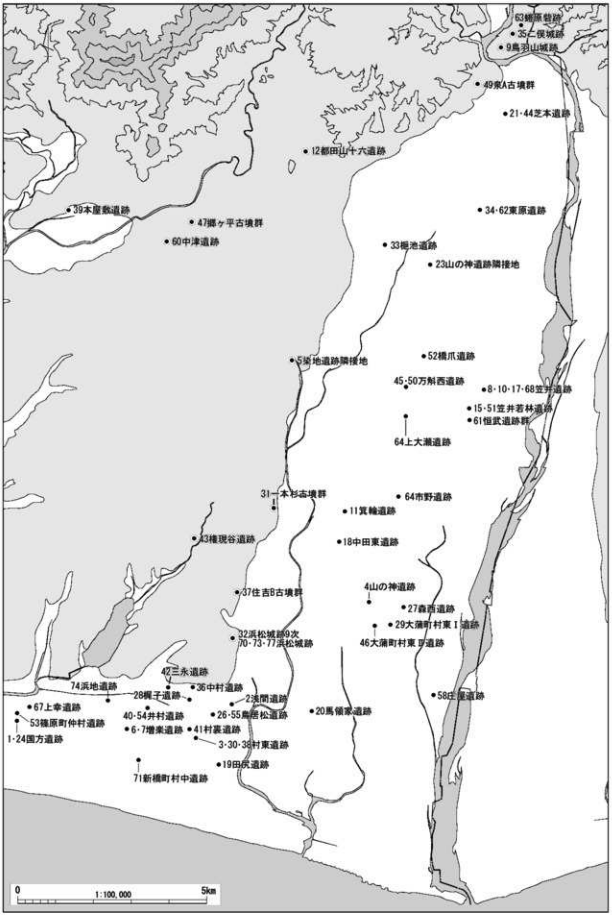
第２章

試掘・確認調査概要

（平成２４年度）


天竜区
北区
浜北区
東区
西区
中区
南区
48釣古墳群
22殿畑遺跡
76馬場遺跡
57眞香畑遺跡
66井伊谷遺跡
59本屋敷遺跡
25五日市C古墳群
68河岸遺跡
14浜田遺跡隣接地
13舞阪町天白遺跡隣接地
16-72-74舞阪町天白遺跡
別紙の範囲
0
1:350,000
15km

試掘・確認調査　位置図(1)


63橋原砦跡
35仁俣城跡
9鳥羽山城跡
49泉A古墳群
21・44芝本遺跡
12都田山十六遺跡
39本屋敷遺跡
47郷ヶ平古墳群
60中津遺跡
34・62東原遺跡
33梶池遺跡
23山の神遺跡隣接地
5梁地遺跡隣接地
52橋爪遺跡
45・50万斛西遺跡
8・10・17・68笠井遺跡
15・51笠井若林遺跡
61恒武遺跡群
64上大瀬遺跡
31一本杉古墳群
64市野遺跡
11箕輪遺跡
43権現谷遺跡
18中田東遺跡
37住吉B古墳群
4山の神遺跡
27森西遺跡
29大蒲町村東Ⅰ遺跡
32浜松城跡9次
70・73・77浜松城跡
46大蒲町村東Ⅱ遺跡
42三永遺跡
74浜地遺跡
36中村遺跡
28梶子遺跡
2浅間遺跡
58庄屋遺跡
67上幸遺跡
40・54井村遺跡
26・55鳥居松遺跡
20馬領家遺跡
53篠原町仲村遺跡
6・7増楽遺跡
41村裏遺跡
1・24国方遺跡
3・30・38村東遺跡
19田尻遺跡
71新橋町村中遺跡
0
1:100,000
5km

試掘・確認調査　位置図(2)

試掘・確認調査概要一覧（1）　　凡例　＜区分＞補助：国庫補助事業　市単：市単独事業

年度	№	遺跡名 所在地	調査原因 調査月日	遺跡の内容（調査成果）	対処	区分 担当	調査面積（㎡）	位置図掲載ページ
平成24年度	24-1	くにがたいせき 国方遺跡 西区稲原町9255-1、9256-1	個人住宅建設 2012/4/26	中世の溝および土坑などを確認し、遺跡の範囲内であることが明確になった。	設計変更	補助 井口智博	16	11
	24-2	せんげんいせき 浅間遺跡 中区上浅田1-602-2、603-7	個人住宅建設 2012/4/27	奈良から平安時代の包含層を検出した。低地に移行する遺跡の南東端部を確認した。	範囲変更	補助 鈴木一有	16	11
	24-3	むらひがしいせき 村東遺跡 南区若林町1409-2	集合住宅建設 2012/5/9	奈良時代の安定的な遺物包含層もしくは遺構を確認した。複数の墨書土器が出土した。	設計変更	補助 鈴木京太郎	12	11
	24-4	やまのかみいせき 山の神遺跡 東区和田町963-1	事業所建設 2012/5/10	調査対象地の北東部において、基盤層の高まりと弥生時代後期の安定した遺物包含層を確認した。	設計検討	補助 井口智博	16	11
	24-5	そめんちいせきりんせつつち 染地遺跡隣接地 東区半田山四丁目810-1外	用地転売 2012/5/12	微高地から湿地帯に至る地形を確認した。奈良時代の遺物が僅かに出土したが、遺跡外にあたると判断できる。	遺跡外	補助 鈴木一有	32	11
	24-6	ぞうういせき 増楽遺跡 南区増楽町468-1	店舗建設 2012/5/14	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡内であるが、遺構や遺物が希薄な地点とみられる。	慎重工事	補助 鈴木一有	20	11
	24-7	ぞうういせき 増楽遺跡 南区増楽町1489-1	宅地造成 2012/5/21	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡内であるが、遺構や遺物が希薄な地点とみられる。	慎重工事	補助 鈴木京太郎	16	12
	24-8	かさいいせき 笠井遺跡 東区豊町2341	個人住宅建設 2012/6/4	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡の範囲外にあたると判断できる。	範囲変更	補助 鈴木京太郎	16	12
	24-9	とばやまじょうあと 鳥羽山城跡 天竜区二俣町二俣	防災無線鉄塔建設 2012/6/4～7	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡内であるが、遺構や遺物が希薄な地点とみられる。	計画見直し	先方 井口智博	43	12
	24-10	かさいいせき 笠井遺跡 東区笠井町147-1他2筆	宅地分譲 2012/6/7, 8/7	調査対象地の北東部において、奈良時代の遺構および遺物包含層を確認した。調査対象地の西側において奈良・鎌倉・戦国時代の遺構と遺物を確認した。西部は自然河跡の可能性がある。	設計変更	補助 鈴木京太郎	80	12
	24-11	みのわいせき 箕輪遺跡 東区小池町字一里山2539	集合住宅建設 2012/6/14	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡の範囲外にあたると判断できる。	範囲変更	先方 鈴木一有	16	12
	24-12	みやこだやまじゅうろくいせき 都田山十六遺跡 北区都田町7768-132	国道バイパス建設 2012/6/18～20	調査対象地の西部において、奈良時代の遺構および遺物包含層を確認した。東部は遺跡外。	範囲変更	先方 井口智博	366	12
	24-13	まいさかちょうてんぼういせきりんせつち 舞阪町天白遺跡隣接地 西区舞阪町舞阪2097他	津波避難タワー建設 2012/6/18、20	遺構は確認できなかった。奈良時代の遺物5出土したが、近隣から運ばれた客土中に含まれる。	発見連絡	先方 鈴木京太郎	100	13
	24-14	はまだいせきりんせつち 浜田遺跡隣接地 西区舞阪町舞阪5464	津波避難タワー建設 2012/6/21	調査対象地において飛鳥時代から奈良時代の遺構（竪穴建物1）と遺物を確認した。	範囲変更	先方 鈴木京太郎	24	13
	24-15	かさいはばやしいせき 笠井若林遺跡 東区笠井町1532-1	個人住宅建設 2012/6/27	調査対象地において奈良時代から平安時代の遺物包含層を確認した。	慎重工事	補助 井口智博	8	13
	24-16	まいさかちょうてんぼういせき 舞阪町天白遺跡 西区舞阪町舞阪108	放課後児童会施設建設 2012/6/28	調査対象地において弥生時代中期の大型遺構と遺物を確認した。	本発掘調査	先方 鈴木京太郎	9,625	13
	24-17	かさいいせき 笠井遺跡 東区笠井町406-1	個人住宅建設 2012/7/3	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡内であるが、遺構や遺物が希薄な地点とみられる。	慎重工事	補助 鈴木京太郎	8	13
	24-18	なかだひがしいせき 中田東遺跡 東区中田町字神明415-1、-3	個人住宅建設 2012/8/2	調査対象地の全面において、奈良から戦国時代の遺構・遺物を確認した。	設計変更	補助 井口智博	5	13
	24-19	たどういせき 田戸遺跡 南区田戸町字村中291	集合住宅建設 2012/8/8	調査対象地の全面において、飛鳥・平安・鎌倉・戦国時代の遺構、遺物を確認した。	設計変更	補助 鈴木一有	16	14

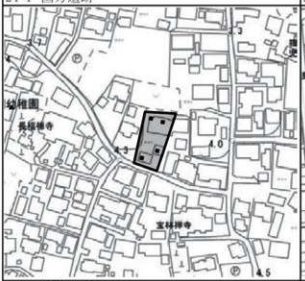
試掘・確認調査概要一覧（2）　　凡例　＜区分＞補助：国庫補助事業
市単：市単独事業

年度	№	遺跡名 所在地	調査原因 調査月日	遺跡の内容（調査成果）	対処	区分 担当	調査面積（㎡）	位置図掲載ページ
平成24年度	24-20	うまりょうけいせき 馬領家遺跡 中区領家二丁目300	宅地分譲 2012/8/17	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡の範囲外にあたると判断できる。	範囲変更	補助 井口智博	16	14
	24-21	しばもといせき 芝本遺跡 浜北区於呂3323-10	個人住宅建設 2012/8/21	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡の範囲内であるが、遺構、遺物が希薄な地点とみられる。	慎重工事	補助 鈴木京太郎	3	14
	24-22	とのばたいせき 殿畑遺跡 北区三ヶ日町三ヶ日216-1他	個人住宅建設 2012/8/23	縄文・弥生・中世の遺構、遺物を確認した。遺跡の中心部分と判断できる。	本発掘調査	補助 井口智博	10	14
	24-23	やまのかみいせきりんせつち 山の神遺跡隣接地 浜北区小林653	個人住宅建設 2012/8/24	遺構、遺物ともに認められなかった。遺跡の範囲外にあたると判断できる。	発見連絡	先方 鈴木京太郎	8	14
	24-24	くにがたいせき 国方遺跡 西区篠原町9366	個人住宅建設 2012/8/24	戦国時代の遺物を確認した。砂の堆積が非常に厚く、深い位置に基盤層を確認した。	慎重工事	先方 井口智博	5	14
	24-25	いっさいちしーごふんぐん 五日市古墳群 北区細江町三和字下前2443-3	個人住宅建設 2012/8/27	蜜柑園造成による天地返しのため、当該地の遺構面は既に破壊されていた。飛鳥・奈良の遺物が出土した。	消滅地点	補助 井口智博	24	15
	24-26	とりいまっちいせき 鳥居松遺跡 中区森田町156他	用地転売 2012/8/28	弥生・奈良時代の遺構、遺物が豊富に出土した。併せて伊場大溝の流路を確認した。	設計変更	補助 鈴木一有	24	15
	24-27	もりにしいせき 森西遺跡 東区和田町159-1	個人住宅建設 2012/9/6	弥生・奈良時代の遺物が出土した。地形の検討から松東遺跡の範囲にあたることが判明した。	範囲変更	補助 鈴木京太郎	20	15
	24-28	かどこいせき 梶子遺跡 中区南伊場町33-1外	工場建替 2012/9/8	弥生時代の土坑群が展開している地点であることを確認した。	本発掘調査	先方 井口智博	8	15
	24-29	おおおばちょうおらひがしいちいせき 大蒲町村東1遺跡 東区和田町331-1	高齢者共同住宅建設 2012/9/10	弥生・奈良・平安時代の遺物が出土した。地形の検討から木船廃寺跡の範囲にあたることが判明した。	範囲変更	補助 鈴木一有	28	15
	24-30	わらひがしいせき 村東遺跡 南区東若林町1448	個人住宅建設 2012/9/10	奈良時代の安定的な遺物包含層および遺構を確認した。複数の墨書土器が出土した。	設計検討	補助 井口智博	12	15
	24-31	いっぽんすぎこふんぐん 一本杉古墳群 中区半田四丁目523番2、524番2	診療所建設 2012/9/25、26	古墳にかかわる遺構は認められなかった。古墳群の範囲外にあたると判断できる。	発見連絡	補助 井口智博	119	16
	24-32	はままつこうみとくじ 浜松城跡9次 中区元城町100-1・2外	公園整備 2012/9/14～12/27	浜松城公園の利用計画にかかわる事前の確認調査。古墳時代の横穴墓や戦国時代の遺物を確認した。 「浜松城跡9次」2013年3月刊行	開発計画待ち	市単 鈴木京太郎	1,396	16
	24-33	くちなしいけいせき 梔池遺跡 浜北区宮口3940番3	個人住宅建設 2012/10/16	遺構や包含層が認められず、遺跡の範囲外にあたると考えられる。	発見連絡	補助 鈴木京太郎	8	16
	24-34	ひがしばらいせき 東原遺跡 浜北区新原5316	店舗建設 2012/10/24	弥生土器が僅かに出土した。遺跡の範囲内であるが、遺構、遺物が希薄な地点とみられる。	設計検討	補助 鈴木京太郎	24	16
	24-35	ふたまたじょうあと 二俣城跡 天竜区二俣町二俣１０３４	史跡整備 2012/10/31～11/16	城跡整備活用事業に伴う確認調査。堀切の形状や天守台石垣基底部を確認した。	遺構保存	市単 井口智博	45	16
	24-36	なかむらいせき 中村遺跡 中区東伊場1丁目4467-1他	個人住宅建設 2012/11/7	僅かに近世の遺構が認められたが、大部分は既に削平され、大規模に造成されていると判断できる。	設計検討	補助 鈴木京太郎	58.25	16
	24-37	すみよしがーごふんぐん 住吉B古墳群 中区住吉1丁目772-2他2筆	集合住宅建設 2012/11/20	当該地は斜面地であり、遺構、遺物は確認できなかった。範囲内だが古墳がないことが判明した。	慎重工事	補助 鈴木京太郎	8	17
	24-38	わらひがしいせき 村東遺跡 南区東若林町1450-1	集合住宅建設 2012/11/27	奈良時代から鎌倉時代の包含層が認められ、遺跡の範囲内と判断できる。	設計変更	補助 井口智博	16	17

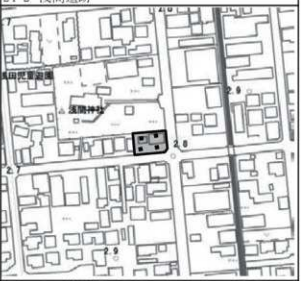
試掘・確認調査概要一覧（3）　　凡例　＜区分＞補助：国庫補助事業
市単：市単独事業

年度	№	遺跡名 所在地	調査原因 調査月日	遺跡の内容（調査成果）	対処	区分 担当	調査面積（㎡）	位置図掲載ページ
平成24年度	24-39	もとやしきいせき 本屋敷遺跡 北区引佐町金指1456-9外	葬儀場建設 2012/11/29	進入路掘削部分については、遺構がないことを確認した。敷地内は遺跡の範囲内。	設計検討	先方 井口智博	30	17
	24-40	いならいせき 井村遺跡 南区若林町3666-1他4筆	店舗建設 2012/12/5	遺構、遺物は確認できなかった。遺跡北側の湿地帯にあたると判断できる。	範囲変更	補助 鈴木京太郎	8	17
	24-41	わらうらいせき 村裏遺跡 南区東若林町1188-1他2筆	個人住宅建設 2012/12/13	僅かに近世の遺物が出土した。遺跡の範囲内であるが、遺構、遺物が希薄な地点とみられる。	設計検討	補助 鈴木京太郎	8.25	17
	24-42	さんさいいせき 三木遺跡 中区西伊場町3916-1外	用地転売 2012/12/18	遺構、遺物は確認できなかった。遺跡北側の低位面など、遺跡の範囲外にあたると判断できる。	範囲変更	補助 井口智博	16	17
	24-43	こんげんやいせき 権現谷遺跡 中区和合町169-4	個人住宅建設 2012/12/18	遺構、遺物は確認できなかった。遺跡西側の範囲外にあたると判断できる。	発見通路	補助 鈴木京太郎	12	18
	24-44	しばもといせき 芝本遺跡 浜北区於呂2841	個人住宅建設 2013/1/10	遺構や包含層が認められず、遺跡の範囲外にあたると考えられる。	範囲変更	補助 鈴木京太郎	6.25	18
	24-45	まんごくにしいせき 万斛西遺跡（旧鈴木家屋敷跡） 東区中郡町980	公園整備 2013/1/15～22	飛鳥・奈良・鎌倉・戦国時代の遺物、遺構が確認できた。新規に遺跡であることが認識できた。	遺構保存	先方 井口智博	102	18
	24-46	おおはぼちょうわらびにいせき 大蒲町村東Ⅱ遺跡 東区大蒲町113-1	集合住宅建設 2013/1/24	奈良時代の遺物が確認できた。遺跡の範囲内に相当すると考えられる。	設計検討	補助 鈴木京太郎	12.5	18
	24-47	こうがひらこみんぐん 堀ヶ平古墳群 北区都田町16-72	土木工事など 2013/2/1～12	堀ヶ平4号墳の周溝が良好な状態で遺存していることが判明した。	設計検討	市単 影山重広	18	18
	24-48	つりこみんぐん 釣古墳群（西山古墳） 北区三ヶ日町釣413-3	史跡整備 2013/2/13～22	横穴式石室の羨門と外護石列が確認できた。古墳に伴う須恵器も比較的豊富に出土した。	遺構保存	補助 井口智博	10	18
	24-49	いずみえーこみんぐん 泉古墳群（将軍塚古墳） 浜北区根堅字泉山	史跡整備 2013/2/25～28	古墳の規模がほぼ確定した。墳丘内石列が存在することが明確になった。	遺構保存	補助 鈴木京太郎	6	19
	24-50	まんごくにしいせき 万斛西遺跡（旧鈴木家屋敷跡） 東区中郡町980	公園整備 2013/3/5	飛鳥・奈良・鎌倉・戦国時代の遺物、遺構が確認できた。新規に遺跡であることが認識できた。	遺構保存	補助 井口智博	12	12
	24-51	かさいわっぱやしいせき 笠井若林遺跡 東区笠井町1332、1374	保育園建設 2013/3/15	奈良・平安・鎌倉時代の遺構と遺物が確認できた。地形の傾斜が顕著だが、遺跡の範囲内と考えられる。	設計検討	市単 鈴木一有	32	19
	24-52	はしづめいせき 橋爪遺跡 東区中郡町370-2	個人住宅建設 2013/3/18	鎌倉・戦国時代の遺物を確認した。遺跡の範囲内と判断できる。	設計検討	市単 鈴木京太郎	8	19
	24-53	しのはらちょうなとわらいせき 篠原町仰村遺跡 西区篠原町2095-2	個人住宅建設 2013/3/21	湿地状の地形を確認した。遺跡の範囲内であるが、遺構、遺物外が希薄な地点とみられる。	設計検討	市単 井口智博	9	19

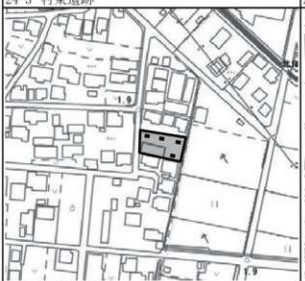
24-1 国方遺跡



24-2 浅間遺跡



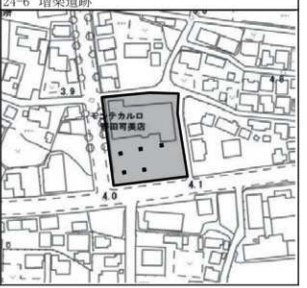
24-3 村東遺跡



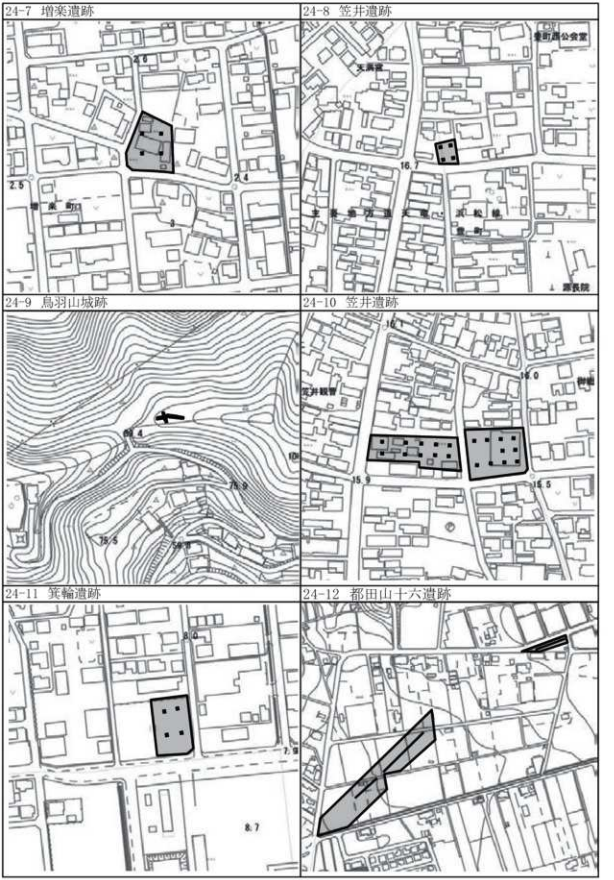
24-4 山の神遺跡

24-5 染地遺跡隣接地

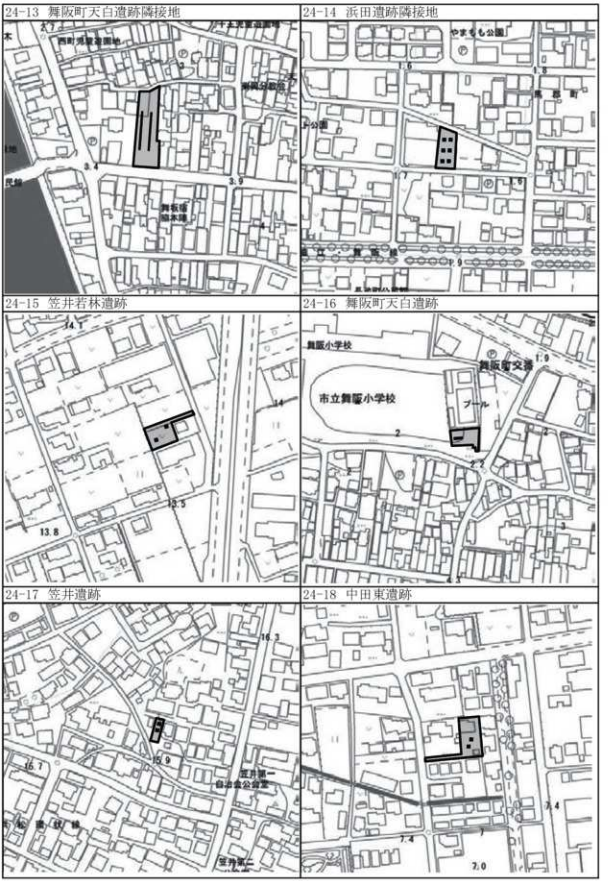
24-6 増楽遺跡



予備調査位置図①

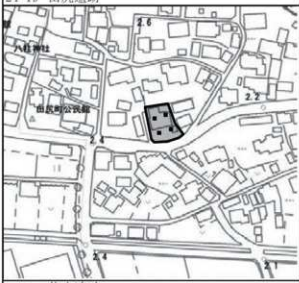


予備調査位置図②

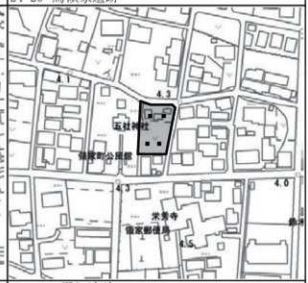

24-13 舞阪町天白遺跡隣接地
24-14 浜田遺跡隣接地
24-15 笠井若林遺跡
24-16 舞阪町天白遺跡
24-17 笠井遺跡
24-18 中田東遺跡
やまもも公園
舞阪小学校
舞阪南交番
市立舞阪小学校
プール
笠井第一
自治会公会堂
笠井第二

予備調査位置図③

24-19 田尻遺跡

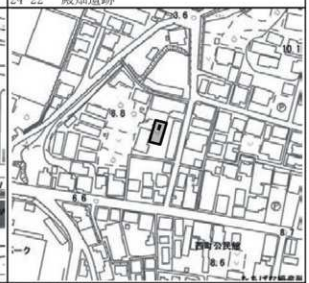


24-20 馬領家遺跡

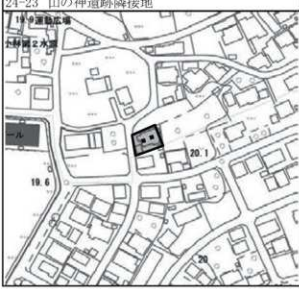


24-21 芝本遺跡

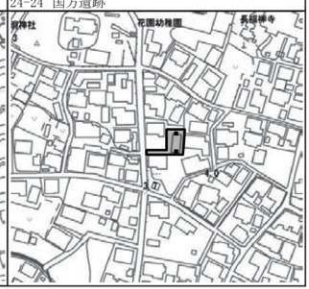
24-22 殿畑遺跡



24-23 山の神遺跡隣接地

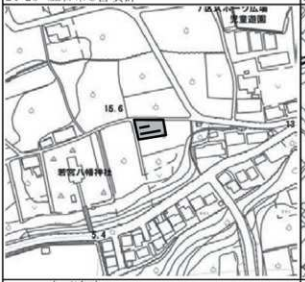


24-24 国方遺跡

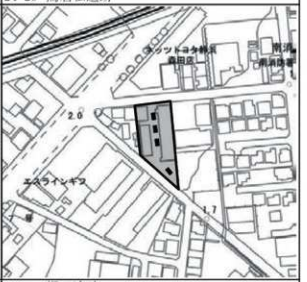


予備調査位置図④

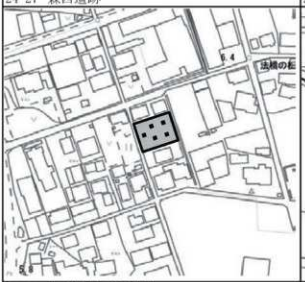
24-25　五日市C古墳群



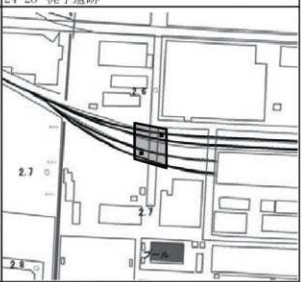
24-26　鳥居松遺跡



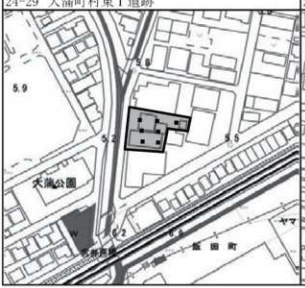
24-27　森西遺跡



24-28　梶子遺跡

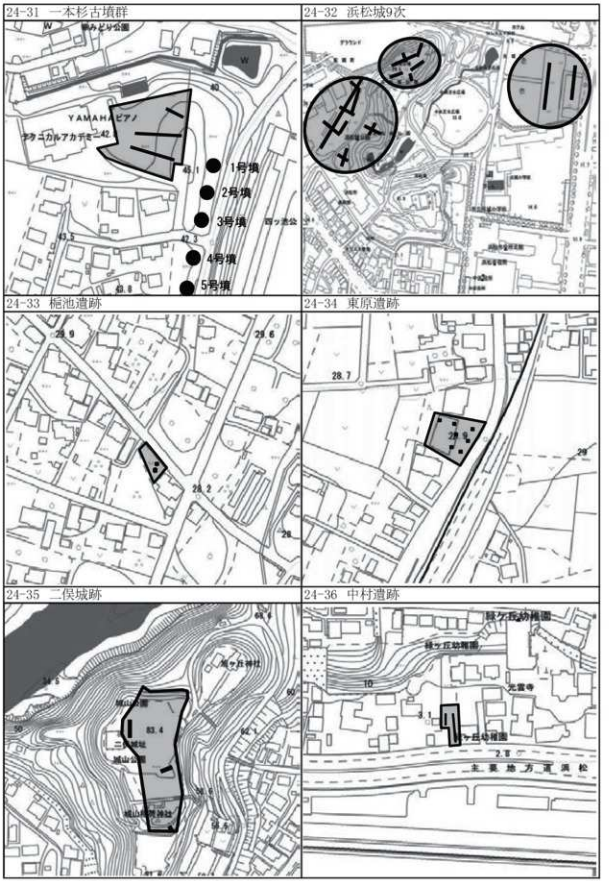


24-29　大蒲町村東Ⅰ遺跡

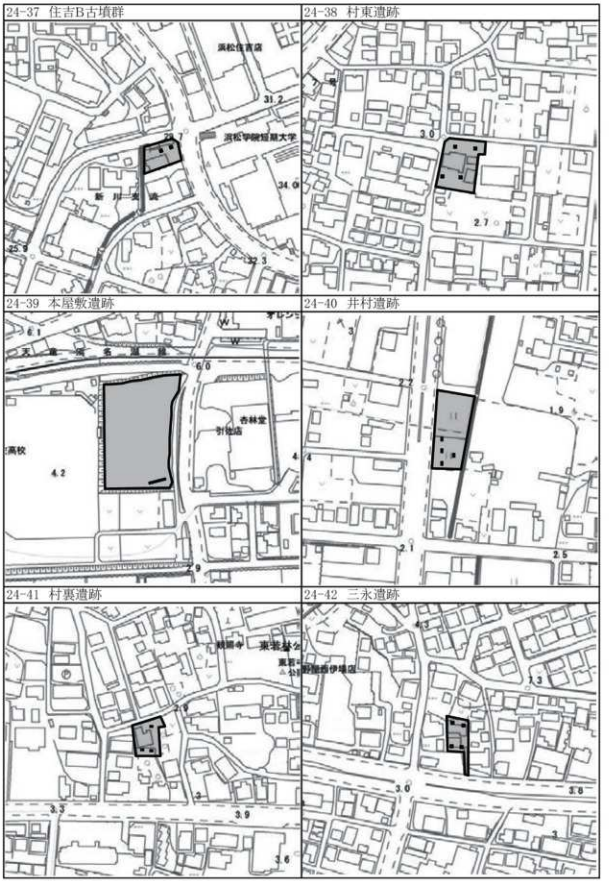


24-30　村東遺跡

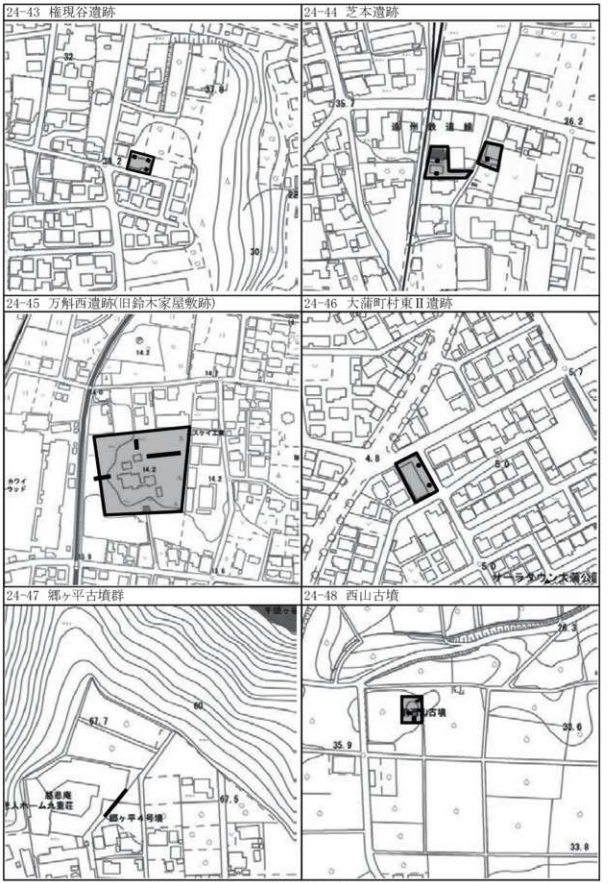
予備調査位置図⑤


24-31 一本杉古墳群
YAMAHAピアノ
1号墳
2号墳
3号墳
4号墳
5号墳
24-32 浜松城9次
24-33 梶池遺跡
24-34 東原遺跡
24-35 二俣城跡
24-36 中村遺跡
主要地方道浜松

予備調査位置図⑥

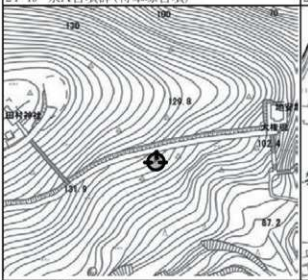

24-37 住吉B古墳群
浜松住吉店
浜松学院短期大学
31.2
34.0
32.3
25.9
24-38 村東遺跡
3.0
2.7
24-39 本屋敷遺跡
高校
4.2
4.6
2.9
24-40 井村遺跡
2.7
1.9
2.1
2.5
24-41 村裏遺跡
3.3
3.9
3.6
24-42 三永遺跡
3.0
3.8

予備調査位置図⑦

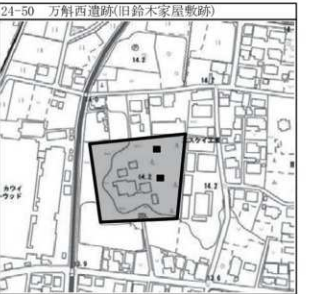

24-43 権現谷遺跡
24-44 芝本遺跡
24-45 万斛西遺跡(旧鈴木家屋敷跡)
24-46 大蒲町村東Ⅱ遺跡
24-47 郷ヶ平古墳群
24-48 西山古墳
郷ヶ平4号墳
西山古墳

予備調査位置図⑧

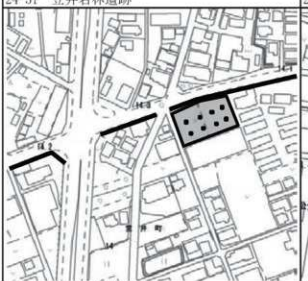
24-49　泉A古墳群(将軍塚古墳)



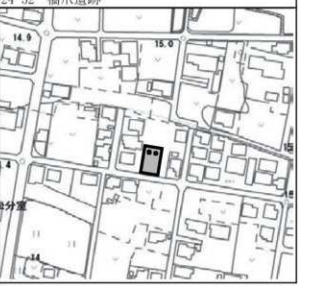
24-50　万解西遺跡(旧鈴木家屋敷跡)



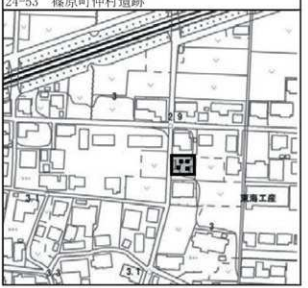
24-51　笠井若林遺跡



24-52　橋爪遺跡



24-53　篠原町仲村遺跡

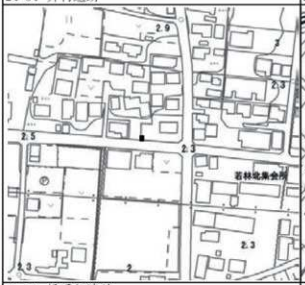


予備調査位置図⑨

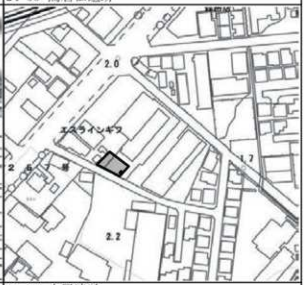
工事立会一覧

年度	№	遺跡名 所在地	調査原因 調査月日	立会結果	位置図 担当
平成24年度	24-54	いわむらいせき 井村遺跡 南区若林町2653-4	携帯鉄塔建設 2012/4/9	調査範囲が小さかったため、明確な遺構は確認できなかった。整地内には大量の土器が散布している。	21 鈴木一有
	24-55	とりいまついせき 鳥居松遺跡 中区森田町地内	店舗建設 2012/4/9	弥生時代の遺物包含層を確認した。集落の内部にあたると判断できる。	21 鈴木一有
	24-56	まっこうばたいせき 麦香畑遺跡 北区三ヶ日町日比沢555-3	浄化槽設置 2012/4/19	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	21 井口智博
	24-57	しょうやいせき 庄屋遺跡 南区新貝町1478	浄化槽設置 2012/7/13	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	21 井口智博
	24-58	もとやしきいせき 本屋敷遺跡 北区細江町小野地内	水道管敷設 2012/7/17	僅かに土師質土器を確認した。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	21 井口智博
	24-59	なかついせき 中津遺跡 北区都田町116-48	浄化槽設置 2012/8/9	調査範囲が小さかったため、明確な遺構や遺物は確認できなかった。遺跡の希薄な地点と判断できる。	21 井口智博
	24-60	つぶたついせきぐん 恒武遺跡群 東区貴平町1681-3外2筆	浄化槽設置 2012/9/10	奈良時代の遺構や遺物を確認した。遺跡の範囲内と判断できる。	22 鈴木京太郎
	24-61	ひがしばらいせき 東原遺跡 浜北区新原	浄化槽設置 2012/9/18	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	22 鈴木一有
	24-62	になはらとりであと 蜷原砦跡 天竜区二俣町二俣	水道工事 2012/9/19	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	22 鈴木一有
	24-63	いちのいせき 市野遺跡 東区市野町	下水道工事 2012/10/9	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	22 鈴木一有
	24-64	かみおおいせいせき 上大瀬遺跡 東区大島町	下水道工事 2012/10/15	鎌倉時代の遺構や遺物を確認した。遺跡の中心地に近いと判断できる。	22 鈴木一有
	24-65	いいのやいせき 井伊谷遺跡 北区引佐町井伊谷	水道工事 2012/10/16	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	22 鈴木一有
	24-66	じょうこういせき 上幸遺跡 西区篠原町	宅地造成工事 2012/10/24	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡外にあたると判断できる。	23 鈴木一有
	24-67	かわぎしいせき 河岸遺跡 西区伊左地町	水道工事 2012/11/5	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	23 鈴木一有
	24-68	かさいいせき 笠井遺跡 東区恒武町	水道工事 2012/11/9	奈良時代の遺構や遺物を確認した。遺跡の範囲内と判断できる。	23 川西容喜
	24-69	はまきつじとうあと 浜松城跡（西別館） 中区元城町	西別館解体工事 2012/11/9、13、15、20	西別館の基礎工事によって、地山面が大きく掘削されることが判明した。	23 鈴木一有
	24-70	にっぽしちょうむらなかいせき 新橋町村中遺跡 南区新橋町646ほか	下水道工事 2012/11/29	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡内の希薄な地点と判断できる。	23 鈴木一有
	24-71	まいさかようてんばくいせき 舞阪町天白遺跡 西区舞阪町2066-7地先ほか	水道工事 2012/11/29	遺構や遺物は確認できなかった。遺跡外にあたると判断できる。	23 鈴木一有
	24-72	はままつじょうあと・きゅうひくましゅくていいち 浜松城跡・旧引馬宿推定地 中区元城町	水道工事 2012/12/3、4、6、7、13 2013/1/16、21	浜松城北東部の堀を確認した。絵図から推定されてきた引馬城跡の縄張りの状況が明らかになった。	24 鈴木京太郎
	24-73	はまじいせき 浜地遺跡 西区入野町284-1ほか	下水道工事 2012/12/7、2013/1/27、2/25	砂堆縁辺の自然地形を確認した。遺跡の範囲がより詳細に確認できた。【範囲変更】	24 鈴木一有
	24-74	まいさかようてんばくいせき 舞阪町天白遺跡 西区舞阪町2066-8地先ほか	水道工事 2012/12/7、10 2013/1/8、17	弥生・奈良・鎌倉時代の遺物が出土した。遺跡の範囲内にあたると判断できる。	24 影山重広
	24-75	ばばいせき 馬場遺跡 北区三ヶ日町三ヶ日	水道工事 2012/12/21	既設管による撹乱が顕著で、明確な情報は得られなかった。ただし、周辺の状況から遺跡内と判断できる。	24 井口智博
	24-76	はまきつじとうあと 浜松城跡 中区元城町	天守門建設工事 2013/1/28、30、2/1	復元天守門の基礎杭設置に伴い石垣内の状況を確認した。下層域では、出土遺物は無かった。	24 鈴木一有

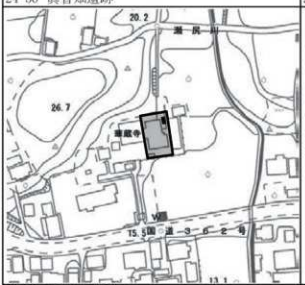
24-54 井村遺跡



24-55 鳥居松遺跡

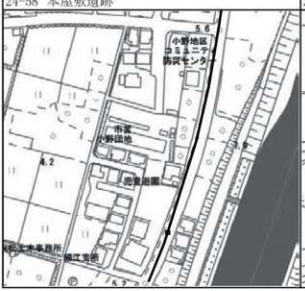


24-56 眞香畑遺跡

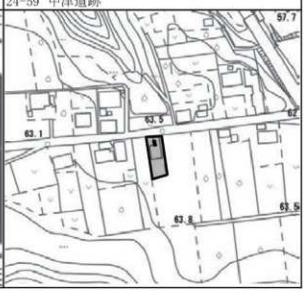


24-57 庄屋遺跡

24-58 本屋敷遺跡

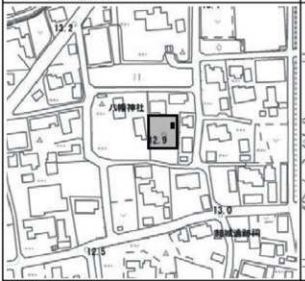


24-59 中津遺跡



工事立会調査位置図①

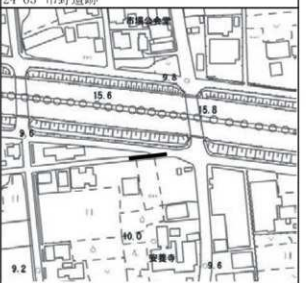
24-60 恒武遺跡群



24-61 東原遺跡

24-62 蜷原砦跡

24-63 市野遺跡



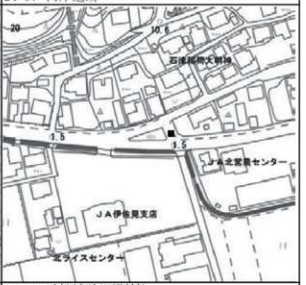
24-64 上大瀬遺跡

24-65 井伊谷遺跡

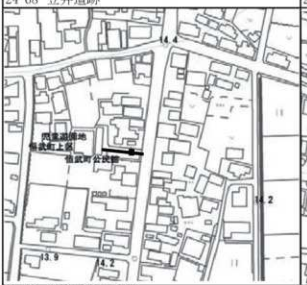
工事立会調査位置図②

24-66 上幸遺跡

24-67 河岸遺跡

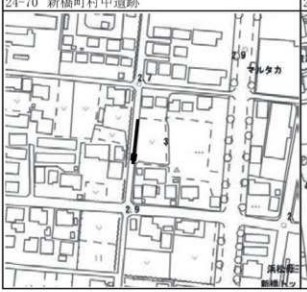


24-68 笠井遺跡



24-69 浜松城跡(西別館)

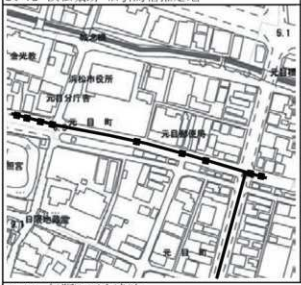
24-70 新橋町村中遺跡



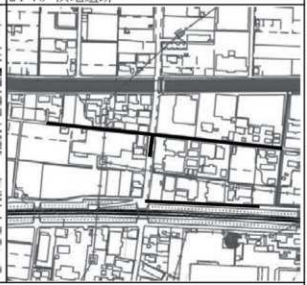
24-71 舞阪町天白遺跡

工事立会調査位置図③

24-72 浜松城跡・旧引馬宿推定地

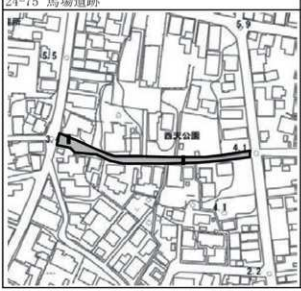


24-73 浜地遺跡

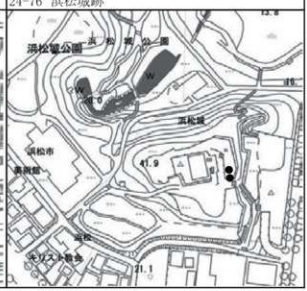


24-74 舞阪町天白遺跡

24-75 馬場遺跡



24-76 浜松城跡



工事立会調査位置図④

第３章

試 掘・確 認 調 査 報 告

（平成２４年度）

24－1　国方遺跡(くにがたいせき)

所 在 地	西区篠原町 9255-1
調査期間	2012/4/26
時　　代	奈良、鎌倉、戦国
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	小穴、溝、土坑
出土遺物	須恵器、山茶碗、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口智博

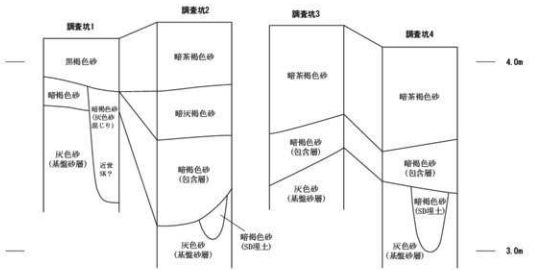
位置図(2,500 分の 1)

今回の調査地点は、2011 年 4 月の試掘調査地点から東へ 150ｍに位置する。

対象地内の旧状は宅地であり、住宅建設による撹乱が顕著であった。土層堆積状況は表土である黒褐色ないし暗茶褐色の砂層の下に暗褐色砂層が堆積していた。調査坑 2 のみ表土層の下に灰褐色砂層の堆積を確認した。調査坑 2～4 では暗褐色砂層から基盤層に遺構が掘り込まれている状況が確認できた。遺物の出土量は少ないが、この層が遺物包含層に相当すると考えられる。基盤層は灰色の砂丘砂層である。基盤砂層の標高は、西側と南側が高く、北東側に向かって徐々に標高が低くなっていた。

調査坑 1 では近世以降の撹乱が著しく、遺構は確認できなかった。基盤層の標高が高いため、後世の開墾等により遺構が消失したと推定される。調査坑 2～4 では、土坑や溝、小穴などを確認した。遺構からの出土遺物は少なく、時期を明確にし難いものが多いが、大半は中世に掘削されたものと推定される。遺物は須恵器(1)、山茶碗(2)、内耳鍋が出土した。また、銭貨(3)を表採した。

今回の試掘調査の結果、遺構と遺物を確認したことから、対象地内は遺跡の範囲内であると判断される。



土層柱状図

出土遺物

24－2　浅間遺跡(せんげんいせき)

所 在 地	中区上浅田 1-602-2 他
調査期間	2012/4/27
時　　代	奈良
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

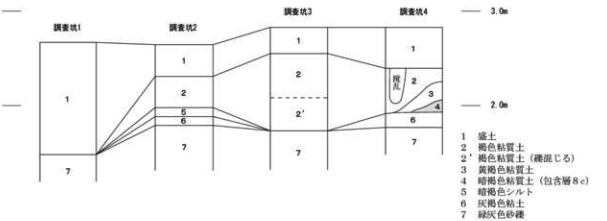
位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　4 箇所の調査坑における基本層位は次の通りである。1 層:盛土、2 層:褐色粘質土、3 層:黄褐色粘質土、4 層:暗褐色粘質土(遺物包含層)、5 層:暗褐色シルト、6 層:灰褐色粘土、7 層:緑灰色砂礫(基盤層)。なお、調査坑 4 では遺物包含層が確認されたが、調査坑 1～3 については遺物包含層が確認されなかった。

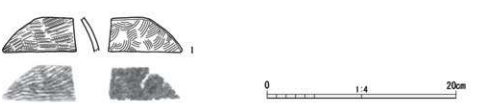
検出遺構　なし

出土遺物　調査坑 4 の遺物包含層から、奈良時代(8 世紀)頃の須恵器甕の胴部破片(1)と土師器小片数点が出土した。

小　　結　今回の試掘調査では遺構は確認できなかった。また、遺物包含層が確認されて遺物が出土したのは、遺跡の中心部に近い調査坑 4 のみである。したがって、今回の調査地は浅間遺跡の南東縁にあたるとみられる



土層柱状図



出土遺物

24－3　村東遺跡(むらひがしいせき)

所 在 地	南区若林町 1409-2
調査期間	2012/5/9
時　　代	奈良、平安
調査方法	1.5m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

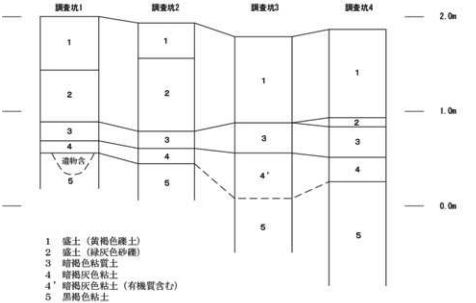
土層堆積状況　4 箇所の調査坑における層位は次の通りである。1･2 層:盛土、3 層:暗褐色粘質土、4 層:暗褐灰色粘土、5 層:黒褐色粘土。調査坑 3 における 4′ 層は有機質を多く含んでおり、4 層とは別の堆積層である可能性がある。崩落の危険性により充分な掘削深度が保てなかったことから、いずれの調査坑でも基盤層(推定:砂層)を確認することはできなかった。ただし、3～5 層の堆積状況をみると、西から東へと次第に地形が下がっている様子がうかがえる。

検出遺構　調査坑 1 では、5 層から集中して奈良時代の須恵器や土師器が出土した。これらの土器は完形に近いものが多く、包含層に含まれる破片とはみなしがたい。湧水が顕著であったため詳細は確認できなかったが、何らかの遺構が存在している可能性が高い。5 層を遺構埋土ととらえた場合、4 層が遺物包含層と想定されるが、4 層からの出土遺物は確認できなかった。なお、調査坑 2～4 では、遺構などは確認できなかった。

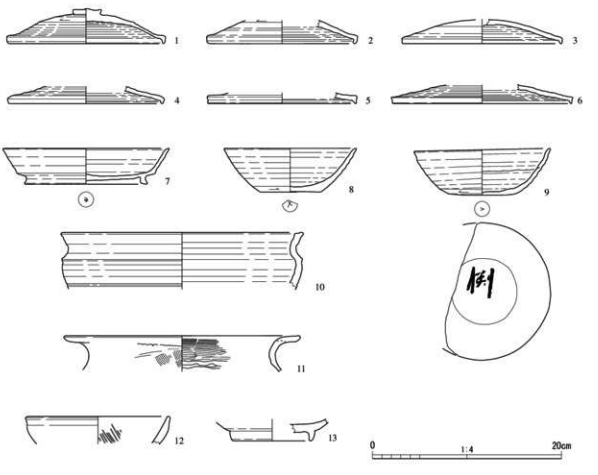
出土遺物　調査坑 1 の 5 層から、須恵器(1～10)・土師器(11,12)が多く出土した。ほとんどが 8 世紀代のものであるが、僅かに平安時代(10 世紀)の灰釉陶器(13)が含まれる。灰釉陶器は混入品の可能性がある。出土した須恵器のうち、墨書がみられるものが 3 点ある。墨書土器(9)には、文字が明確に判読できるものが含まれ、出土遺物にかかわる今後の詳細な検討が必要である。なお、調査坑 2～4 では、遺物は出土しなかった。

小　　結　調査坑 1 の調査結果にみるように、奈良時代の遺物を豊富に含む大型遺構(推定)の存在が判明した。出土遺物量が多いこと、完形に近い状態の個体があること、3 点におよぶ墨書土器を含むことなど、村東遺跡の性格を考える上で重要な調査成果が得られたといえる。当遺跡は敷智郡家比定地である伊場遺跡群にも近く、古代の官衙にかかわる何らかの遺構が展開している可能性も想定できるだろう。

各調査坑で確認した 3～5 層が西から東へ向かって下がっている点や、調査地の東側には標高が低い水田地帯が広がっている点などから判断すると、今回の調査地は、村東遺跡の東の端部に近い地点とみられる。最も西側の調査坑1で遺物が豊富に出土し、調査坑2～4では遺構・遺物とも確認されなかった点もこの捉え方と符合する。ただし、遺物包含層と想定される 4 層が最も東側の調査坑 4 でも確認されていることや、今回調査地の東側にある水田でも遺物の散布がみられることから、遺跡の東端は今回の調査地よりさらに東側になるとみられる。以上のことから、今回の調査対象地の全域が埋蔵文化財包蔵地の範囲内と判断できる。


調査坑1
調査坑2
調査坑3
調査坑4
2.0m
1.0m
0.0m
遺物含
1 盛土（黄褐色礫土）
2 盛土（緑灰色砂礫）
3 暗褐色粘質土
4 暗褐灰色粘土
4' 暗褐灰色粘土（有機質含む）
5 黒褐色粘土

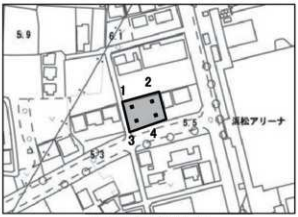
土層柱状図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
倒
0
1:4
20cm

出土遺物

24－4　山の神遺跡(やまのかみいせき)

所 在 地	東区和田町 963-1
調査期間	2012/5/10
時　　代	弥生
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	弥生土器
特記事項	なし
調査担当	井口智博



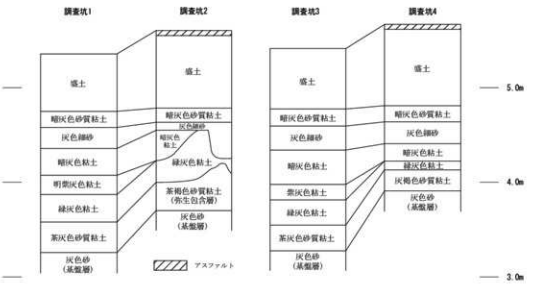
位置図(2,500 分の 1)

今回の調査地点は、山の神遺跡 1 次調査区(浜松アリーナ)の西約 60ｍの地点に位置する。

対象地内の旧状は駐車場であり、全面的に山土による盛土が施されていた。盛土直下の土層堆積状況は各調査坑ともに共通しており、暗灰色砂質粘土と灰色細砂の旧表土が堆積していた。旧表土以下の堆積状況もほぼ共通しており、上から暗灰色粘土、緑灰色粘土、茶灰色砂質粘土の順に堆積していた。基盤層の標高が低い調査坑 1 と 3 では、暗灰色粘土と緑灰色粘土の間に紫灰色粘土の堆積が確認できた。基盤層は灰色の砂層で敷地の東側から西側に向かって標高が低くなっていた。

遺物は全ての調査坑から弥生土器が出土したが、いずれも小破片である。弥生土器は主に緑灰色粘土層と茶褐色砂質粘土層から出土しているが、弥生時代の遺物包含層は、茶褐色砂質粘土層と考えられ、上層の緑灰色粘土層に遺物が混入したと推定される。遺構はいずれの調査坑でも確認できなかった。

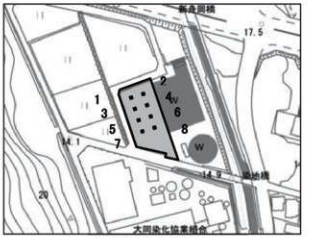
今回の確認調査の結果、対象地内で少量の弥生土器と遺物包含層を確認した。基盤層は東から西に向かって傾斜しており、微高地から低地に移行する斜面地と考えられる。全ての調査坑から遺物が出土したものの、安定した弥生時代の包含層は調査坑 2 でのみ確認できたことから、遺跡の範囲は対象地北東側の一部分のみと判断できる。



土層柱状図

24－5　染地遺跡隣接地
（そめんちいせきりんせつち）

所在地	東区半田山四丁目 810-1 外
調査期間	2012/5/12
時　代	古墳～奈良
調査方法	2m×2m　調査坑 8 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有



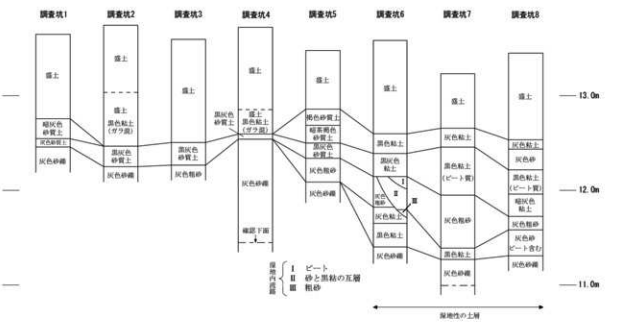
位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　盛土下の基本的な土層堆積状況は以下の通りである。1 層:褐色～暗灰色砂質土、2 層:黒灰色砂質土、3 層:灰色粗砂、4 層:灰色～黒色粘土、5 層:灰色砂礫(基盤層)。

3・4 層がみられる調査坑 5～8 は、基盤層(5 層)の標高が低く、各層位においても有機物の混入が多い。これらの調査坑は、湿地性の環境であったと捉えられる。これに対して、調査坑 1～4 は基盤層の標高が高く、湿地性の堆積物もみられない。微高地から湿地に移行する縁辺部と想定できる。

遺構・遺物　今回の調査では、明確な遺構は確認できなかった。安定的な遺物包含層もみられない。遺物は若干、出土したが、その多くは、調査坑 2 における盛土(黒色粘土層)に含まれていたもので、近隣地から移動したものとみられる。その他の遺物は、遺存部分が小さく、量もごく僅かである。周囲の遺跡内から流れ込んだものと想定できる。

小　結　今回の調査では、明確な遺構や遺物包含層などが確認できなかった。地形的にも染地遺跡の範囲から南に向かって低くなり、湿地帯に至るような微高地の縁辺部にあたると想定できる。以上のことから、調査地は遺跡の範囲外と判断できる。



土層柱状図

24－6　増楽遺跡(ぞうらいせき)

所 在 地	南区増楽町 468-1
調査期間	2012/5/14
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑 5 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

位置図(2,500 分の 1)

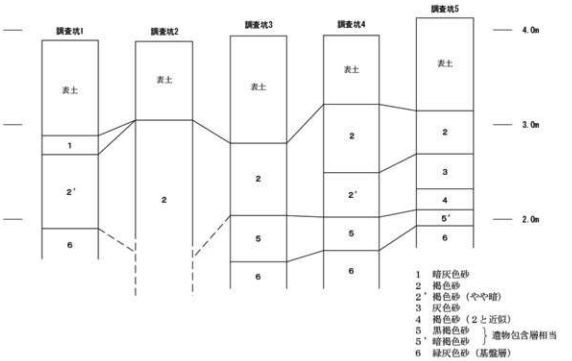
土層堆積状況　調査坑における層位は次の通りである。1 層:暗灰色砂、2 層:褐色砂、3 層:灰色砂、4 層:褐色砂、5 層:黒褐色～暗褐色砂、6 層:緑灰色砂(基盤層)。基盤層直上の 5 層は標高 2.0～2.1m で検出されており、遺物包含層に相当すると考えられるが出土遺物はみられなかった。

また、基盤層(6 層)は標高 1.6～1.9m で検出され、調査坑 2･3･4 でやや地形が下がっている状況が確認された。

検出遺構　なし

出土遺物　なし

小　　結　今回の試掘調査では、遺物包含層に相当すると考えられる層を調査坑 3･4･5 で検出したものの、遺構･遺物とも確認することはできなかった。したがって、今回の調査地は増楽遺跡の範囲内ではあるが南端に近く、遺構・遺物の希薄な場所と考えられる。



土層柱状図

24－7　増楽遺跡(ぞうらいせき)

所 在 地	南区増楽町 1489-1
調査期間	2012/5/21
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　調査坑における層位は次の通りである。1 層:褐色砂、2 層:黄褐色砂、3 層:灰黄褐色砂、4 層:灰褐色砂、5 層:緑灰色砂、6 層:褐灰色砂(基盤層)。基盤層は標高 1.4～1.8m で確認された。また、標高 1.3m 以下まで掘削を進めると湧水がみられた。

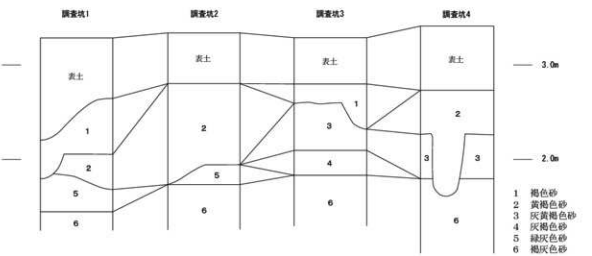
近隣の試掘調査の成果をみると、ほとんどが緑灰色砂の基盤層であるが、今回の調査地では一部で認められるのみで、下層からやや暗い褐灰色砂が確認されているため、それを基盤層とした。

試掘坑 1 土層

検出遺構　なし

出土遺物　なし

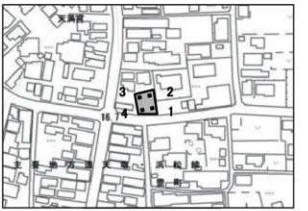
小　　結　今回の試掘調査では、遺構・遺物とも確認できなかった。また、遺物包含層もみられなかった。したがって、この調査地は増楽遺跡の範囲内ではあるが、遺構・遺物の希薄な場所と考えられる。



土層柱状図

24－8　笠井遺跡(かさいいせき)

所 在 地	東区豊町 2341
調査期間	2012/6/4
時　　代	奈良～平安
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

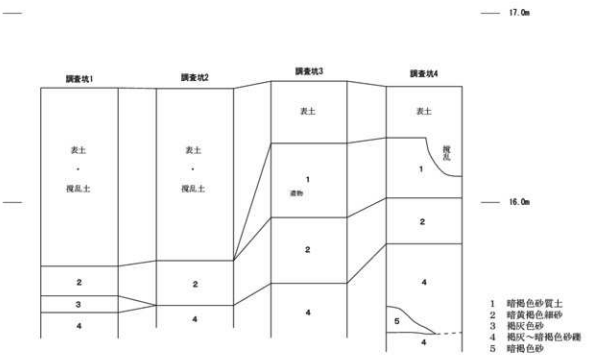


位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　調査坑における層位は次の通りである。1 層:暗褐色砂質土、2 層:暗黄褐色細砂、3 層:褐灰色砂、4 層:褐灰～暗褐色砂礫、5 層:暗褐色砂。基盤層である 4 層は、標高 15.4～15.8m で確認され、東側(調査坑 1･2)が低く、西側(調査坑 3･4)で高くなる傾向がみられた。なお、調査坑 1･2 では、撹乱によって 1 層及び 2 層上部が失われている。

検出遺構・出土遺物　調査坑 3 の 1 層より、土師器の破片が 4 点出土した。いずれも細片であり時期の特定は困難だが、奈良～平安時代頃のものと考えられる。

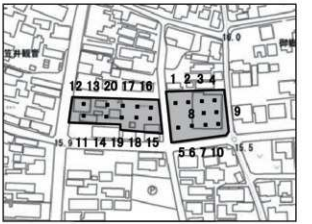
小　　結　今回の調査地は笠井遺跡の範囲の北東端部に位置する。遺跡の範囲が及んでいるかを確認するために試掘調査を実施したが、遺構は確認できなかった。遺物は 1 層より土師器が出土したが、表土直下の浅い箇所である点や、調査坑 3 のみの出土で最も少ない点などから、1 層を遺物包含層とは捉え難い。また、基盤層の標高は、東へ向かって地形が下がっている状況が確認されている。これらのことから、この調査地は笠井遺跡の北東端に近いが、遺跡の範囲外と考えられる。



土層柱状図

24－10　笠井遺跡(かさいいせき)

所 在 地	東区笠井町 147-1 他 2 筆
調査期間	2012/6/7, 8/7
時　　代	奈良、鎌倉、室町～戦国
調査方法	2m×2m　調査坑 20 箇所
検出遺構	住居跡?
出土遺物	土師器、須恵器、山皿、かわらけ、内耳鍋、陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　全 20 箇所の調査坑における層位は大きくⅠ～Ⅴ層に分けられる。

Ⅰ層:表土または攪乱土。Ⅱ層:褐色～灰色系のシルト層。近世～近代の桟瓦、陶磁器、ガラスなどを含む。人為的な埋土がほとんどで、色調はさまざまである。

Ⅲ層:褐色系のシルト～細砂層。ａ～ｇ層に細分される。

ａ層は暗茶褐色シルトで、一部で灰色細砂ブロックを含む。奈良～中世の遺物包含層である。一部の調査坑では、下層部から破片の大きな奈良時代の土器が多く出土する。

ｂ層は暗茶褐色細砂で、一部で灰色細砂ブロックを含む。色調はａ層と酷似するが、砂質が強い。ｂ層に遺物はみられないため、ａ層とｂ層の間が遺構面と考えられる。調査坑 4 のａ・ｂ層間の一部では、竪穴住居跡の竈のような焼土と炭化物の薄い層が確認できる。

ｃ層は、やや暗い茶褐色シルトで、ａ、ｂ層よりもわずかに明るい。調査坑 7 でのみ確認されており、ａ層上面から浅く掘り込まれている遺構の覆土のようにも見えるが、ａ層との色調・土質の違いはほとんどないため確証はない。

ｄ層は暗灰褐色シルトで、調査坑 11 でのみ確認されている。ａ層の下にあり、遺構の覆土となる可能性があるが、遺物は含まれない。

ｅ層は暗黄褐色シルトで、後述するｆ・ｇ層とともに今回調査区の東端である調査坑 15･16 でのみ確認されている。遺物は含まれない。

ｆ層は暗褐灰色シルトで、調査坑 15･16 で確認されている。遺物は含まれない。

ｇ層は褐灰色細砂で、調査坑 15･16 で確認されている。色調はｆ層に酷似するが、やや明るく砂質が強い。遺物は含まれない。

Ⅳ層:褐色砂。場所によっては確認できない。遺物は含まれない。Ⅴ層:砂礫。基盤層。

調査前は、全体的に西から東へ向かって地形が低くなっている状況を想定していたが、各調査坑の基盤層(Ⅴ層)の状況を見ると、調査地西端が最も高く標高 15.0～15.1m程度で、東西の調査地を区切っている中央の道路部分あたりが大きく下がっており 13.8m程度、調査地東部はなだらかに東へと下がっており、調査地東端では 14.2～14.3m程度である。

検出遺構　調査坑 4 のⅢａ・ｂ層間の一部で、竈跡のような焼土と炭化物の薄い層が確認でき、調査坑 4･9 では、Ⅲａ層下層から土器がまとまって出土しているため、竪穴住居跡などの遺構の存在が想定されるが、平面的・層位的には捉えられなかった。

また、調査坑7や11・12で遺構らしき層位が確認されたが、確証は得られなかった。

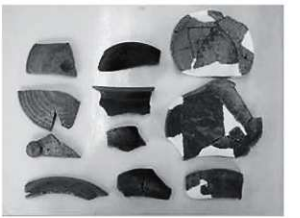
出土遺物　多くの調査坑において土師器が出土した。ほとんどが8世紀代のものと考えられる。同時期とみられる須恵器も出土しているが、土師器に比べれば量はわずかである。特に調査坑4・9では、Ⅲa層の下層部分で大きめの破片が多量に出土している。調査坑4からは須恵器(1)、土師器(2～11)、調査坑9からは須恵器(12～15)、土師器(16～19)が出土している。その他の調査坑では出土量は少なく、小片がほとんどである。また、調査坑1のⅠ・Ⅱ層や、調査坑11・12・19からは13世紀頃と考えられる山皿(20,21)やかわらけが出土したほか、調査坑14からは14～16世紀頃の陶器や内耳鍋が出土している。

小　結　今回の調査では、調査地のほぼ全域で遺物が出土している。出土遺物の主体は奈良時代のものであるが、中世の遺物もみられることから、奈良～中世の長期間にわたり集落が営まれていたと考えられる。特に調査地東側においては奈良時代の土器が多く出土し、遺構の存在をうかがわせる土層や遺物の出土状況がみられた。調査地東側は笠井遺跡の東端にあたり、東側を宮前遺跡と接しているため、宮前遺跡との関連も考えられる。

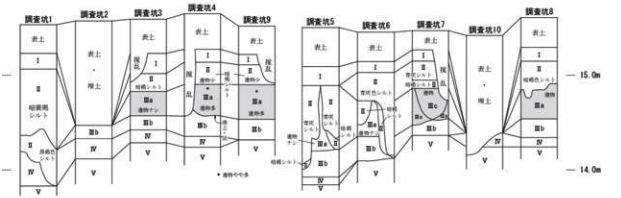
なお、調査地の東部と西部の間には南北に道路が通っているが、道路に近い調査坑(1・2・5・6・15・16)ではⅢ層からの遺物の出土はみられず、基盤層も大きく下がっていることから、現在の道路付近に旧河道が存在している可能性も考えられる。

以上のことから、調査地中央を縦断する道路付近では遺構・遺物が希薄であるが、今回の調査地全体としては笠井遺跡の範囲内であると判断できる。

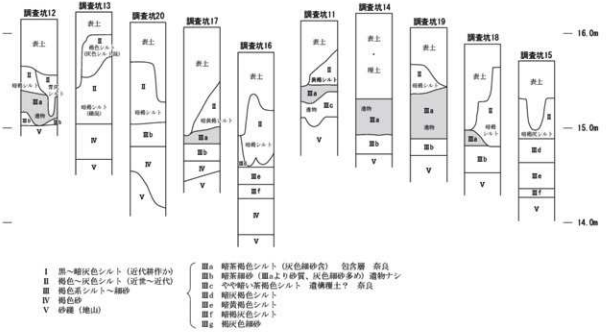
調査坑4土層



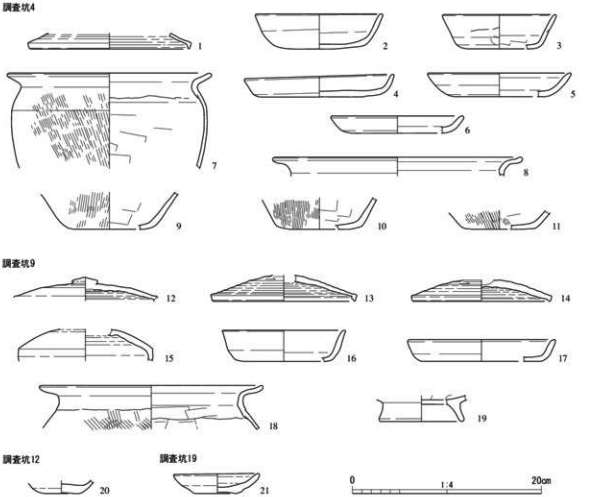
主な出土遺物



土層柱状図


調査坑12
調査坑13
調査坑20
調査坑17
調査坑16
調査坑11
調査坑14
調査坑19
調査坑18
調査坑15
16.0m
15.0m
14.0m
I 黒～暗灰色シルト（近代耕作か）
II 褐色～灰色シルト（近世～近代）
III 褐色系シルト～細砂
IV 褐色砂
V 砂礫（地山）
IIIa 暗茶褐色シルト（灰色細砂含）　包含層　奈良
IIIb 暗茶細砂（IIIaより砂質、灰色細砂多め）遺物ナシ
IIIc やや暗い茶褐色シルト　遺構埋土？　奈良
IIId 暗灰褐色シルト
IIIe 暗黄褐色シルト
IIIf 暗褐灰色シルト
IIIg 褐灰色細砂

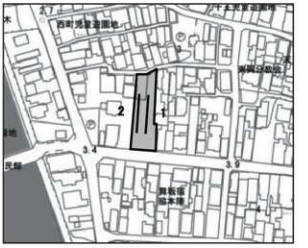
土層柱状図


調査坑4
調査坑9
調査坑12
調査坑19
0
1:4
20cm

出土遺物

24－13　舞阪町天白遺跡隣接地
（まいさかちょうてんぱくいせきりんせつち）

所在地	西区舞阪町舞阪 2097 他
調査期間	2012/6/18, 20
時　代	奈良、中世、近世
調査方法	2m×25m　調査溝 2 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器、須恵器、かわらけ、山茶碗 陶器類、寛永通宝
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



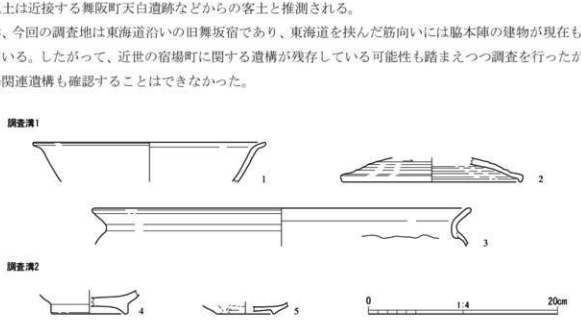
位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　2 本の調査溝における層位は次の通りである。1 層:褐色砂、2 層:灰褐色砂、3 層:灰色砂(基盤層)。基盤層である 3 層の上面は、第 1 調査溝で標高 2.1～2.4m で確認されており、北側よりも南側の東海道寄りが高くなっている。なお、両調査溝ともに攪乱が著しく、第 2 調査溝にいたってはほぼ全域において基盤層まで攪乱が及んでいた。

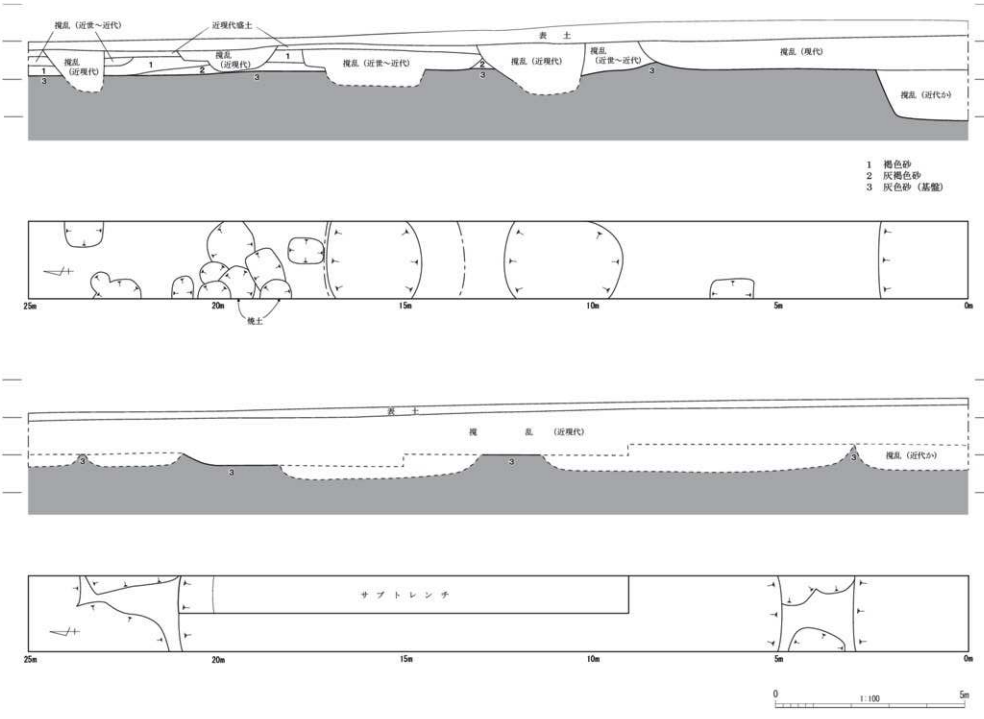
検出遺構・出土遺物　両調査溝ともに遺構は確認されなかった。攪乱土中からは、弥生土器(1)、奈良時代の須恵器の摘蓋(2)や甕・土師器甕(3)の破片が出土したほか、中世の山茶碗(4)、かわらけ、瀬戸美濃丸皿(5)、近世の陶器類(羽釜・すり鉢・陶錘など)や銅銭(寛永通宝)が出土している。

小　結　今回の調査地は舞阪町天白遺跡の南西に近接する。遺跡の範囲が及んでいるかを確認するために試掘調査を実施したが、遺構は確認できなかった。また、遺物はすべて攪乱土中からの出土であり、1～3 層からの出土はみられなかった。したがって、今回の調査地は舞阪町天白遺跡の範囲外と考えられ、遺物が出土した攪乱土は近接する舞阪町天白遺跡などからの客土と推測される。

なお、今回の調査地は東海道沿いの旧舞坂宿であり、東海道を挟んだ筋向いには脇本陣の建物が現在も保存されている。したがって、近世の宿場町に関する遺構が残存している可能性も踏まえつつ調査を行ったが、近世宿場関連遺構も確認することはできなかった。



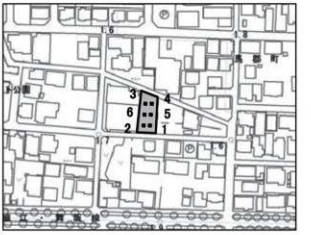
出土遺物


4.0m
3.0m
2.0m
1.0m
撹乱（近世～近代）
近現代盛土
撹乱（近現代）
撹乱（近世～近代）
表　土
撹乱（近現代）
撹乱（近世～近代）
撹乱（現代）
撹乱（近代か）
1　褐色砂
2　灰褐色砂
3　灰色砂（基盤）
25m
20m
15m
10m
5m
0m
検土
撹　乱　（近現代）
サブトレンチ
0
1:100
5m

土層断面図・平面図

24－14　浜田遺跡隣接地
（はまだいせきりんせつち）

所在地	西区舞阪町舞阪 5464
調査期間	2012/6/21
時　代	飛鳥～奈良、中世、近世
調査方法	2m×2m　調査坑 6 箇所
検出遺構	土坑、畝?
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗、土師質土器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　6 箇所の調査坑における層位は次の通りである。1 層:灰褐色砂、2 層:暗褐色砂、3 層:青灰色～明青灰色砂、4 層:暗青灰色砂、5 層:有機物を多く含む暗青灰色～青灰色砂。また、遺構覆土の土層は次の通りである。Ⅰ層:暗青灰色砂(畝状遺構等の覆土、時期不詳。中近世か)。Ⅱ層:灰黄褐色砂(7 世紀代の遺構覆土か)、Ⅲ層:青灰色砂(7～8 世紀頃の遺構覆土か)。なお、3 層以下からは遺物が出土しないため、3 層が基盤層と考えられる(3 層が存在しない箇所においては 4 層が基盤層とみられる)。基盤層上面の標高は、攪乱を受けていない各調査坑で約 0.9～1.0mと安定している。

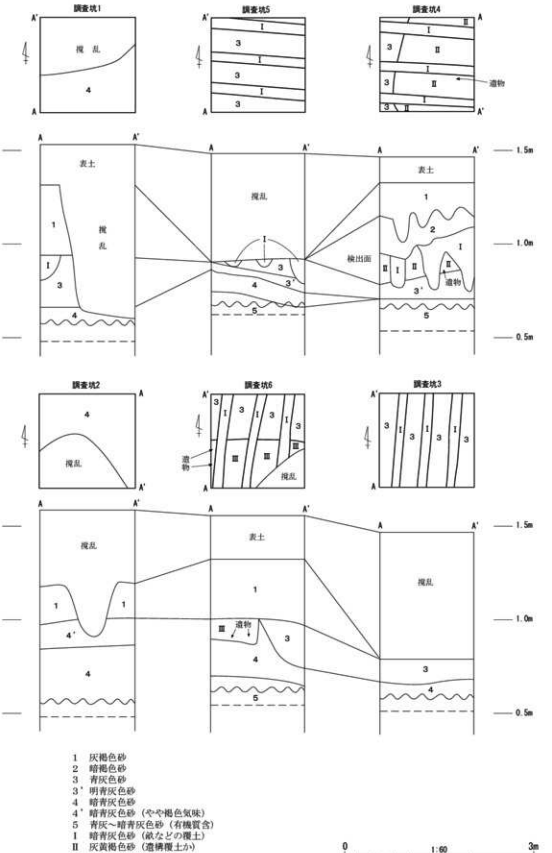
遺構・遺物　畝状の遺構を調査坑 3～6 で検出した。幅約 20ｃｍ、間隔約 40ｃｍで、調査坑 3･6 では南北方向、調査坑 4･5 では東西方向に延びている。覆土からの遺物は山茶碗の破片 1 点のみで時期が判然としないが、中世～近世頃の畑作痕と推測される。そのほか、土師器甕(2)を表採した。

調査坑 4 土層

また、調査坑 4･6 では大型の遺構状の落ち込みを確認した。いずれも直線的なプランの一辺が検出されたのみで、深さは 10～15cm と浅めである。出土遺物は、調査坑 4 の遺構覆土から須恵器坏蓋(1)の破片(7 世紀前半～中葉頃)と土師器の破片(7～8 世紀頃)が各 1 点、調査坑 6 の遺構覆土から土師器の破片(7～8 世紀頃か)が 2 点である。規模・形状からは竪穴住居跡の可能性も考えられるが、部分的な検出で、遺物も少量であることから、断言はできない。

小　結　今回の調査地は浜田遺跡の北側に近接する。遺跡の範囲が及んでいるかを確認するために試掘調査を実施したところ、6 箇所中 2 箇所の調査坑から 7～8 世紀頃とみられる遺構を確認し、遺構覆土から遺物も出土した。したがって、今回の調査地は浜田遺跡の範囲に含まれると考えられる。

出土遺物



1　灰褐色砂
2　暗褐色砂
3　青灰色砂
3'　明青灰色砂
4　暗青灰色砂
4'　暗青灰色砂（やや褐色気味）
5　青灰～暗青灰色砂（有機質含）
Ⅰ　暗青灰色砂（畝などの覆土）
Ⅱ　灰黄褐色砂（遺構覆土か）
Ⅲ　青灰色砂（有機質含）

土層柱状図

24－15　笠井若林遺跡
（かさいわかばやしいせき）

所在地	東区笠井町 1532-1
調査期間	2012/6/27
時　代	奈良
調査方法	2m×2m　調査坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	井口智博

位置図(2,500 分の 1)

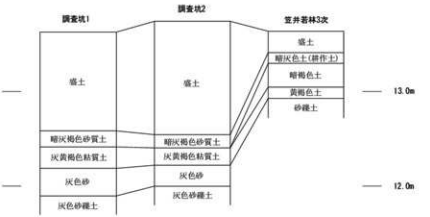
調査対象地は、笠井若林遺跡 3 次調査区(浜松環状線)の西側隣接地である。現状は畑であり、隣の水田とは 1m弱の比高差がある。

調査坑の配置及び土層断面図は別添図に示した。対象地内は、畑の造成時に全面的に盛土が施されており、盛土施工以前の旧表土は南西側に隣接する水田とほぼおなじ高さであった。土層堆積状況は調査坑 1・2 ともに共通しており、暗褐色砂質土の旧表土の下に灰黄褐色粘質土が堆積していた。灰黄褐色粘質土の下は、灰色砂が堆積しており、その下は基盤層である灰色砂礫層を確認した。

調査坑 2 完掘状況

遺物は、黄褐色粘質土中から奈良時代の土師器と須恵器が出土した。調査坑内を精査したが、遺構は確認できなかった。笠井若林遺跡 3 次調査区の土層堆積状況と比較すると、今回の調査区は基盤層の標高が 70 ㎝ほど低くなっていた。

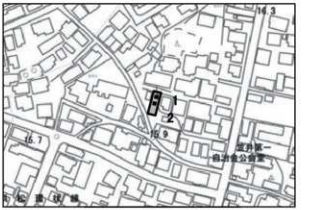
今回の確認調査の結果、遺構は確認できなかったものの、奈良時代の遺物包含層を確認したことから、対象地は遺跡の範囲内と考えられる。



土層柱状図

24－17　笠井遺跡(かさいいせき)

所 在 地	東区笠井町 406-1
調査期間	2012/7/3
時　　代	縄文、奈良
調査方法	2m×2m　調査坑 2 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	黒曜石、須恵器甕
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



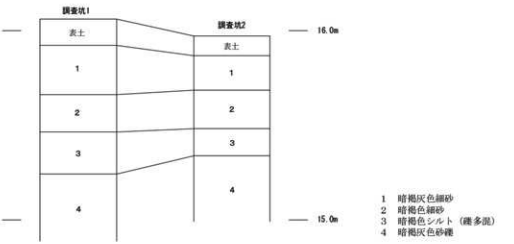
位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　調査坑 2 箇所における層位は次の通りである。表土、1 層:暗褐灰色細砂、2 層:暗褐色細砂、3 層:暗褐色シルト(礫多く含む)、4 層:暗褐灰色砂礫(基盤層)。基盤層である 4 層の上面は、標高 15.3m付近で確認されている。

検出遺構・出土遺物　調査坑 1 では遺構・遺物ともに確認されなかった。調査坑 2 では遺構は確認されず、表土中から黒曜石と須恵器甕破片各 1 点が出土した。黒曜石には石器としての加工痕はみられない。

小　　結　今回の調査地は笠井遺跡内の北西部に位置する。遺構・遺物の状況を確認するために予備調査を実施したところ、遺構は確認されず、遺物も小片で表土中からの出土であった。なお、1 層には近世～近代の陶器等が含まれ、2 層から遺物の出土はみられなかった。したがって、今回の調査地は笠井遺跡の範囲内であるが、遺構・遺物が希薄な箇所と考えられる。

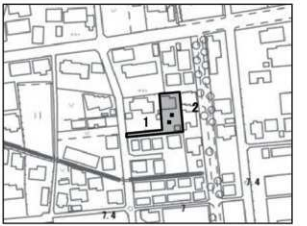
調査坑 2 土層



土層柱状図

24－18　中田東遺跡(なかだひがしいせき)

所 在 地	東区中田町字神明 415-1、-3
調査期間	2012/8/2
時　　代	奈良、鎌倉、戦国
調査方法	1.5m×1.5m　調査坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層、井戸?
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗 施釉陶器、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

中田東遺跡は、平成 20 年に行われた試掘調査で西側に範囲が拡大することが明らかになっている。隣接する中田北遺跡や上新屋遺跡の範囲とは近接しており、同一の微高地上に展開していると推定される。

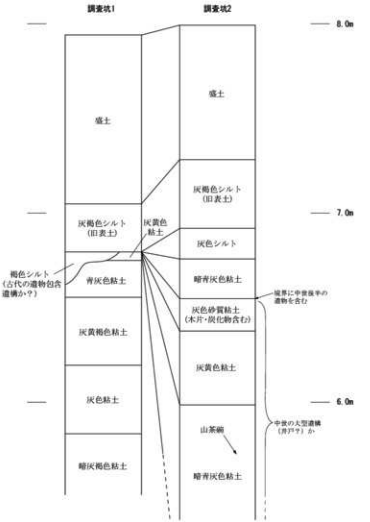
対象地の現状は宅地であり、旧表土の上に 1m程の盛土を行って造成されていた。調査坑の土層堆積状況は南側と北側とで異なっていた。南側の調査坑 1 では、旧表土の直下に褐色シルトの堆積があり、土師器(1)や須恵器(2)、灰釉陶器など奈良時代から平安時代の遺物を包含していた。断面形状からみて、遺構の可能性が考えられる。褐色シルト層の下には、青灰色粘土、灰黄褐色粘土、灰色粘土、暗灰褐色粘土の順に厚い粘土堆積が続いており、基盤層である砂礫層には到達できなかった。

北側の調査坑 2 では、調査坑 1 とは異なり褐色シルトの堆積は確認できなかった。旧表土の下は灰色シルト、暗青灰色粘土、木片や炭化物を含む灰色砂質粘土、灰黄色粘土、暗青灰色粘土の順に堆積し、この調査坑でも基盤の砂礫層には到達できなかった。遺物は、上層の暗青灰色粘土と灰色砂質粘土から、内耳鍋、古瀬戸製品(6)や初山焼の皿(7)など戦国時代の遺物が、下層の暗青灰色粘土から鎌倉時代の山茶碗(3～5)が出土した。掘削範囲が狭いため明確にはできなかったが、深い位置から中世の遺物が主体的に出土したことから、井戸や溝などの大型の遺構にあたる可能性が高いと考えられる。

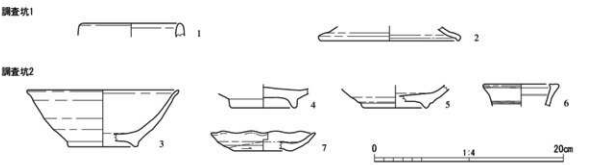
今回の確認調査の結果、対象地から奈良時代から戦国時代に至る時期の遺物が出土し、遺構も存在する可能性が高いことが確認できた。このことから対象地は遺跡の範囲内と考えられる。

調査坑 1 完掘状況

調査坑 2 完掘状況


調査坑1
調査坑2
8.0m
7.0m
6.0m
盛土
灰褐色シルト
(旧表土)
灰黄色
粘土
褐色シルト
(古代の遺物包含
遺構か?)
青灰色粘土
灰黄褐色粘土
灰色粘土
暗灰褐色粘土
盛土
灰褐色シルト
(旧表土)
灰色シルト
暗青灰色粘土
灰色砂質粘土
(木片・炭化物含む)
境界に中世後半の
遺物を含む
灰黄色粘土
山茶碗
暗青灰色粘土
中世の大型遺構
(井戸?)か

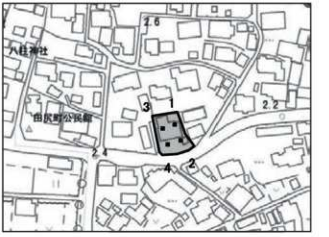
土層柱状図


調査坑1
1
2
調査坑2
3
4
5
6
7
0
1:4
20cm

出土遺物

24－19　田尻遺跡(たじりいせき)

所 在 地	南区田尻町字村中 291
調査期間	2012/8/8
時　　代	飛鳥、平安、鎌倉、戦国
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	溝
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗、山皿、渥美産甕、中国産青磁、内耳鍋、かわらけ
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　すべての調査坑において、ほぼ同一の土層堆積状況が認められた。その詳細は以下の通りである。1 層:灰褐色砂質土(表土)、2 - 1 層:茶灰色砂質土(粘土ブロックを含む)、2 - 2 層:茶褐色砂質土(近世磁器を含む土器片が多い)、3 層:暗褐色砂質土(7 世紀～16 世紀の遺物包含層)、4 層:緑灰色砂(地山)。すべての調査坑で、良好な状態の遺物包含層(3 層)を確認した。

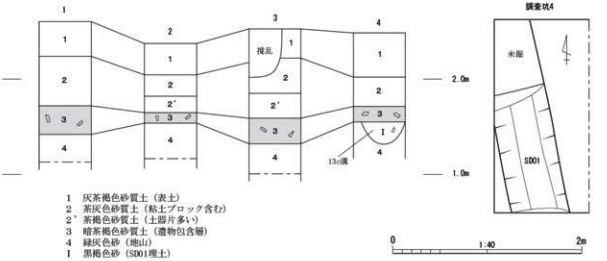
遺　構　調査坑 4 において、幅 55cm、深さ 20cm ほどの溝(SD01)を確認した。遺構埋土からは、山茶碗、渥美産甕、中国産青磁が出土した。出土遺物から鎌倉時代(13 世紀)の遺構と考えられる。

遺　物　すべての調査坑において、比較的まとまった量の遺物が出土した。その多くは、遺物包含層からの出土であるが、上層の地層(2 層)や遺構埋土(調査坑 4、SD01)から出土したものもある。調査坑 1 からは、須恵器(1～4)、土師器(5)、山茶碗(6～8)、内耳鍋(9)、調査坑 3 からは、山茶碗(10)、調査坑 4 からは、須恵器(11)、灰釉陶器(12)、山茶碗(14～18)、小碗(13)、青磁碗(19)、渥美焼(20)が出土した。遺物の帰属時期は、飛鳥時代(7 世紀)、平安時代(9～10 世紀)、鎌倉時代(13 世紀)、戦国時代(16 世紀)である。注目できる遺物として、調査坑 4 の SD01 から出土した鎌倉時代(13 世紀)の中国産青磁片があげられる。

小　結　全調査坑において安定した遺物包含層が検出でき、調査坑 4 では明確な遺構も確認できたことから、調査対象地は全面にわたり遺跡の範囲にあたると判断できる。出土遺物からうかがえる遺跡の年代は飛鳥時代(7 世紀)から戦国時代(16 世紀)まで長期間にわたることから判断すると、当該地には比較的安定した居住域が広がっていたとみられる。

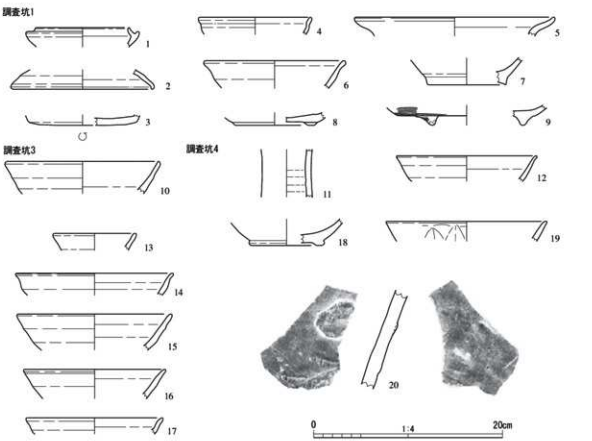
調査坑 2 土層

調査坑 4 遺構検出状態



1　灰茶褐色砂質土（表土）
2　茶灰色砂質土（粘土ブロック含む）
2'　茶褐色砂質土（土器片多い）
3　暗茶褐色砂質土（遺物包含層）
4　緑灰色砂（地山）
I　黒褐色砂（SD01埋土）

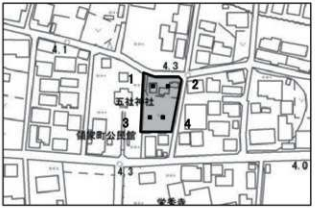
土層柱状図



出土遺物

24－20　馬領家遺跡(うまりょうけいせき)

所 在 地	中区領家二丁目300
調査期間	2012/8/17
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑4箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500分の1)

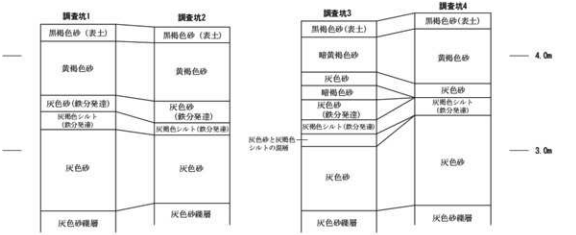
今回の調査地点は五社神社の東側に位置し、周知の馬領家遺跡の東端に当たる。周辺では、複数回確認調査が行われているが、いずれも遺跡の範囲外であった。

対象地の現状は宅地であり、既存の住宅を解体して更地となっている。いずれの調査坑も宅地造成による盛土はみられず、表土下の土層堆積状況はおおむね共通していた。黒褐色の表土の下には、黄褐色ないし暗黄褐色の砂が堆積していた。黄褐色砂の下には、鉄分が顕著な灰色砂、灰褐色シルトが堆積し、その下には灰色砂が厚く堆積していた。基盤層は、灰色の砂礫層であり、現地表面下2.0m前後で確認した。

調査坑4完掘状況

いずれの調査坑も遺構の存在は確認できなかった。遺物は調査坑4から内耳鍋の小破片が出土した程度である。この遺物は周辺地から流れ込んだものとみられ、直接当該地にかかわるものではないと判断できる。

今回の確認調査の結果、調査坑内からごく微量の遺物が出土したのみで、遺構は全く確認できなかった。このことから対象地は遺跡の範囲外と考えられる。



土層柱状図

24－21　芝本遺跡(しばもといせき)

所 在 地	浜北区於呂 3323-10
調査期間	2012/8/21
時　　代	－
調査方法	1m×1.5m　調査坑２箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　２箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。１層:表土(砕石)、２層:暗褐色シルト、３層:黒色シルト、４層:黄色シルト(基盤層)。

なお、調査坑２では３層が失われており、1、２層が調査坑１よりも 20cm ほど下がっているが、地山の標高はいずれの調査坑でも約 37.7m を測る。

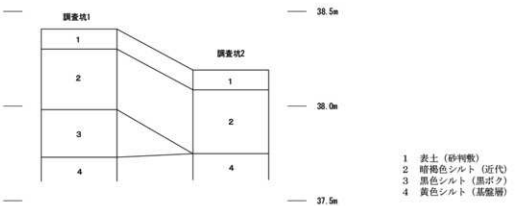
遺　構・遺　物　なし

小　結　今回の調査地周辺は、芝本遺跡のうちＡ地点と呼ばれており、過去には弥生時代中期の土器が散布し、古墳も数基存在していた(芝本古墳群)とされる地域である。近年では宅地化により遺物の散布もみられず、これまで発掘調査が行われたこともなかったため、芝本遺跡Ａ地点は状況が不詳のままであった。

そこで今回確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認できず、周辺にも遺物の散布はみられなかった。したがって、今回の調査地は、遺構・遺物の希薄な箇所であると考えられる。

なお、今回の調査地は狭小なため、芝本遺跡の範囲の変更については、今後の周辺における調査事例の増加によって判断すべきと考える。

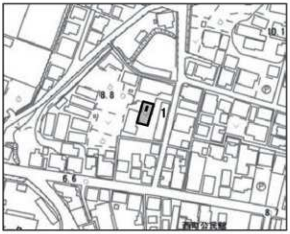
調査坑１土層



土層柱状図

24－22　殿畑遺跡(とのばたいせき)

項目	内容
所在地	北区三ヶ日町三ヶ日 216-1
調査期間	2012/8/23
時代	縄文、弥生、鎌倉、戦国
調査方法	1.5m幅　調査溝1箇所
検出遺構	小穴
出土遺物	縄文土器、弥生土器、山茶碗、渥美産甕、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口智博



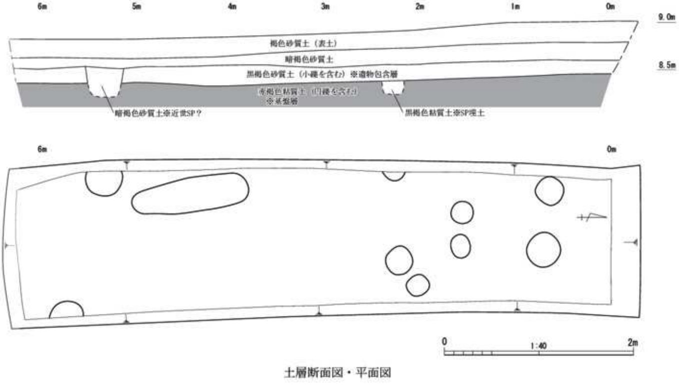
位置図(2,500分の1)

今回の調査地点は、平成22年2月に鍼灸接骨院の建設工事に伴い工事立会を実施した箇所の隣接地に位置する。工事立会の際には、竪穴建物跡と推定される埋土から条痕文土器や弥生土器が出土している。

対象地の現状は、畑と駐車場である。調査溝は住宅の建設予定地の中央に南北方向で設置した。調査溝内の土層堆積状況は、褐色砂質土の表土が全面的に堆積しており、その下には暗褐色砂質土を確認した。暗褐色砂質土の下には、小礫を含む黒褐色砂質土の遺物包含層が認められた。遺物包含層は後世の撹乱による影響が少なく、良好に残存していた。基盤層は円礫を含む赤褐色粘質土である。

調査溝内を精査した結果、複数の小穴と溝状の遺構を検出した。調査範囲が狭いため小穴の性格は明らかにできなかったが、掘立柱建物の柱穴の可能性が高いと考えられる。遺物は縄文土器、条痕文土器、弥生土器、山茶碗、内耳鍋など縄文時代弥生時代と中世に至る幅広い時期の土器が出土した。

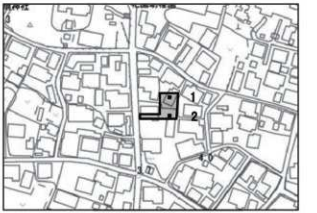
今回の確認調査の結果、対象地において遺構と遺物を確認し、遺跡が良好に残存していることが明らかになった。近傍には竪穴建物跡の存在が推定されることから、遺跡の中心地と推定される。



土層断面図・平面図

24－24　国方遺跡(くにがたいせき)

所 在 地	西区篠原町 9366
調査期間	2012/8/24
時　　代	戦国～江戸
調査方法	1.5m×1.5m　調査坑 2 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	かわらけ、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

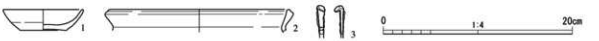
今回の調査地点は、花園幼稚園(興福寺)から南方に約 80mの住宅地内である。花園幼稚園の敷地内では、平成 23 年 4 月に試掘調査が行われ、若干の遺物が出土したが砂丘の斜面地にあり明確な遺構や遺物包含層は確認できなかった。

対象地の現状は宅地であるが、山土等による盛土は施されておらず、暗灰褐色砂の表土が全面的に堆積していた。表土下の土層堆積状況はいずれの調査坑も共通しており、順に暗褐色砂、暗黄褐色砂、暗褐色砂の堆積を確認した。基盤層は周辺と同様の灰色の砂丘砂層であった。

各調査坑の壁面の崩壊が激しく、基盤層に掘り込まれた遺構は十分な調査が行えなかったが、戦国時代から江戸時代のかわらけ(1)、内耳鍋の破片(2)や釘(3)が出土した。内耳鍋の破片は基盤層直上の層位からも出土しており、古代以前の遺物は確認できなかった。

今回の確認調査の結果、対象地では中世後半以降の遺物が出土したものの、古代以前の遺物については確認できなかった。現地表面から基盤砂層までは、1.6m以上の深さがあり戦国時代以降の遺物を包含する地層が厚く堆積していた。また、調査坑 2 では、さらに基盤層が低くなっていることから、対象地は砂丘の斜面地の可能性が高いと考えられる。このことから、対象地は遺跡の範囲に含まれるが、古代以前の遺構や遺物が希薄な地点と考えられる。

土層柱状図



出土遺物

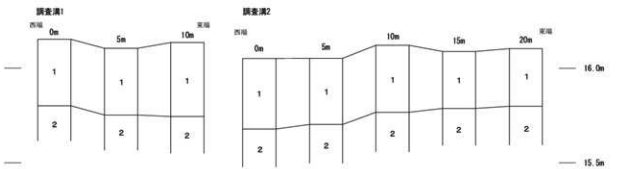
24－25　五日市Ｃ古墳群(いつかいちしーこふんぐん)

所在地	北区細江町三和字下前 2443-3
調査期間	2012/8/27
時　代	古墳
調査方法	1m幅　調査溝２箇所
検出遺構	なし
出土遺物	須恵器
特記事項	なし
調査担当	井口智博

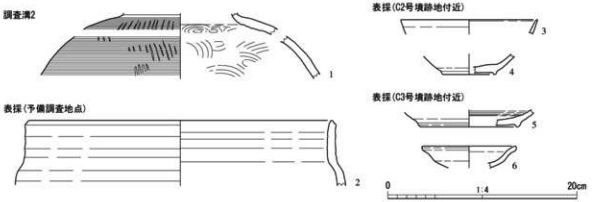
位置図(2,500 分の 1)

五日市Ｃ古墳群は、段丘上に位置する。若宮八幡神社を中心に小円墳３基からなる後期の古墳群であるが、いずれも開墾等で墳丘が失われている。過去の開発時に須恵器が出土した。現在も神社境内に石室石材と思われる大型の石材が散乱している。また、周辺の畑内からは奈良時代から鎌倉時代の土器の須恵器(3,5)、山茶碗(4,6)が採集できることから、古墳群の他に古代以降の遺跡も重複している可能性が高い。今回の調査地点は、若宮八幡神社から東方に約 70mのミカン畑内である。対象地はミカン畑として平坦に造成されており、現況から古墳の存在は確認できない。調査溝は東西方向に２箇所設置して調査を行った。調査溝内の土層堆積状況は、いずれも共通しており、表土である暗褐色砂質土の直下で赤褐色粘質土の基盤層を確認した。調査溝内を精査したが、遺構の存在は認められず、基盤層の直上でガラス片やビー玉が出土するなど激しく撹乱を受けていることが確認できた。

今回の確認調査の結果、対象地内はミカンの改植による天地返しを全面的に受けており、遺構は確認できなかった。調査溝内から須恵器(1)などが出土し、須恵器(2)が表採されたことから、何らかの遺構が存在した可能性が考えられるが、天地返しにより消滅したと考えられる。



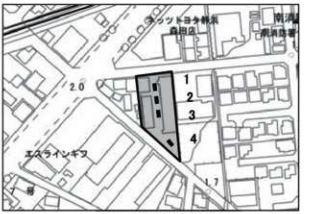
土層柱状図



出土遺物

24－26　鳥居松遺跡(とりいまついせき)

所 在 地	中区森田町156他
調査期間	2012/8/28
時　　代	弥生・奈良
調査方法	2m×3m　調査坑4箇所
検出遺構	土坑、自然流路(伊場大溝)
出土遺物	弥生土器、土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有



位置図(2,500分の1)

土層堆積状況　4箇所の調査坑のうち、北側の調査坑(1、2)と南側調査坑(3、4)とでは、土層堆積状況が異なっていた。

北側の調査坑(1、2)では、舗装の直下において茶褐色粘土(表土)およびその下に褐色粘土層(奈良時代、8世紀の遺物包含層)を確認した。奈良時代の遺物包含層の下には弥生時代の遺物包含層である暗褐色粘土層や暗紫色粘土層などを確認した。なお、調査坑1で確認した暗紫色粘土層は弥生土器片と炭化物を多く含み、通常の遺物包含層と異なる状況であった。大型の溝や竪穴建物など、規模の大きい遺構内埋土の可能性も考えられる。調査坑1では、弥生時代の遺物包含層の下に遺構が確認できた。これらの層の下は無遺物層で、灰色粘土もしくは、暗灰色粘土層、白灰色粘土層、黒色粘土層、黒色砂層(基盤砂層)の各層が堆積している。基盤層の標高は、調査坑2が高く、標高0.6mに至る。

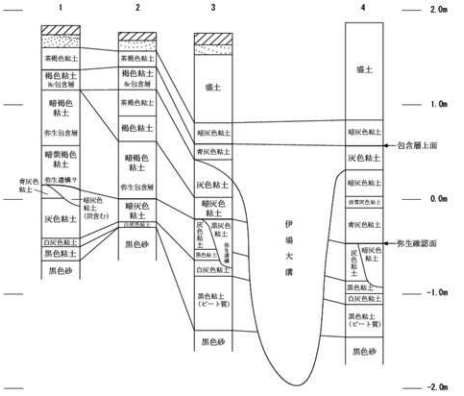
南側の調査坑(3、4)では、地表下に盛土があり、その下に旧水田耕作土(暗灰色粘土層)がみられる。その下には、奈良時代～中世の遺物包含層である青灰色粘土層もしくは灰色粘土層があり、灰色系の粘土層を挟んで下位には、弥生時代の遺構が確認できた。弥生時代の遺構検出面の標高は、マイナス0.6～0.4m程度である。これら遺構の下には、灰色粘土層、黒色粘土層、白灰色粘土層、黒色粘土層(泥炭質)、黒色砂層(基盤砂層)といった鳥居松遺跡で多く見られる自然堆積層が確認できた。基盤砂層の標高は、マイナス1.6m程度である。

遺　構　調査坑3の一部で伊場大溝(註1)の岸辺とみられる落ち込みを確認した。当該地の西側では2011年の予備調査によって、東側では2008年に実施した鳥居松遺跡5次調査によって、伊場大溝の位置が特定できていることから、今回実施した調査坑3と調査坑4の間に伊場大溝が流れていることが判明した。また、前述のとおり、調査坑1、3、4において弥生時代の遺構が確認できた。

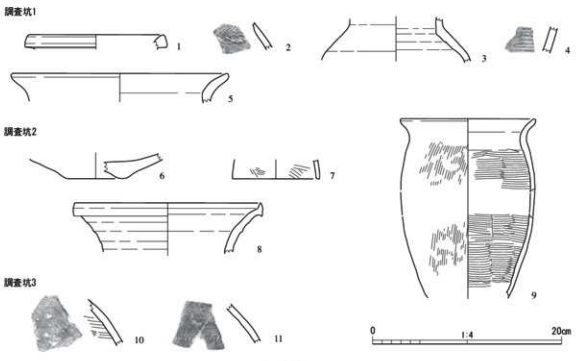
遺　物　すべての調査坑において、弥生土器(1,2,6,7,10,11)、奈良時代の須恵器(3,4,8)や土師器(5,9)が出土した。遺物包含層中に含まれる遺物量は比較的多い。とくに調査坑1では、奈良時代の遺物量が多く、遺跡の中心地に近い可能性がある。

小　結　今回の調査では、すべての調査坑において奈良時代もしくは弥生時代の遺構、遺物が確認できた。このことから、当該地は遺跡の範囲内にあたると判断できる。とくに、北側の調査坑では、奈良時代の遺物包含層の標高が高く、周囲に存在が想定できる敷智郡家関連施設が展開している可能性が考えられる。また、奈良時代の木簡をはじめ重要遺物を多数含む伊場大溝が、当該地を大きく横切っていることが判明した点も特筆できるだろう。

註１　古墳時代から奈良、平安時代に至る自然流路。敷智郡家跡である伊場遺跡群を貫き、木簡や墨書土器など古代文字資料が豊富に出土する。



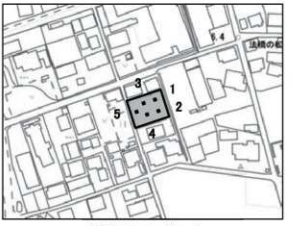
土層柱状図



出土遺物

24－27　森西遺跡(もりにしいせき)

所 在 地	東区和田町 159-1 他 6 筆
調査期間	2012/9/6
時　　代	弥生、奈良、中世
調査方法	2m×2m　調査坑 5 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	弥生土器、土師器、須恵器 山茶碗、山皿、かわらけ
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　5 箇所の調査坑における層位は大きくⅠ～Ⅷ層に分けられる。

Ⅰ層:表土・盛土。Ⅱ層:褐色砂。Ⅲ層:暗灰色粘土(白色砂ブロック含む)。一部では、同一色調でシルト(Ⅲ′層)や砂層(Ⅲ″層)が上位にみられる。Ⅳ層:青灰色粘土。Ⅴ層:黒灰色粘土。一部の調査坑で遺物を含む。Ⅵ層:黒色粘土。一部の調査坑で遺物を含む。Ⅴ層とⅥ層は一部で分層が難しい。Ⅶ層:褐色シルト。一部の調査坑で木材、小礫を含む。遺物は確認されない。Ⅷ層:青灰色砂。基盤層。

その他に、調査坑 5 では、Ⅵ層とⅦ層の間に灰白色粘土層と薄いピート層がみられた。

基盤層は、調査坑 2、4 においては現地表面から 4m近く掘り下げても確認することができず、南に向けて大きく下がっている様子が確認できる。

遺　構　調査坑 5 において、灰白色粘土層に 10ｃｍ程の盛り上がりがみられ、畦畔の可能性がある。その他遺構は確認されていない。

遺　物　調査坑 3～5 のⅤ～Ⅵ層から遺物が確認された。いずれも小片であるが、弥生時代後期の土器、8 世紀頃の須恵器・土師器、12～13 世紀頃の山茶碗・山皿・かわらけが出土している。層位による出土遺物の時期差は明確でない。

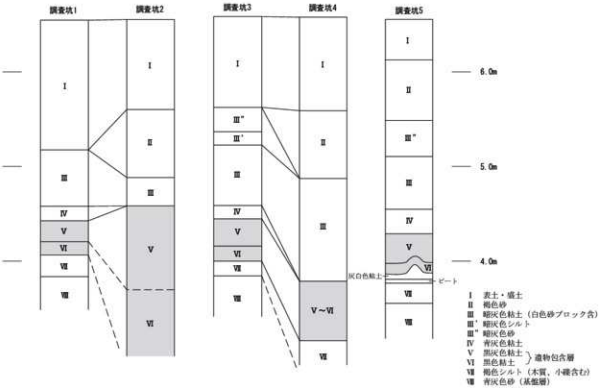
小　結　今回の調査地は、南に森西遺跡、東に松東遺跡、西に越前遺跡と隣接していたため、遺跡範囲を明確にさせることを目指して予備調査を実施した。その結果、少量ながらも遺物が確認され、弥生時代の遺跡が及んでいることが判明した。また、確定できる遺構はみられなかったが、畦畔らしき土層の状況がみられた。なお、調査区南側の基盤層が大きく下がっており、森西遺跡と調査区の間に旧河道などの湿地帯が存在している可能性がうかがえた。

したがって、今回の調査地は森西遺跡には含まれず、地形が連続しているとみられる松東遺跡の範囲の西端部と考えられる。

調査坑 3 土層

調査坑5土層

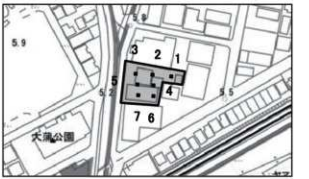
主な出土遺物



土層柱状図

24－29　大蒲町村東Ⅰ遺跡(おおかばちょうむらひがしいちいせき)

所 在 地	東区和田町 331-1
調査期間	2012/9/10
時　　代	弥生、奈良、平安
調査方法	2m×2m　調査坑 7 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	弥生土器、須恵器、灰釉陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

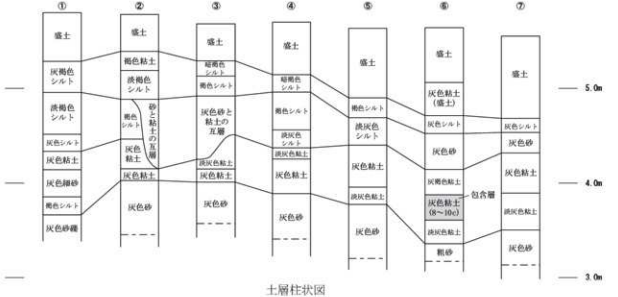


位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　7 箇所の調査坑とも、ほぼ並行した土層堆積状況が確認できた。各層位は概ね以下のとおりに整理できる。1 層:盛土、2 層:褐色系シルト層(旧表土)、3 層:淡褐色系シルト(調査坑 6･7 では灰色砂層)、4 層:灰色系粘土層(調査坑 6 で確認した遺物包含層を含む)、5 層:灰色砂もしくは砂礫層(基盤層)。基盤層の標高は調査坑 2～4 において高く、調査坑 6 がもっとも低かった。また、調査坑 2、3 では 3 層中に大きく掘り込まれて、砂と粘土が入り混じる層位が確認できた。この地層は洪水堆積層の可能性がある。

遺構・遺物　各調査坑では、遺構は全く確認できなかった。出土遺物も少ないが、調査坑 6 においてのみ、遺物包含層といえるような集中度が確認できた。調査坑 6 で検出した灰色粘土層を出土遺物の年代観から、8 世紀から 10 世紀頃の遺物を含む遺物包含層と捉える。　出土遺物には、調査坑 6 から出土した弥生土器(1)、奈良時代の須恵器(2)、平安時代の灰釉陶器(3)がある。

小　結　今回の調査で、大蒲町村東Ⅰ遺跡は大きく東には広がらないことが判明した。当該地の多く(調査坑 6 を除くすべての地点)は、遺物や遺構が確認できない遺跡の範囲外にあたるとみられる。いっぽう、調査坑 6 では、一定量の遺物が出土したことから、遺跡の範囲に及んでいると判断できる。調査坑 6 から出土した遺物は、調査地の東側と関連が高いと判断でき、東側にある木船廃寺跡の一部が当該地に及んでいると捉えてよい。

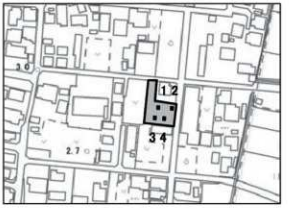


土層柱状図

出土遺物

24－30　村東遺跡(むらひがしいしせき)

所 在 地	南区東若林町 1448
調査期間	2012/9/10
時　　代	奈良、平安、鎌倉
調査方法	2m×1.5m　調査坑 4 箇所
検出遺構	遺物包含層、小穴
出土遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

今回の調査対象地は、村東遺跡の東よりに位置する。今年 5 月に北へ約 120mの地点で確認調査を実施し、墨書土器を含む古代の遺物が多数出土した。

対象地の現状は駐車場となっている。舗装等は施されておらず、一部を砕石で敷き均した状態であった。各調査坑の土層堆積状況は、北側の調査坑 1 と 2、南側の調査坑 3 と 4 がそれぞれ同様の堆積状況であった。調査坑 1 と 2 は暗灰褐色砂の表土の下で遺物を包含した褐色砂層を確認した。その下は、遺物を含む暗褐色砂層、基盤層である灰色砂層の順に堆積していた。調査坑 2 では、基盤砂層上を精査したところ、小穴を検出した。調査坑 3 と 4 の土層堆積状況は、北側の 2 箇所とやや異なっていた。暗灰褐色砂の表土の下に遺物を包含した褐色砂層と暗黄褐色砂層が堆積しているのはほぼ同様であったが、基盤である灰色砂層の標高が低く、その間に灰黄褐色シルトと黒灰褐色シルトの堆積を確認した。この 2 層も遺物を包含しているが、上層と比較すると遺物量は少なかった。

遺物は全ての調査坑から出土した。主に奈良時代の土師器や須恵器が中心であるが、鎌倉時代の山茶碗も少量含まれる。調査坑 3 からの出土遺物が特に多く、ほぼ完形の須恵器の坏身坏蓋(1～3)や広口壺(4)が出土した。

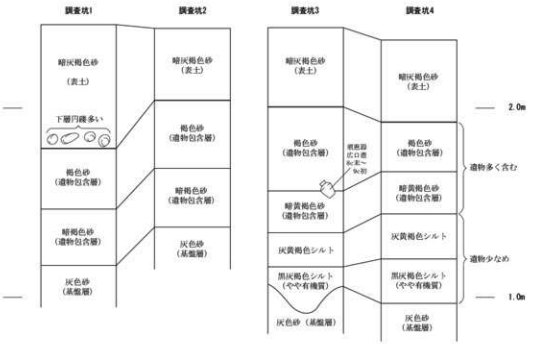
今回の調査の結果、全ての調査坑で明確な遺物包含層を確認し、一部では基盤層に掘り込まれた遺構も検出した。遺物は奈良時代のものを中心に多数出土したことから、対象地は遺跡の範囲内と判断できる。

調査坑 2 完掘状況

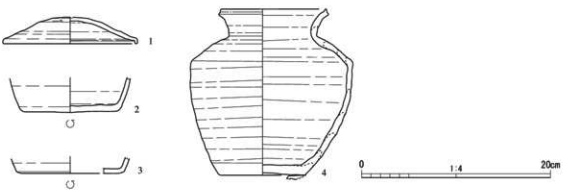
調査坑 3 完掘状況

調査坑 3 広口壺出土

出土遺物



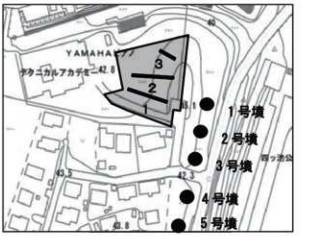
土層柱状図



出土遺物

24－31　一本杉古墳群
（いっぽんすぎこふんぐん）

所在地	中区幸四丁目 523-2 外
調査期間	2012/9/25、26
時　代	－
調査方法	1.5m 幅　調査溝 3 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	井口智博



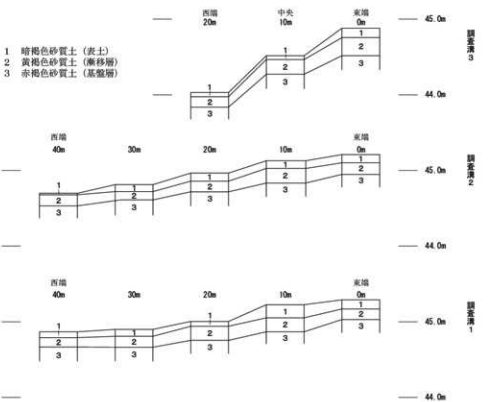
位置図（2,500 分の 1）

今回の調査対象地は、一本杉古墳群の西側に位置する。一本杉古墳群は円墳 6 基からなる古墳群であり、現在も山林の中に墳丘が残存している。

対象地の現状は、山林となっているが平坦な形状であり、古墳の盛り上がり等は視認できない。調査は、対象地内の東西方向に 3 箇所の調査溝を設定して行った。各調査溝の土層堆積状況はいずれも共通しており、腐葉土が主体の表土が全面的に堆積しており、その下には、黄褐色砂質土の漸移層が堆積していた。基盤層は赤褐色砂質土である。

遺物は調査溝 1 から須恵器の破片が 2 点出土した。出土地点の周辺を精査したが、古墳の周溝などの遺構は確認できなかった。

今回の調査の結果、須恵器の小破片が出土したものの、古墳の痕跡やその他の遺構は一切確認できなかった。このことから、対象地は遺跡の範囲外と考えられる。



土層柱状図

24－33　梶池遺跡(くちなしいけいせき)

所 在 地	浜北区宮口 3940 番 3
調査期間	2012/10/16
時　　代	近世
調査方法	2m×2m　調査坑 2 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	かわらけ
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　2 箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。Ⅰ層:褐灰色シルト(現耕作土)、Ⅱ層:暗褐色シルト(しまり弱)、Ⅲ層:暗褐色シルト(黄褐色ブロック混)、Ⅳ層:黄褐色シルト(基盤層)。なお、基盤層の標高は約 27.8mを測り、現表土との比高差は約 50cm である。

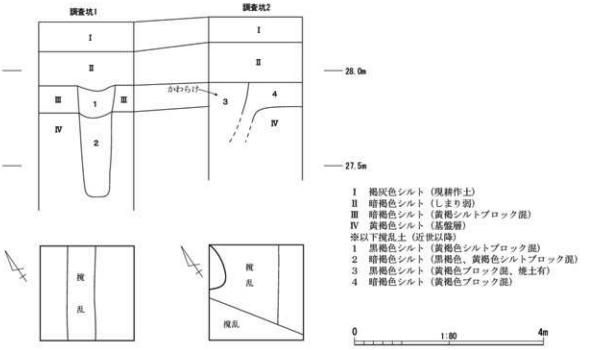
いずれの調査坑にも攪乱がみられた。

遺　構　なし

遺　物　調査坑 2 の攪乱土中から、かわらけの小片が 1 点出土したのみである。

小　結　今回の調査地周辺は、梶池遺跡の包蔵地範囲の北東端に含まれてはいるが、これまでに遺物の散布が認められていない箇所である。そこで予備調査を実施したが、遺構は確認できず、遺物も攪乱土中から近世とみられるかわらけ小片が 1 点出土したのみである。また、調査地付近を改めて踏査したが、遺物の散布はみられなかった。

したがって、今回の調査地は梶池遺跡の範囲外であり、遺跡の中心は今回の調査地より 200mほど南側の、過去に本調査が実施された一帯であると判断できる。



土層柱状図・平面図

24－34　東原遺跡(ひがしばらいせき)

所 在 地	浜北区新原 5316
調査期間	2012/10/24
時　　代	弥生
調査方法	2m×2m　調査坑 6 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	弥生土器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

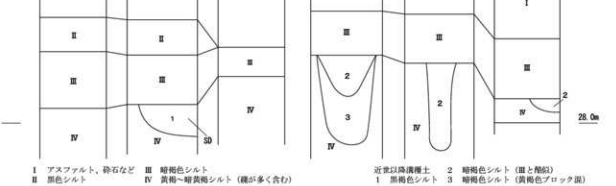
土層堆積状況　6 箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。Ⅰ層:盛土(アスファルト、砕石、コンクリート)、Ⅱ層:黒色シルト(近現代の層)、Ⅲ層:暗褐色シルト(弥生土器わずかに含む)、Ⅳ層:黄褐色～暗黄褐色シルト(礫を多く含む)(基盤層)。なお、基盤層の標高は南西へ向かってゆるやかに下がっており、北東の最も高い調査坑④で約 28.4m、南～西側の調査坑①②⑥で約 28.1m を測る。現地表(アスファルト舗装面)との比高差は約 50～90cm である。

遺　構　調査坑②④⑤⑥で溝状の掘り込みを確認した。調査坑④⑤⑥で検出された溝は同一の可能性がある。覆土の上層から弥生土器の小片がわずかに出土するのみで、時期の認定は難しい。ただ、覆土にしまりがなく黄褐色ブロックが混ざるような土層もみられることから、第 13・15 次調査(152 号線バイパス 1～2 次)や、33 次調査等でみられたような近世以降の新しい溝と考えられる。

遺　物　調査坑①以外の調査坑から弥生時代後期の土器の小片が各数点出土している。いずれもⅢ層か溝覆土 2 層からの出土である。その他の時期の遺物は出土していない。

小　結　今回の調査地周辺は、東原遺跡包蔵地範囲の西寄りに位置する。以前より遠州鉄道線路以西は遺物の散布があまりみられず、調査例に乏しいこともあって詳細が不明であった。

そこで予備調査を実施したが、弥生時代に認定できる遺構は確認できず、遺物も弥生土器の小片がわずかに出土したのみである。また、地形の状況も遺構・遺物が濃密な遠州鉄道線路以東より今回の調査地付近は低くなっている。したがって、今回の調査地は東原遺跡の範囲内ではあるが、遺構・遺物の希薄な遺跡の西端部と判断できる。なお、今後周辺の調査例の増加によっては、範囲の変更によって遺跡外と判断される可能性も考えられる。



土層柱状図

24－35　二俣城跡(ふたまたじょうあと)

所 在 地	天竜区二俣町二俣１０３４
調査期間	2012/10/31～11/16
時　　代	奈良、戦国
調査方法	3 調査区　調査溝 3 箇所
検出遺構	小穴、石垣、堀切
出土遺物	土師器、かわらけ、陶器、和釘
特記事項	なし
調査担当	井口智博

位置図(2,500 分の 1)

二俣城跡は、浜松市天竜区二俣町の丘陵上に位置する戦国時代の山城である。2009 年から城郭遺構の残存状態の確認と、今後の保存活用ための情報収集を目的として、発掘調査を実施してきた。これまでの調査で、本丸中仕切門跡など地下に埋もれた城の構造物の発見があった。今年度は、天守台、本丸土塁、堀切を対象に発掘調査を実施した。

本丸天守台の西側は、他の 3 面と比較して天守台基部の地面が高くなっており、積み上げられた石垣は見かけ上、他の面より低く見える。石垣基部が現状よりさらに下に埋没しているのか、土塁状の高まりを利用して石を積み上げたのか確認するため、石垣下端を発掘した。調査の結果、石垣の基部は現地表面から一段分埋没しているのを確認し、元々あった土塁状の高まりを利用したことが判明した。遺物は 16 世紀代の施釉陶器やかわらけが出土したが、瓦は全く出土しなかった。また、天守台北西隅の石垣下端を調査したところ、コンクリートの基礎上に石が積まれているのを確認した。二俣城の天守台については、一部に積み直しが行われていることが、地元住民などから証言を得ていたが、今回の調査によって積み直しの事実が明らかになった。

二の丸北側の本丸土塁には、過去の調査で本丸中仕切門跡から連続して石垣が構築されていることが明らかになっているが、今回はさらに西側に調査範囲を拡大した。土塁の上端は樹木の繁茂により大きく崩落しており、現状で観察できる石垣も積み直された形跡があるが、調査の結果、石垣の基部は残存していることが明らかになった。同時に二の丸側の平坦面の調査も行ったが、過去の耕作や公園整備により深く削り取られていることが確認できた。一部には二の丸造成時の整地層が確認できたが、そのさらに下に埋没している遺構を確認した。上層遺構の保護のため、一部を調査したに留まったが、堀尾氏改修以前の城郭遺構の可能性が高いと考えられる。

二の丸南側の堀切は、過去の調査から断面形が箱型を呈することが明らかになっているが、今回東側に調査溝を設定し、追加調査を行った。その結果、断面形が箱型を呈することが改めて確認できた。前回の調査では、堀切内から天目茶碗やかわらけなど多数の遺物が出土したが、今回の調査では、堀切の埋土内から遺物は出土しなかった。

今回の調査の結果、天守台西側の基礎構造が明らかになるとともに、本丸土塁を覆う石垣も確認した。今後は本丸や蔵屋敷等の曲輪内における建物遺構の確認が課題と言える。

二の丸北側石垣検出状況

24－36　中村遺跡(なかむらいせき)

所 在 地	中区東伊場１丁目 4467-1 他
調査期間	2012/11/7
時　　代	古墳～奈良、中世、近世
調査方法	幅 2m、1.5m　調査溝２箇所
検出遺構	土坑
出土遺物	須恵器、内耳鍋、陶器、焙烙鍋、陶磁器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　２本のトレンチにおける土層堆積状況は以下の通りである。

１層:表土・盛土(砕石、黒褐色シルトなど)。２層:暗褐色砂。３層:褐灰～灰色砂(基盤層)

１層が深く掘り込まれている箇所が多く、遺構検出面である３層上面は広範囲で攪乱を受けている。

なお、基盤層である３層上面の標高は北へ向かって上がっており、１トレンチの南側で 2.2m、北側で 2.6mを測る。現地表(砕石上面)との比高差は約 50～70cm である。

遺　構　１トレンチ、２トレンチでそれぞれ土坑２基を確認した。ただし、遺物が含まれるのは近世の焙烙鍋の小片を出土した２トレンチのＳK01 のみで、他の土坑の時期は不明である。ただ、２トレンチＳK01 と覆土は同様であることから同時代の遺構と推測される。

また、１トレンチ南端からは浅く広い落ち込みがみられた。出土遺物はみられないが、何らかの遺構の可能性がある。

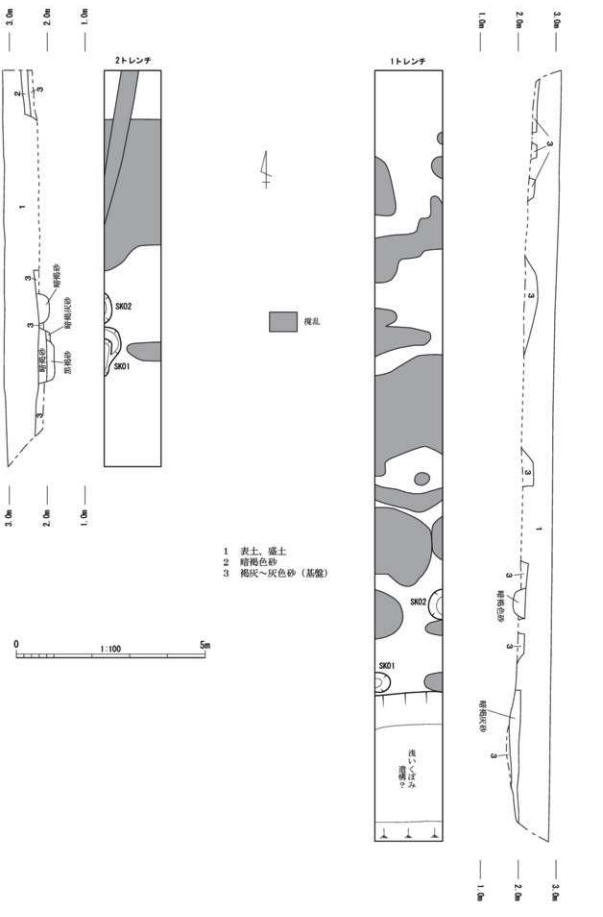
遺　物　須恵器破片及び中近世の内耳鍋や陶磁器などの破片が出土している。１層(表土・盛土)もしくは２トレンチＳK01 の覆土からの出土である。

小　結　今回の調査地は、中村遺跡の範囲のやや東寄りに位置する。都市計画道路竜禅寺雄踏線の拡幅工事の際に実施された調査では、今回の調査地の南側に隣接するａ区において奈良～平安時代の幅の広い溝等が確認されており、遺跡の範囲が及んでいる可能性が高いと考えられた。

調査溝２完掘状況

そこで予備調査を実施したが、全体的に攪乱が及んでおり、調査地南側部分で近世とみられる土坑等が確認されたものの、北側部分では遺構は確認できなかった。また、遺物は７～８世紀頃の須恵器や中近世の土師質土器、陶磁器類の破片が出土しているが、出土量は少なく、ほとんどが南寄りの盛土中から出土したものである。

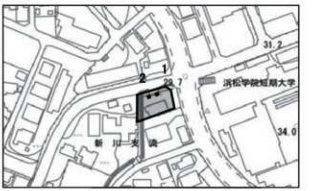
したがって、今回の調査地は中村遺跡の範囲内ではあるが、北側部分については遺構・遺物の希薄な箇所と判断できる。



土層断面図・平面図

24－37　住吉Ｂ古墳群(すみよしびーこふんぐん)

所 在 地	中区住吉１丁目 772-2 他２筆
調査期間	2012/11/20
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑２箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

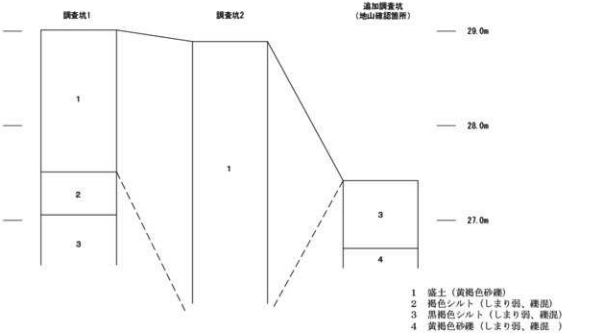
土層堆積状況　２箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。１層:盛土(黄褐色砂礫)、２層:褐色シルト、３層:黒褐色シルト。なお、調査坑では厚い盛土によって地山を確認することができなかったため、建物の建設予定地から外れた低い位置で、１箇所人力掘削を試みたところ、地山が確認されたので、４層:黄褐色砂礫(基盤層)を設定する。各層のしまりは弱く、礫を多く含んでいる。

また、調査坑及び現地に表出している土層の観察の結果、西へ向かうほど盛土の堆積が厚くなっており、地形の下がっている様子が確認できた。

遺構･遺物　なし

小　結　今回の調査地は、三方原台地の東縁部に立地する住吉Ｂ古墳群の範囲に含まれており、数十ｍ北側にはかつて古墳が存在したとされる。しかし、調査地の周辺は、谷が複雑に入り込んでいる地形のところに宅地造成が古くから行われており、古墳群の状況が把握しにくい状況であった。

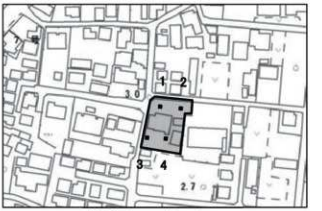
そこで、今回予備調査を実施したが、盛土が厚く施されており、遺構・遺物は確認できず、周辺にも遺物の散布はみられなかった。また、地形も周辺より低く、土層各層の堆積状況も礫混じりのしまりが弱いものであった。したがって、今回の調査地は、古墳の存在が希薄な谷部に位置すると判断される。



土層柱状図

24－38　村東遺跡(むらひがしいしせき)

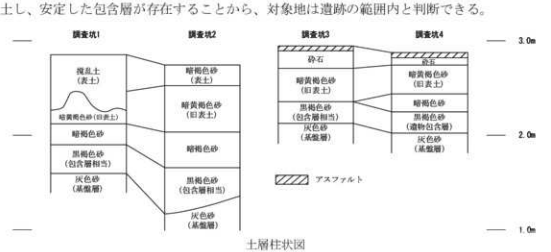
所 在 地	南区東若林町 1450-1
調査期間	2012/11/27
時　　代	奈良、鎌倉
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	井口智博



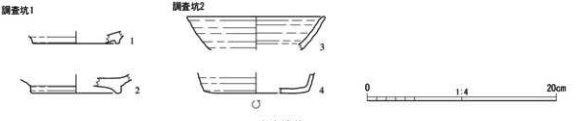
位置図(2,500 分の 1)

今回の調査地点は、村東遺跡のほぼ中央に位置している。過去には南東へ約 60mの地点と東へ約 90 mの地点で予備調査が行われ、古代の遺物が多数出土した。調査対象地の現状は、北側が宅地、南側が駐車場である。調査坑は既存の住宅を挟んで北側の庭先に 2 箇所、南側の駐車場に 2 箇所設定した。各調査坑の土層堆積状況はおおむね共通しており、宅地や駐車場の造成による表土の下には、暗黄褐色砂層の旧表土が堆積していた。その下には、基盤砂層の標高が高い調査坑 3 を除いて暗褐色砂層の堆積が確認できた。基盤砂層の直上には、黒褐色砂層が堆積しており、この層が遺物包含層に相当すると考えられる。基盤砂層の標高は北側の調査坑 1・2 と比較して、南側の調査坑 3・4 の方が高く、50～70 cmほどの高低差があったことから、砂丘の斜面地に当たると推定される。調査坑内を精査したが、調査範囲が狭かったことや、後世の撹乱が顕著で遺構の存在を確認することはできなかった。遺物は全ての調査坑から出土した。内容は奈良時代の土師器や須恵器(1,3,4)、鎌倉時代の山茶碗(2)などである。遺物の出土状況は、遺物包含層である黒褐色砂層からの出土量は少なかったが、遺物包含層の上層に 2 次的に堆積した暗褐色砂層に多くの遺物が含まれていた。

今回の調査の結果、東側の地点と比較して遺物量は少ないものの、古代から中世に至る時期の土器が出土し、安定した包含層が存在することから、対象地は遺跡の範囲内と判断できる。



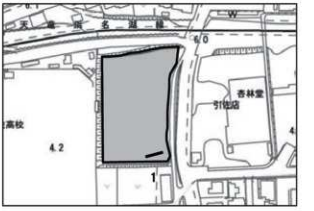
土層柱状図



出土遺物

24－39　本屋敷遺跡(もとやしきいせき)

所 在 地	北区引佐町金指 1456-9 外
調査期間	2012/11/29
時　　代	古墳
調査方法	1.5m×20m　調査溝 1 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	土師器
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

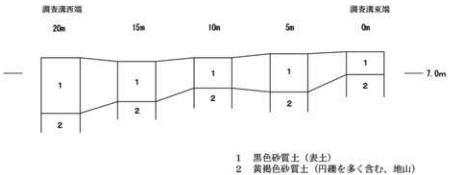
本屋敷遺跡は、旗本近藤家の屋敷跡とされる遺跡である。遺跡の範囲の大半は県立引佐高校の施設造成や、鉄道・道路の建設などにより削平され、旧地形は失われている。

対象地は、引佐高校の実習農場や職員住宅として使用されてきたが、現状は更地となっている。同じ敷地内では、旧引佐町時代に一旦開発計画が浮上し、引佐町教育委員会によって範囲確認調査が行われている(引佐町教育委員会 2005『本屋敷遺跡範囲確認調査報告書』)。この時の調査結果では、対象地北側に近世の堀跡と推定される溝が、敷地南西側の一部に弥生時代と古墳時代の遺物包含層が残存しているものの、大半は引佐高校の施設造成によって消滅したと判断された。

今回は、対象地南東の通路設置予定部分に調査溝を設定し、遺構と遺物の有無を確認した。位置関係は旧引佐町教委調査時の T6 と T9 の中間に当たる。調査溝内の土層堆積状況は、過去の調査と同様に、黒褐色砂質土の表土の直下で、円礫を多く含む黄褐色砂質土の基盤層を確認し、遺構は検出できなかった。遺物は調査溝東端で、土師器の高坏が出土したが、摩滅が著しく表土中に混入したものと判断される。

調査溝完掘状況

今回の調査の結果、調査溝の位置については、遺構や遺物包含層が存在しないことが判明した。ただし、旧引佐町教育委員会の調査のとおり、調査溝の北側や西側においては、遺跡が残存しているとみられ、当該地における遺跡の取り扱いは、今後も慎重に執り行う必要がある。

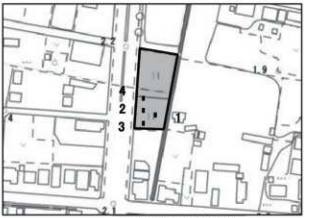


1　黒色砂質土（表土）
2　黄褐色砂質土（円礫を多く含む、地山）

土層柱状図

24－40　井村遺跡(いむらいせき)

所 在 地	南区若林町 3666-1 他 4 筆
調査期間	2012/12/5
時　　代	－
調査方法	2m×1m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　4 箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。1 層:灰色粘土層(耕作土)、2 層:黒色粘土層(有機質多く含む)、3 層:灰白色粘土層、4 層:暗緑灰色砂層。4 層は堆積が厚く、湧水が著しい。また、土層の観察の結果、北西へ向かって地形の下がっている様子が確認できた。

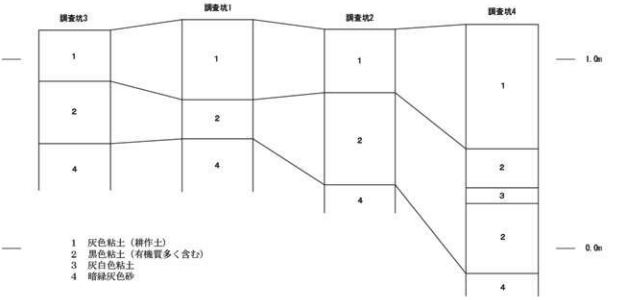
遺　構　なし

遺　物　なし

小　結　今回の調査地は、井村遺跡の範囲の北端に含まれてはいたが、現状が田地で地形が低く、遺物の散布もみられない状況であった。

そこで今回予備調査を実施したが、遺構・遺物は確認できず、現地周辺にも遺物の散布はみられなかった。また、調査坑の各土層も湿地帯の自然堆積状況を示していた。したがって、今回の調査地は、井村遺跡の範囲外と判断される。

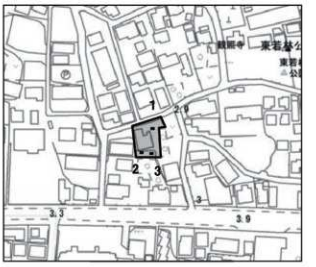
調査坑 1 土層



土層柱状図

24－41　村裏遺跡(むらうらいせき)

所 在 地	南区東若林町 1188-1 他 2 筆
調査期間	2012/12/13
時　　代	奈良、平安、中世、近世～近代
調査方法	1.5m×2m 調査坑 2 箇所 1.5m×1.5m 調査坑 1 箇所
検出遺構	溝、小穴
出土遺物	須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中世陶器、かわらけ、陶磁器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎

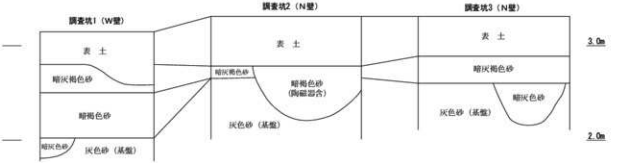


位置図(2,500 分の 1)

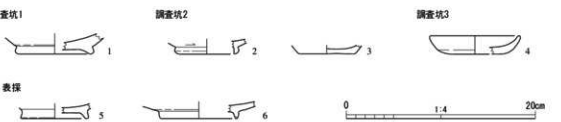
土層堆積状況　3 箇所の調査坑における基本層序は上から、表土(主に暗褐色砂)、暗灰褐色砂、基盤層(灰色砂)に分けられる。暗灰褐色砂は遺物を含むが、その量は少なく、近世末～近代頃の陶磁器も含んでいるため、新しい時期の層と考えられる。また表土にも遺物が含まれる。なお、調査区北側に設定した調査坑 1 の基盤層は、他の調査坑に比べ 60cm ほど低くなっており、北側に向かって地形が下がっている可能性も考えられる。

遺構・遺物　調査坑 1～3 で溝状の遺構が各 1 条、調査坑 3 で小穴が 1 基確認された。ただし、調査坑 2 の溝は、暗灰褐色砂を掘り込んでおり、近世末～近代頃の陶磁器を含む。他の遺構からは出土遺物がみられないため、時期は不明である。各調査坑から須恵器、灰釉陶器(2,5,6)、山茶碗(1)、中世陶器、かわらけ(3,4)などが出土したが、いずれも小片である。ほとんどが表土及び暗灰褐色土からの出土であり、遺構覆土からの出土はみられない。

小　結　今回の調査地は、村裏遺跡の範囲の西寄りに位置するが、東若林遺跡にも隣接しており、遺跡の多い地域である。そこで予備調査を実施したが、新しい時期の層である表土や暗灰褐色土から遺物が出土するものの、遺物包含層や遺構の時期を示すような出土遺物は確認できなかった。したがって、今回の調査地は村裏遺跡の範囲内ではあるが、近年において遺物包含層や一部の基盤層上部が失われていると判断できる。



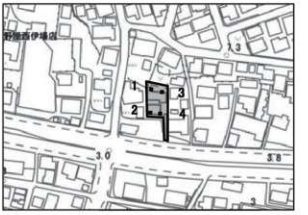
土層柱状図



出土遺物

24－42　三永遺跡(さんえいいせき)

所 在 地	中区西伊場町 3916-1 外
調査期間	2012/12/18
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑 4 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	井口智博



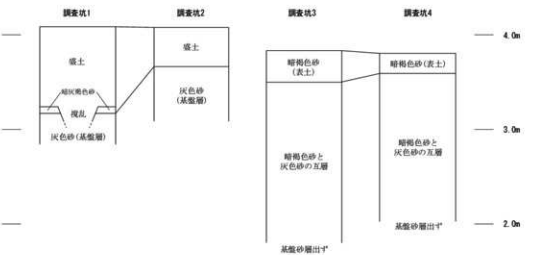
位置図(2,500 分の 1)

対象地は三永遺跡 1 次調査区(調査当時の呼称は梶子北遺跡三永地区)北側の住宅地内に位置する。

調査地点の旧状は、住宅地であり、既存の住宅は解体し更地となっていた。調査坑を精査したところ、北側に位置する調査坑 1 と 2 は過去の住宅建設による撹乱が顕著であった。特に調査坑 2 は、住宅建設時の造成土を除去すると直下で灰色砂の基盤砂層が検出できた。北側の住宅とは 1m以上の高低差があり、住宅の建設に際して砂丘の高まりを削平した可能性が高い。南側に位置する調査坑 3 と 4 では、表土を除去すると暗褐色砂と灰色砂が互層になって堆積していた。この層の堆積は厚く 1.7mほど掘削したが灰色の基盤砂層には達しなかった。暗褐色砂と灰色砂は非常に細かいピッチで互層に堆積しており、人為的な造成によるものではないと考えられる。斜面からの流下、風による飛散等で自然に堆積したものと推定される。

調査坑 3 完掘状況

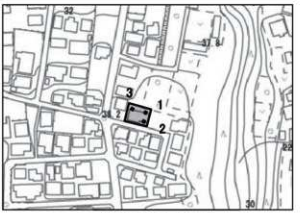
今回の調査の結果、いずれの調査坑からも遺物は全く出土せず、遺構の存在も確認できなかった。現地の地形や土層堆積状況からみて、対象地は遺跡の範囲外と考えられる。



土層柱状図

24－43　権現谷遺跡（ごんげんやいせき）

所 在 地	中区住吉１丁目 772-2 他２筆
調査期間	2012/12/18
時　　代	－
調査方法	2m×2m　調査坑３箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

土層堆積状況　３箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。

１層：表土

２層：黒褐色シルト（粘質強）

３層：橙褐色シルト（粘質強、

今回の調査地は台地上であるため、現地表面から基盤層上面までの深度は 15～25cm と非常に浅い。

遺　構　なし

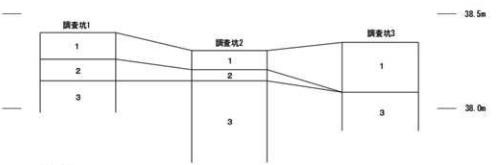
遺　物　なし

調査坑１土層

小　結　今回の調査地は、権現谷遺跡の範囲の西端に位置するが、これまで当遺跡内での調査歴はなく、遺構・遺物の状況は不明であった。

そこで予備調査を実施したが、遺構・遺物は全く確認できず、周辺を踏査しても遺物の散布はみられなかった。

したがって、今回の調査地は権現谷遺跡の範囲外と判断できる。

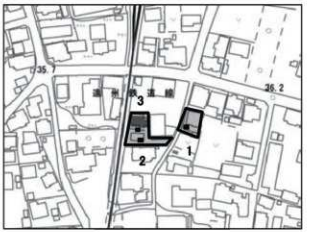


1　表土
2　黒褐色シルト（粘質強）
3　橙褐色シルト（粘質強、礫混）－基盤層

土層柱状図

24－44　芝本遺跡(しばもといせき)

所 在 地	浜北区於呂 2841 他 2 筆
調査期間	2013/1/10
時　　代	－
調査方法	1m×2m　調査坑 2 箇所 1.5m×1.5m　調査坑 1 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

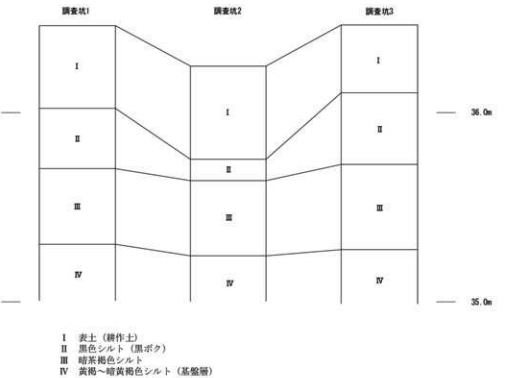
土層堆積状況　3 箇所の調査坑における土層堆積状況は以下の通りである。Ⅰ層:表土(耕作土)、Ⅱ層:黒色シルト(黒ボク土)、Ⅲ層:暗茶褐色シルト、Ⅳ層:黄褐色～暗黄褐色シルト(基盤層)。現況地盤から基盤層上面までの深さはおよそ1.0～1.1mである。

遺　構　なし

遺　物　なし

小　結　今回の調査地は、芝本遺跡の範囲の西に隣接しており、これまでに周辺で調査が実施されていない地域であった。

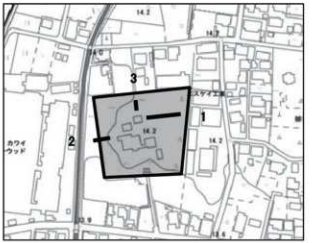
そこで今回予備調査を実施したが、遺構・遺物は確認できず、現地周辺にも遺物の散布はみられなかった。したがって、今回の調査地は、芝本遺跡の範囲外であると判断される。



土層柱状図

24－45　万斛西遺跡(旧鈴木家屋敷跡)
（まんごくにしいせき）

所在地	東区中郡町 980
調査期間	2013/1/15～22
時　代	古墳～江戸
調査方法	幅 1.5m　調査溝 3 箇所
検出遺構	溝、小穴、土坑
出土遺物	土師器、須恵器、山茶碗、陶器 かわらけ、内耳鍋、焙烙鍋、磁器
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

鈴木家は、初代良宗が応永 2 年(1395 年)没とされ、江戸時代は筆頭古独礼庄屋として代々万斛地区の庄屋を務め、近代に至っても郡会議員、村長など地域の代表としての役割を担ってきた家柄である。徳川家康を始め、歴代浜松城主との関わりも深く、家康が鷹狩りの折、鈴木家に立ち寄ったとの伝承も残る。

屋敷地の現状は、約 100m四方の方形の敷地に母屋、土蔵、納屋、弓道場などの建物が残存している。屋敷地の縁辺に明確な土塁状の高まりや堀の存在は確認できないが、屋敷地の西側には土塁の痕跡と考えられる僅かな高まりが存在する。

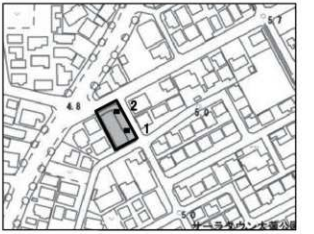
今回の調査では、調査溝を屋敷地の東側、西側、北側の 3 箇所に設定した。屋敷地東側の調査溝 1 では、西側を中心に土坑、小穴、溝等の遺構を確認した。土層堆積状況は、表土下から基盤である灰色砂礫土の直上まで暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂質土が堆積しており、この層位に古墳時代後期から近世に至る時期の遺物が包含されていた。後世の耕作等により著しく撹拌されているものと考えられる。調査溝の中ほどに位置する SD08 からは、戦国時代末期から江戸時代の土器が多数出土した。溝は南北方向に延びており、屋敷の区画溝の可能性が高い。屋敷地西側の調査溝 2 では、現況の屋敷地の境界に調査溝を設定した。調査溝内を精査したところ、東端で溝状遺構を確認し、古墳時代後期の土器がまとまって出土した。また、小穴を複数確認し、一部から古瀬戸の壺片が出土したことから、中世の掘立柱建物が存在する可能性が高い。屋敷地北側の調査溝 3 では、東西方向に延びる 2 条の溝を確認した。このうち SD04 は延長方向が調査溝 1 で検出した SD08 と直角に交わる可能性が高く、同一の区画を形成していた可能性が高い。

調査溝 1 完掘状況

今回の調査の結果、旧鈴木家屋敷の地下に古代～近世の遺構と遺物の存在を確認した。旧鈴木家屋敷の一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないため、今後、万斛西遺跡として新規登録を行う。

24－46　大蒲町村東Ⅱ遺跡
（おおかばちょうむらひがしにいせき）

所 在 地	東区大蒲町 113-1
調査期間	2013/1/24
時　　代	古墳～奈良、中世
調査方法	2.5m×2.5m　調査坑 2 箇所
検出遺構	堀
出土遺物	土師器、須恵器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図（2,500 分の 1）

土層堆積状況　調査坑 1 における土層堆積状況は、表土と新しい時期の堆積とみられる灰褐色土が上部に堆積し、その下に遺構覆土とみられる粘土を主体とした層がみられる。基盤層は褐色砂礫である。遺構覆土とみられる層と基盤層の間には、鉄分が数 cm の厚さで堆積しており、常時滞水していた状況がうかがえる。一方、調査坑 2 における土層堆積状況であるが、上部の表土～灰褐色土や基盤層は、調査坑 1 とほぼ同様の状況を示すが、その下の灰色粘質土、灰色細砂、灰褐色粘土は水平な堆積状況を示しており、遺構の存在はうかがえなかった。

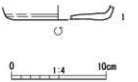
現況表土面の標高は約 5.0m、調査坑 1 の遺構確認面は標高 3.7m、基盤層の標高は約 3.1m である。

遺　構　調査坑 1 で遺構が 1 基確認された。大型の遺構で全体像はつかめないが、東へ向かって立ち上がっている。調査地は中世の蒲屋敷跡の堀と推定されている箇所にあたり、遺構の底面には常時滞水していた状況を示す鉄分の堆積がみられることから、検出した遺構は堀の一部の可能性が考えられる。

遺　物　土師器と須恵器の破片(1)が出土したが、いずれも小片で量もわずかである。出土した全てが新しい時期の堆積とみられる灰褐色土からの出土であり、遺構覆土からの出土はみられなかった。

小　結　今回の調査地は、大蒲町村東Ⅱ遺跡の範囲のほぼ中心部に位置し、中世の蒲屋敷跡の堀の北東部と推定されていた場所である。そこで予備調査を実施したところ、出土遺物こそわずかではあったが、調査坑 1 において堀の一部の可能性がある大型の遺構が確認された。したがって、今回の調査地は包蔵地の範囲内であり、蒲屋敷の一部にあたると推定される。

土層柱状図



出土遺物

24－47　郷ヶ平古墳群
（ごうがひらこふんぐん）

所在地	北区都田町 16-72
調査期間	2013/2/1～12
時　代	古墳
調査方法	1m×21m　調査溝 1 箇所
検出遺構	周溝
出土遺物	円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器
特記事項	なし
調査担当	和田達也

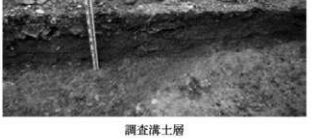
位置図(2,500 分の 1)

対象地の現状は特別養護老人ホーム第二九重荘の敷地内であり、市指定史跡の郷ヶ平 4 号墳と接する。対象地の北側には 1･3 号墳(2011 年調査)が位置し、その北側は谷である。また、西側も数基の古墳(推定)を挟んで谷がある。4 号墳は、郷ヶ平古墳群において東側に位置しており、唯一、墳丘が遺存し、市指定史跡に指定されている前方後円墳である。過去の調査により、墳丘は、全長 26.5m を測り、周溝は、鍵穴形を呈すことが指摘されている(浜文振 2006)。

検出遺構　調査溝中央部において墳丘裾部を確認し、調査溝の南と北においては周溝外縁を検出した。周溝の深さは検出面から最大で 40cm を測る。

層　位　対象地内の基本層序は、表土や攪乱と暗褐色粘質土、橙色粘質土(地山)、明黄褐色砂礫土(地山)である。検出された 4 号墳の周溝の埋土は埴輪をほとんど含まない褐色粘質土と埴輪を多く含む暗褐色粘質土である。周溝底から順に暗褐色粘質土、褐色粘質土、暗褐色粘質土の順に堆積がみられ、大きく 2 回に分けて埴輪が周溝に埋没した様子が窺える。ただし、上層と下層から出土した埴輪に時期は認められず、同時期に樹立された埴輪が、時間差をもって埋没したと捉えてよい。

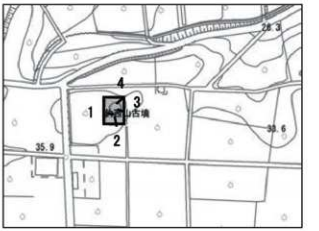
出土遺物　出土遺物は埴輪と須恵器が周溝の墳丘に近い部分を中心に出土した。遺物の大半は円筒埴輪と朝顔形埴輪であり、過去の調査により出土したものと同様にアテ具痕や倒立技法が認められるものを含む。また、須恵器坏蓋が埴輪の下から出土した。この須恵器坏蓋は 6 世紀中葉(TK10 型式期)と捉えられ、埴輪の時期とも矛盾しない。さらに、須恵器甕も埴輪の出土範囲からやや南にずれた位置から一定量出土した。


調査溝土層

小　結　今回の予備調査により後円部の墳裾と周溝が確認でき、古墳の全長が 26.1m、後円部周溝の幅は 4～5m と推定される。また、出土遺物から 4 号墳の築造時期が 6 世紀中葉に求められることを追認できた。

24－48　釣古墳群(西山古墳)
(つりこふんぐん)

所在地	北区三ヶ日町釣 413-3
調査期間	2013/2/13～22
時代	古墳、鎌倉、戦国
調査方法	幅 0.6m　調査溝 4 箇所
検出遺構	横穴式石室、周溝
出土遺物	須恵器、山茶碗、内耳鍋
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

西山古墳は釣古墳群を構成する古墳の 1 つ(釣 12 号墳)である。釣古墳群は 18 基の古墳からなるが、ミカン畑の開墾により破壊が進み、完存している古墳は西山古墳のみとなった。古墳は横穴式石室が良好に遺存しており、明治時代に地元住民によって石室内が発掘され、直刀、土師器等が出土したとされるが、現在は全て散逸し存在しない。平成 14 年に古墳の墳丘測量と石室の実測が行われ、直径 14.7 m、石室の推定全長 8mとの調査結果が出た。

今回の調査では、埋没したままとなっている石室入口の確認と、墳丘規模の確定のため、石室前面に 1 箇所、墳裾に 3 箇所の調査溝を設定した。

石室前面の調査溝 1 では、以前の測量調査の結果から、石室前庭部に相当する位置に露出している石材周辺を調査した。調査溝内を精査した結果、露出した石材と連なる形で石室の前庭側壁を検出した。前庭側壁は若干の崩落があるものの、3 段分の石材を確認した。奥壁から石室入口までの全長は 8.0m、前庭部の幅は 1.2mである。前庭部の床面を中心に須恵器の坏身、坏蓋、高坏、ハソウ、提瓶の破片が出土した。

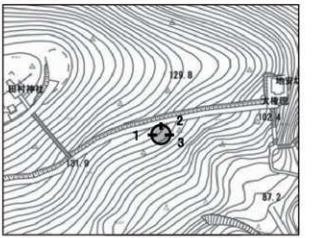
墳丘外周に設定した調査溝 2～4 では、本来の墳裾を確認した。このうち調査溝 2 と 3 では墳裾に置かれた角礫を検出した。角礫は長軸 20～30 ㎝程度の大きさで、調査溝 4 では検出できなかったことから、墳丘の前面のみに置かれていると推定される。今回検出した墳裾から規模を推定すると直径 14.6 mとなる。遺物は須恵器の高坏、提瓶、甕が出土した。

今回の調査の結果、西山古墳の石室前庭部を確認し、石室の本来の規模を確認できた。また、古墳の墳裾を確認し、古墳の規模の手がかりも得ることができた。墳裾には、角礫を配置した石列が存在すると考えられ、墳丘の構築過程からも隣接する三河地域の古墳との関連をうかがわせる。西山古墳の構築時期は出土した須恵器から 6 世紀末葉から 7 世紀初頭と推定される。今後は石室の全容解明に向けた調査が必要と考えられる。

調査溝 1 完掘状況

24－49　泉A古墳群(将軍塚古墳)
(いずみえーこふんぐん)

所在地	浜北区根堅字泉山
調査期間	2013/2/25～28
時代	古墳
調査方法	4m×0.5m　調査溝3箇所
検出遺構	古墳
出土遺物	なし
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500分の1)

調査対象となった泉A1号墳(将軍塚古墳)は、群中で唯一横穴式石室が開口している古墳として古くから知られている。横穴式石室の特徴から6世紀後葉から7世紀前葉頃に築かれた古墳と考えられる。墳丘や石室の測量は行なわれているが、これまで本格的な発掘調査は行われていない。今回の調査では、墳丘の規模・構造や周溝の有無などを把握するため、墳丘の裾部3箇所(西側、北側、東側)に調査溝を設定した。調査溝の配置及び土層断面図は詳細報告(p.118)に示した。

調査の結果、いずれの調査溝でも、墳丘盛土及び周溝を確認することができた。墳丘盛土は、暗黄褐色の旧表土の上に、暗褐色土や暗橙褐色土などを盛土している様子が確認された。

なお、調査溝3(墳丘東側)では、墳丘盛土内に構築されたとみられる石積みが検出された。他の調査溝ではこうした構造は確認されず、古墳の東側が急傾斜になっていることから、横穴式石室の構築に伴い土留めを目的として部分的に構築された可能性が考えられる。

周溝については、いずれの調査溝でも外側の上端を確認することができなかった。調査溝1(西側)、調査溝2(北側)ではトレンチを外側に拡張すれば検出可能である。一方、調査溝3(東側)は急傾斜であり、もとより立ち上がりが存在しなかった可能性もある。

これまで本古墳では出土遺物が知られていなかったが、今回の調査でも遺物は全く出土しなかった。

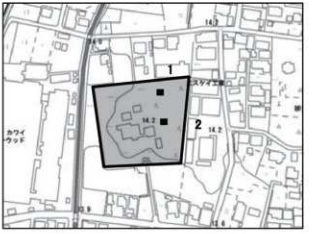
今回の調査の結果、周溝の検出状況から東西11.5m、南北約12mの円墳であることが判明した。また、部分的な確認ではあるが、土留め状の石積みが墳丘内にみられることは注目される点である。なお、いずれの調査溝からも遺物は全く出土せず、出土遺物から築造時期をうかがい知ることはできなかった。

調査区全景(北より)

試掘溝3完掘状況

24－50　万斛西遺跡(旧鈴木家屋敷跡)
(まんごくにしいせき)

所在地	東区中郡町 980
調査期間	2013/3/5
時代	奈良、鎌倉、戦国、江戸
調査方法	3m×2m　調査坑 2 箇所
検出遺構	溝
出土遺物	須恵器、山茶碗、陶器、内耳鍋、羽付釜かわらけ、磁器
特記事項	なし
調査担当	井口智博



位置図(2,500 分の 1)

鈴木家は、江戸時代は筆頭古独礼庄屋として代々万斛地区の庄屋を務め、近代に至っても郡会議員、村長など地域の代表としての役割を担ってきた家柄である。現在の屋敷地は、約 100m四方の方形の敷地に母屋、土蔵、納屋、弓道場などの建物が残存している。

今回の調査では、屋敷地の北東側と東側の 2 箇所に調査坑を設定した。北東側の調査坑 1 では、調査坑の西寄りに溝状遺構を確認した。遺構の西側の肩は調査区外のため明らかにできなかったが、幅 1.5m以上、深さ 0.6mの溝である。遺構埋土の上層は、灰色シルトが堆積しており、後述する調査坑 2 の溝と埋土の特徴が異なる。また、溝の位置関係もやや西に振れた位置にあることから、現状では同一の溝とは判断しがたい。遺物は、須恵器、山茶碗の他、13 世紀後半の常滑産甕、17 世紀末～18 世紀前半の陶器が出土した。

東側の調査坑 2 では、上層から炭化物とともに大量の陶磁器が出土した。基盤層上面を精査したところ、南北に延びる溝状遺構を確認した。溝は幅 1.4m、深さ 0.6mの規模である。遺物は須恵器や山茶碗、16 世紀代の瀬戸・美濃産と志戸呂産擂鉢、内耳鍋、羽付釜、17 世紀半ばの瀬戸・美濃産端反碗が出土した。遺構の規模や掘削方向、遺物の時期から判断して、既に確認されている SD08 と同一の遺構と判断される。上層から出土した陶磁器類は、江戸時代から近代に至る幅広い時期のものが含まれる。

今回の調査の結果、戦国時代から江戸時代に掘削された溝の延長部分を確認することができた。屋敷地の南北方向に区画溝が掘られ、その時期も判明したが、屋敷地全体の区画と検出した遺構との関係を明らかにするには、今後さらなる調査が必要である。

調査坑 1 完掘状況

24－51　笠井若林遺跡(かさいわかばやしいせき)

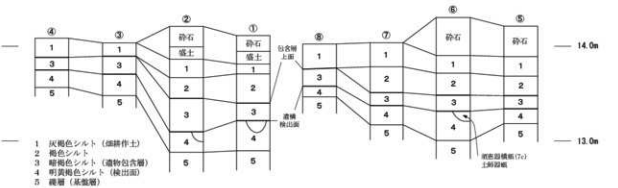
所 在 地	東区笠井町 1332、1374
調査期間	2013/3/15
時　　代	奈良～鎌倉
調査方法	2m×2m　調査坑 8 箇所
検出遺構	小穴、溝
出土遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

位置図(2,500 分の 1)

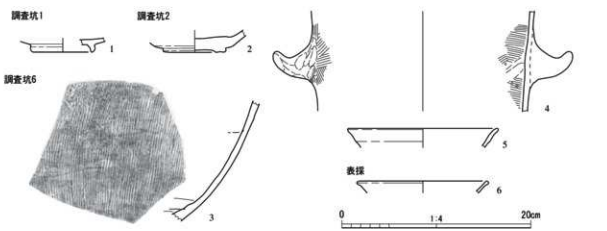
土層堆積状況　当該地の土層堆積状況は、1 層:灰褐色シルト(畑耕作土)、2 層:褐色シルト、3 層:暗褐色シルト(7～13 世紀の遺物包含層)、4 層:明褐色シルト層(遺構検出面)、5 層:褐色砂礫層(基盤層)である。対象地の西側(調査坑③、④、⑦、⑧)は基盤層が高く、東側(調査坑①、②、⑤、⑥)は低い。遺構、遺物は東側に多く認められる。

遺構・遺物　調査坑①、②、⑥では、4 層の直上において、暗褐色シルト層を埋土とする遺構(小穴、溝など)を確認した。調査坑⑥では、遺構の中から須恵器横瓶、土師器甑(もしくは鍋)が出土した。すべての調査坑において遺物が出土した。とくに調査坑②、⑥では出土量が多かった。出土遺物には、須恵器(3)、灰釉陶器(1,6)、山茶碗(2,5)、土師器(4)がある。遺物の帰属時期は 7～13 世紀である。

小　結　今回の調査によって、当該地は笠井若林遺跡の範囲内で、7～13 世紀の遺構、遺物が良好な状態で埋没している地域であることが判明した。とくに、敷地の西側(調査坑①、②、⑤、⑥)では遺物包含層が深く埋没しており、遺跡の保存状態が良好であった。



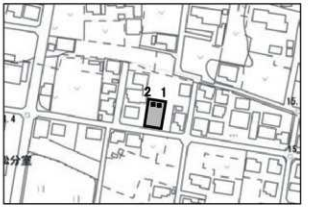
土層柱状図



出土遺物

24－52　橋爪遺跡(はしづめいせき)

所 在 地	東区中郡町 370-2
調査期間	2013/3/18
時　　代	中世
調査方法	2m×2m　調査坑 2 箇所
検出遺構	なし
出土遺物	かわらけ、山茶碗、陶器
特記事項	なし
調査担当	鈴木京太郎



位置図(2,500 分の 1)

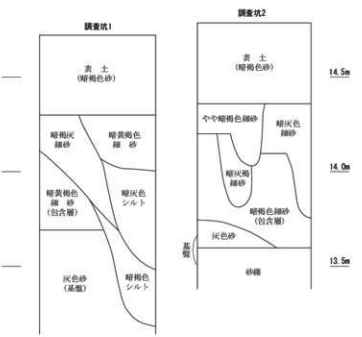
2 箇所の調査坑における土層の状況は、上から表土(暗褐色砂)、暗褐色～暗黄褐色細砂の遺物包含層、基盤層(灰色砂、砂礫)で、表土層直下からの掘り込みが両調査坑にみられた。

調査坑 1 の掘り込みは、大型の溝状遺構とみられるが、調査坑の範囲ではその形状を把握できなかった。表土層直下から掘り込まれており、掘削面はすでに失われているとみられる。遺物はかわらけ(1)、山茶碗(2)、陶器(3,4)、白磁器(5)などの小片が数点出土している。出土遺物に時期差があり、掘り込まれている包含層からもかわらけ等が出土していることから、この遺構が掘削された時期は近世以降の新しい時期とも考えられるが、磁器や瓦など新しい遺物が含まれておらず判然としない。

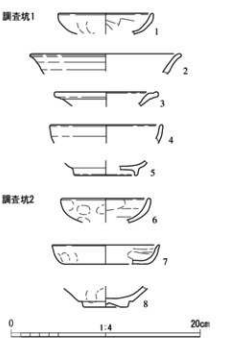
調査坑 2 でも同様の状況で、表土層直下から掘り込みがみられ、かわらけ(6,7)等が出土するが、包含層からも戦国期頃とみられる陶器片(8)が出土している。

現況表土面から基盤層までの比高差は 1～1.2m、表土層の厚さは約 40cm である。

今回の調査地は、橋爪遺跡の範囲の西端に位置する場所である。そこで予備調査を実施したところ、中世の遺物がいずれの調査坑からも確認され、時期は不明であるが遺構が確認された。
したがって、今回の調査地は包蔵地の範囲内と判断できる。



土層柱状図



出土遺物

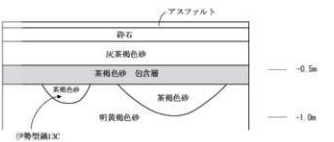
24－64　上大瀬遺跡(かみおおせいせき)

所 在 地	東区大島町
調査期間	2012/10/15
時　　代	鎌倉
調査方法	立会
検出遺構	遺物包含層、溝もしくは土坑
出土遺物	伊勢型鍋
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

位置図(2,500 分の 1)

土層断面

上大瀬遺跡の南東部において下水道工事に伴う工事立会いを実施した。舗装の下に、1 層：砕石層、2 層：灰茶褐色砂層、3 層：黄褐色砂層、4 層明黄褐色砂層の各層位を確認した。3 層が遺物包含層、4 層が地山に相当する。4 層中に掘り込まれた遺構(溝もしくは土坑)と遺物を確認した。出土遺物は 13 世紀頃の伊勢型鍋の口縁(1)である。調査区とその周辺には鎌倉時代の遺構が埋没していることが確認できた。

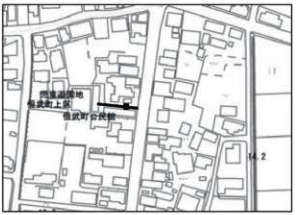


土層柱状図

出土遺物

24－68　笠井遺跡(かさいいせき)

所 在 地	東区恒武町 440
調査期間	2012/11/9
時　　代	奈良
調査方法	立会
検出遺構	遺物包含層
出土遺物	土師器
特記事項	なし
調査担当	川西啓喜

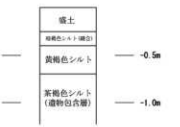


位置図(2,500 分の 1)

掘削工事に立会い、遺跡の埋没状況を確認した。掘削深度は地表面下 1.1m 程度である。地表面下 0.7m で暗茶褐色シルトの遺物包含層が確認され、奈良時代の土師器の破片が出土した。よって、当該地は遺跡の範囲内と判断できる。今回の立会箇所の北西隣接地におけるゴミ捨て穴の排土から奈良時代の土師器(1,2)、山皿(3)を採取した。遺物は、灰色粘土内に含まれており、地表面下約 1.5m に展開する包含層と考えられる。遺物包含量は、立会箇所で見られた暗茶褐色シルト層より多い。

今回の立会では、掘削深度が 1.1m 程であり灰色粘土層を確認することはできなかったが、地表面下 1.5m 付近に存在している可能性がある。

土層断面



土層柱状図

出土遺物

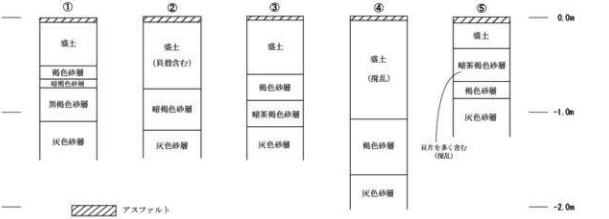
24－74　舞阪町天白遺跡(まいさかちょうてんぱくいせき)

所 在 地	西区舞阪町 2066-8 地先ほか
調査期間	2012/12/7, 10 11/29 2013/1/8, 17
時　　代	弥生、奈良、鎌倉
調査方法	立会
検出遺構	
出土遺物	
特記事項	なし
調査担当	鈴木一有

位置図(5,000 分の 1)

舞阪町天白遺跡の範囲内で水道工事が計画されたため、工事立会いを実施した。表面から、1 層:盛土層、2 層:褐色砂層、3 層:暗褐色砂層、4 層:灰色砂層(基盤層)の各位を確認した。2 層は現代の陶磁器や貝殻片を多く含み、造成土と考えられる。3 層は自然堆積の地層と見られる。3 層と 4 層の間に遺構と見られる暗茶褐色砂層と黒褐色砂層の遺構の層が見られる。暗茶褐色砂層には古代(4,5)や中世の遺物、黒褐色砂層には、古代や弥生(1～3)の遺物が含まれている。今回調査した地点のほとんどは、住宅地であり、全体的に改変されているが、調査した地点の地層から推測すると、地盤は南の東海道に近づくに連れて少しずつ上がってきている。調査区全体でみると、舞阪小学校東側は、遺構遺物があり、遺跡の範囲内と考えられる。いっぽう、舞阪小学校南側、西側は、遺構遺物がなく、遺跡の範囲外と考えられる。

土層断面



土層柱状図

出土遺物

第４章

分 布 調 査 報 告

（平成２４年度）

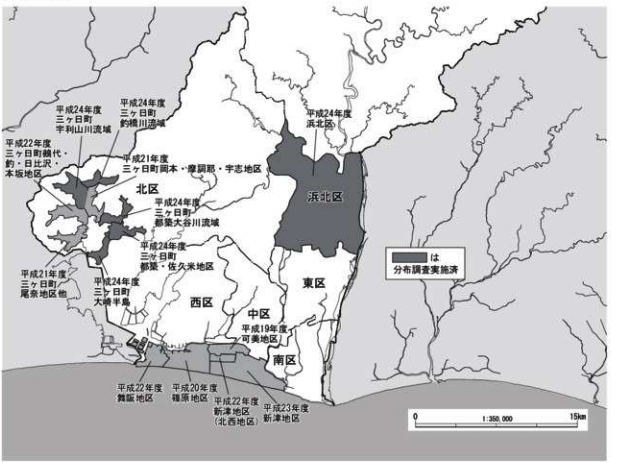
分布調査の概要

浜松市文化財課では、平成 17 年（2005）の 12 市町村を交えた広域合併の後、埋蔵文化財包蔵地の適正な把握を目指して市内の分布調査を断続的に実施している。調査の結果は、その都度、埋蔵文化財包蔵地の範囲に反映させ、開発などに伴う調整業務に活用している。

以下に示すものは、平成 24 年（2012）度に行った分布調査の結果である。過去に分布調査を行った位置については、(P86)の分布調査位置図に示した。当該期間においては、遺跡未踏査の地域や、近年開発が進み調整業務にあたって緊急性が高い地域を選んで、年間 2 回程度、調査を実施した。平成 24 年度の分布調査の結果については、分布調査追加登録・内容変更遺跡名一覧表（P87～90）にまとめ、あわせて遺跡の現場写真を掲載した。また、主な採集遺物については（P91,92）に掲載した。平成 24 年度における新規登録遺跡数は 31 件、範囲変更遺跡数は 19 件である。

＜調査方法＞

分布調査は、担当職員によって調査グループを形成し、グループごとに調査対象地を徒歩によって踏査し、畑地や水田などに散布している遺物を採集して実施した。遺物の採集位置は、詳細地図（1 : 2,500）に記録し、周辺地形について写真を撮影した。現地調査によって採集した遺物は、洗浄後、一片ずつ種別、帰属次期について判別し、旧来の地形図なども活用しながら、埋蔵文化財包蔵地の範囲について検討を重ねた。遺跡の新規登録や範囲変更、帰属時期など内容変更については、担当職員による合議のもとに、その内容を決定した。なお、新規登録をした遺跡名については、それぞれの地域の小字名をもとに命名した。



分布調査位置図

＜分布調査新規登録遺跡名一覧表＞

地区	遺跡名	番号	登録年月
5-05 三ヶ日	カミ遺跡	121	平成25年2月
	赤ザリ古墳群	122	平成25年2月
	キタ田遺跡	123	平成25年2月
	分寸東遺跡	124	平成25年2月
	釣北山古墳群	125	平成25年2月
	アラヤ遺跡	126	平成25年2月
	ミソノ遺跡	127	平成25年2月
	北畑遺跡	128	平成25年2月
	大吉遺跡	129	平成25年2月
	コザル遺跡	130	平成25年2月
	赤ザリ１号墳	122-1	平成25年2月
	赤ザリ２号墳	122-2	平成25年2月
	釣北山１号墳	125-1	平成25年2月
	釣北山２号墳	125-2	平成25年2月
	釣北山３号墳	125-3	平成25年2月

赤ザリ古墳群

分寸東遺跡

釣北山古墳群

ミソノ遺跡

大吉遺跡

コザル遺跡

＜分布調査新規登録遺跡名一覧表＞

地区	遺跡名	番号	登録年月
5-05 三ヶ日	大谷陣屋跡	132	平成25年3月
	青木遺跡	133	平成25年3月
	奥屋敷遺跡	134	平成25年3月
	貝本坂遺跡	135	平成25年3月
	平野遺跡	136	平成25年3月
	藁屋堂遺跡	137	平成25年3月
	紺屋門遺跡	138	平成25年3月
	西平北遺跡	139	平成25年3月
	西平南遺跡	140	平成25年3月
	門前遺跡	141	平成25年3月
	南平遺跡	142	平成25年3月

青木遺跡

奥屋敷遺跡

平野遺跡

藁屋堂遺跡

紺屋門遺跡

西平北遺跡

門前遺跡

＜分布調査内容変更遺跡名一覧＞

地区	遺跡名	番号	登録年月
5-05 三ヶ日	荒神山遺跡	21	平成25年2月
	伝九平遺跡	40	平成25年3月
	野地遺跡	51	平成25年3月
	宇塚山貝塚	57	平成25年3月
	佐久米貝塚	42	平成25年3月
	中ノ甲遺跡	43	平成25年3月

荒神山遺跡

伝九平遺跡

宇塚山貝塚

＜分布調査新規登録遺跡名一覧表＞

地区	遺跡名	番号	登録年月
6-04 奄玉	吉名10号窯	17-10	平成24年5月
6-03 浜北北部	相野遺跡	42	平成24年5月
	勝栗山C古墳群	43	平成24年5月
	勝栗山C１号墳	43-1	平成24年5月
	勝栗山C２号墳	43-2	平成24年5月

吉名10号窯

相野遺跡

勝栗山C古墳群

＜分布調査内容変更遺跡名一覧＞

地区	遺跡名	番号	登録年月
6-01 浜北	大屋敷古窯群	46	平成24年5月
	譲栄Ⅰ遺跡	52	平成24年5月
	吉名古窯群	51	平成24年5月
	大屋敷遺跡	90	平成24年5月
	清水遺跡	35	平成24年5月
	北谷遺跡	14	平成24年5月
	中坊遺跡	13	平成24年5月
	向山Ⅰ遺跡	26	平成24年5月
	大屋敷Ａ古墳群	44	平成24年5月
	大屋敷Ｂ古墳群	43	平成24年5月
	大屋敷Ｃ古墳群	45	平成24年5月
	井下石遺跡	64	平成25年1月
	宮東遺跡	91	平成25年1月

大屋敷古窯群

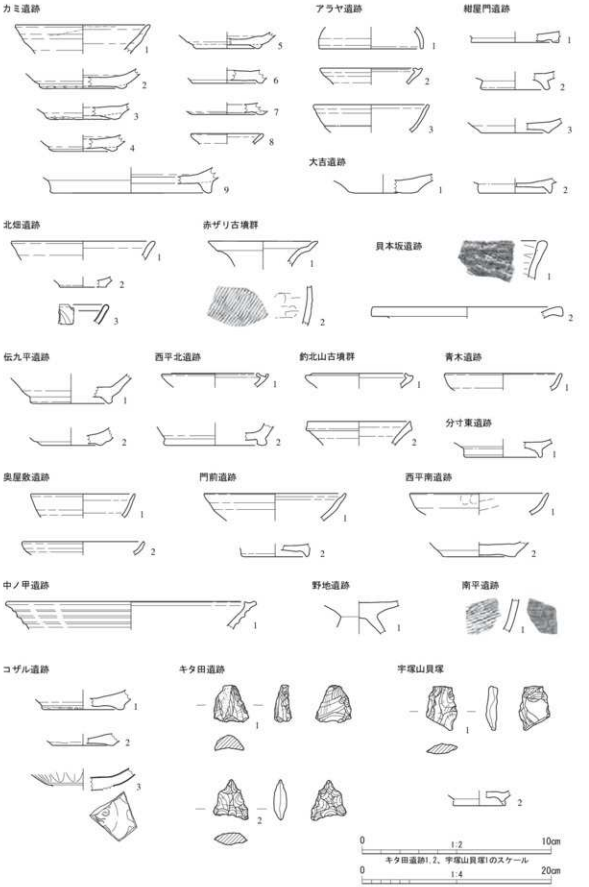
譲栄Ⅰ遺跡

吉名古窯群

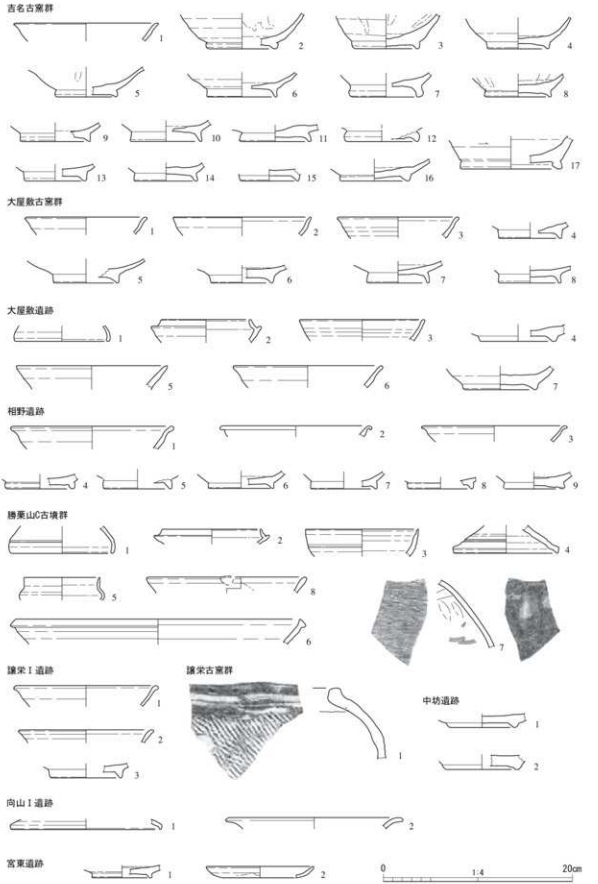
大屋敷遺跡

北谷遺跡

井下石遺跡



分布調査　三ヶ日地区　出土遺物



分布調査　浜北地区　出土遺物

第５章

詳 細 報 告

（平成２４年度）

1．神目代屋敷跡 1 次調査報告

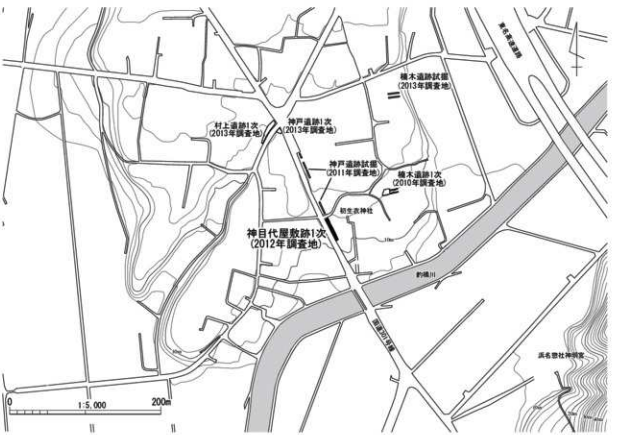
（1）調査の概要

遺跡の立地と概要　神目代屋敷跡は、北区三ヶ日町岡本の釣橋川に面した段丘上に立地する。神目代屋敷跡は、隣接する初生衣神社の歴代宮司の屋敷跡とされる遺跡である。初生衣神社は、伊勢神宮に「神御衣」を納めていた神社であり、その成立については諸説あるが、久寿元年（1154 年）が起源と伝えられる。神社の境内には織殿があり、神御衣を織ったといわれる古式の紡織具一式が残され、浜松市指定有形民俗文化財となっている。

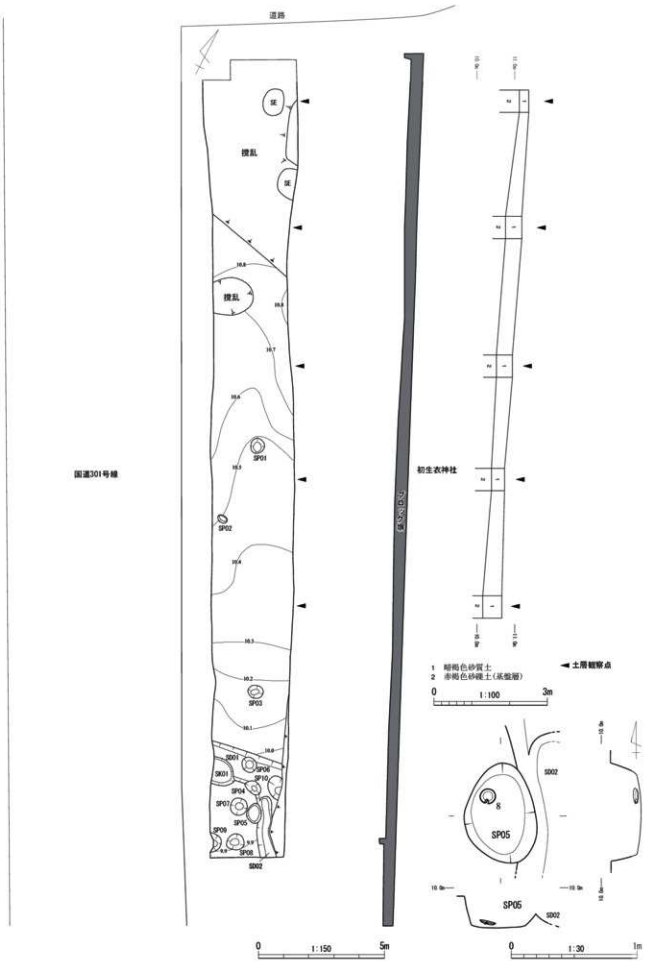
調査経緯　神目代屋敷跡の西側には、湖西市と愛知県新城市方面を結ぶ国道 301 号線が横切っている。国道 301 号線の岡本地区における区間の拡幅工事が、浜松市北土木整備事務所によって進められているが、神目代屋敷跡の一部に工事が及ぶことになったため、遺跡の範囲確認調査を 2012 年 3 月 27 日に実施した。その結果、小穴等の遺構が確認され、古代から中世の遺物が出土したことから、本発掘調査を実施することとなった。本発掘調査は 2012 年 5 月 23 日から 24 日にかけて 103 ㎡を対象に実施した。

（2）調査の詳細

土層堆積状況　調査区内の土層堆積状況は、赤褐色砂礫土の基盤層の上に、遺物を包含した暗褐色砂質土の表土が堆積していたが、調査区の北側は、過去の耕作や住宅の建設による撹乱が顕著であった。



第 1 図　神目代屋敷跡と周辺の発掘調査地



調査区平面図及び土層柱状図　　SP05 遺物出土状態図

第2図　神目代屋敷跡発掘調査区

検出遺構　調査区の北端は、過去の住宅建設によって基盤層まで大きく掘り込まれており、遺跡は消失していた。調査区の中央付近には、SP01 と SP02 があるのみで遺構は希薄であった。

調査区南端には、北側とは異なり土坑や溝、小穴などの遺構が密集していた。小穴の多くは、掘立柱建物の柱穴と考えられ、位置関係から SP06～08 は一連の建物跡の可能性が高いが、調査範囲が狭く明確にはできなかった。小穴の掘削時期は、出土遺物から 16 世紀以降と推定される。SD01 と SD02 は、17 世紀以降に掘削された区画溝と考えられる。

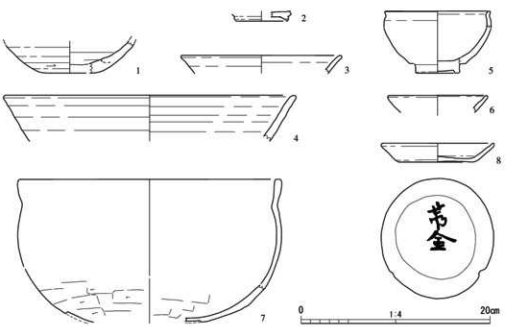
（3）出土遺物

確認調査及び本発掘調査の出土遺物を第 3 図に示した。1 と 2 は確認調査時に出土した遺物で、1 は包含層中から出土した須恵器の壺底部、2 は SP01 から出土した灰釉陶器の碗底部である。

3～7 は本発掘調査において出土した遺物である。3 は包含層中から出土した山茶碗の口縁、4 は包含層中から出土した片口鉢の口縁である。ともに 12 世紀から 13 世紀の遺物である。5 は SD01 から出土した瀬戸美濃窯産の天目茶碗、6 は SD01 から出土したかわらけである。天目茶碗は 17 世紀後半のものと考えられる、7 は SP04 から出土した内耳鍋底部である。8 は SP05 から出土したかわらけである。底部には 2 文字の墨書が記されており、1 文字目の読みは判然としないが、2 文字目は「金」と推定される。形状から 16 世紀代のものと考えられる。

（4）まとめ

今回の発掘調査の結果、中世から近世を中心とした時期の遺構と、古代から近世以降の遺物を確認した。調査範囲が狭く、建物跡は明確にできなかったが、小穴が集中的に掘削された箇所があり、一帯に何らかの建物が存在した可能性は高い。限られた範囲の調査ではあったが、初生衣神社の近接地で中世から近世の遺構と遺物が検出できたことは注目できる成果である。これらは神目代屋敷跡及び初生衣神社と関連したものと判断して矛盾はないと考えられる。　（井口智博）



第 3 図　出土遺物

1　調査区全景（南東から）

PL. 2

1　調査区南端遺構検出状況（北東から）

2　SP04 遺物出土状況（東から）

3　SP05 遺物出土状況（南から）

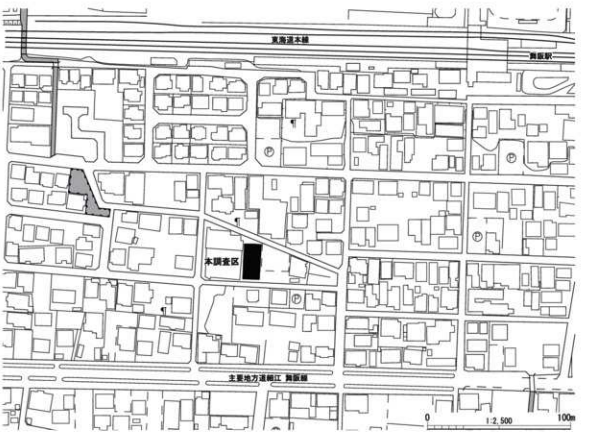
2．浜田遺跡 1 次調査報告

（1）調査の概要

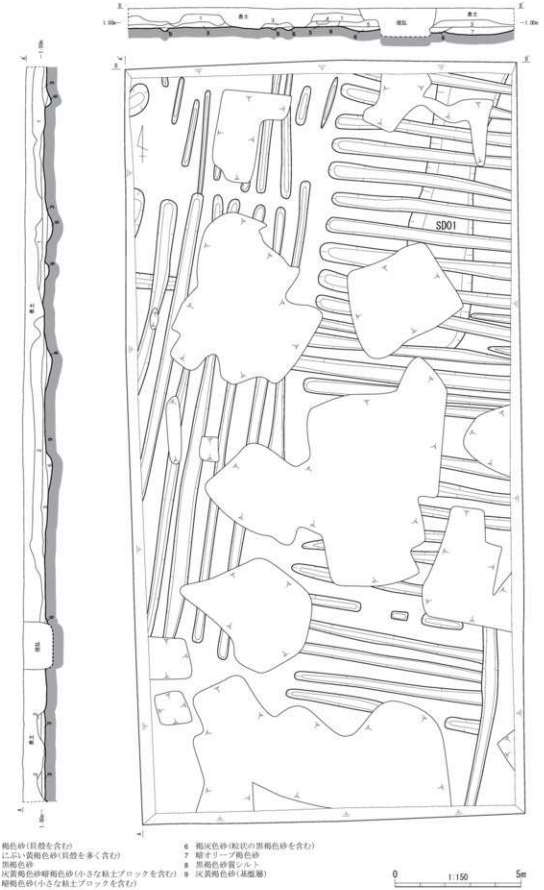
遺跡の立地　浜田遺跡は、浜松市西区舞阪町に位置する。舞阪町は、浜名湖の湖口部東側にあり、浜松市南部の海岸平野に属している。そのため町域全てが砂堤上にある。浜田遺跡の近隣には、北に大山遺跡、西に亀ヶ原遺跡などの弥生時代中期から古代にかけての遺跡が展開している。

調査経過　2012 年に当該地において、浜松市危機管理課によって津波避難タワー建設計画があがった。当該地は、浜田遺跡の範囲外であったが、隣接地にあたることから確認調査を 2012 年 6 月 21 日に実施した。その結果、古代から近代にかけての遺構及び遺物が確認され、浜田遺跡の範囲内であることが明らかとなった。こうした結果を受けて、危機管理課と浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が協議を重ねた結果、津波避難タワーの基礎工事によって遺跡の保護が図れないとの結論に至った。そのため、開発予定地全面において本発掘調査を実施することとなった。本発掘調査は 2012 年 10 月 17 日から 2012 年 10 月 30 日にかけて実施した。調査面積は約 200 ㎡である。

基本層位　調査区壁面における土層観察結果を第 2 図に示した。基本層位は、上層から①表土（現代の整地層）、②褐色砂層、にぶい黄褐色砂層（旧表土）、③黒褐色砂層（飛鳥時代～近代の遺物包含層）、④灰黄褐色砂層（基盤層）の 4 層である。調査対象地は以前、長池町公民館が建てられていた場所であり、その建設によるものと考えられる撹乱が調査区内全域において顕著に見られた。そのため、②、③層のいずれか、もしくはその両方が消失している箇所もあった。



第 1 図　調査区位置図



第２図　調査区全体図及び土層図

（2）調査の詳細

調査区内を基盤層上面まで掘削し、遺構の検出作業を行った。その結果、調査区内全域にわたって溝を確認した。

調査区の北東隅で 7 世紀代の遺構と考えられる SD01 を確認した。南北に延びる幅約 1.5m、深さ約 20cm の溝で、埋土は暗オリーブ褐色砂である。SD01 は、後述する小溝群よって切られており、部分的にしか残存していなかった。さらに、SD01 の北端は調査区外へ、南端は撹乱及び小溝群によって破壊されていたため全長は不明である。だが、南端は南進方向において平面上で続きが確認できないことから、撹乱と小溝内において収束していると考えられる。また、溝の埋土から 7 世紀代の土師器、須恵器及び土錘(第 3 図 4・7・17)が出土した。

その他の溝は近代の平行する小溝群であり、調査区の東半では東西方向、西半では南北方向へと延びている。小溝はいずれも幅約 60cm、深さ約 20cm、約 40cm の間隔で調査区の全域にわたって確認できた。溝の埋土は、褐灰色砂であり、埋土から須恵器・土師器・山茶碗・内耳鍋・磁器・陶器・土錘が出土した。小溝群は、形状及び均等な間隔で並んでいることから近代の畑の畝跡と考えられる。

（3）出土遺物

今回の調査で出土した遺物を第 3 図に示した。出土した遺物は小破片のものが多く、図化できたものはごく僅かであった。また、遺構内から出土した遺物は少なく、包含層内からの出土遺物が大半であった。

1 は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の間に沈線が認められ、口縁部は丸く仕上げられている。2・3・4 は須恵器の坏身である。3 は立ち上がりが低い形状を成しており、4 は立ち上りの部分が欠けているが 3 と同様に立ち上がりの低い形状を成すと考えられる。これらの遺物は 7 世紀代の製品と考えられる。5 は須恵器の有台坏身であり、高台より底が突出する形状を成している。6 は須恵器の無蓋長頸壺である。5・6 は 8 世紀前半の製品と考えられる。7・8 は土師器の甕で 7 世紀代の製品と考えられる。9 は大型の土師器の台付甕で 8 世紀代の製品である。10～14 は山茶碗、15 は山皿であり、13 世紀の製品と考えられる。16・17 は土錘である。16 は小溝内（SD40）からの出土遺物であるため時期不明であるが、17 は SD01 からの出土遺物であり、SD01 からは 7 世紀代の遺物が出土していることから同時期のものと考えられる。

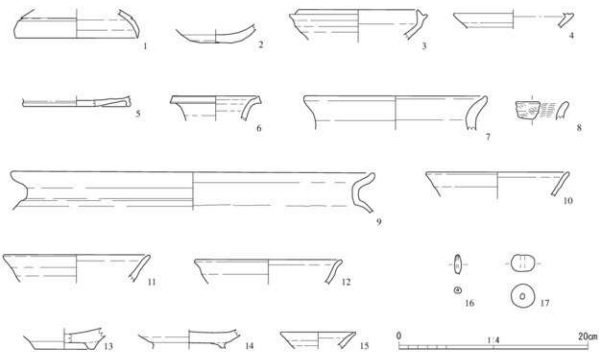
（4）まとめ

今回の発掘調査では、調査区全域で溝を確認し、飛鳥時代～近代にかけての遺物が出土した。当該地周辺では飛鳥時代・奈良時代・中世の遺物が採取されており、このことは今回の調査において出土した遺物と比較しても相違ない。当遺跡が飛鳥時代・奈良時代・中世にかけての複合遺跡であることがより明確になったと言えよう。

また、飛鳥時代の遺構と考えられる SD01 以外は、近代の畑の畝跡と考えられる小溝群という結果が得られた。このように近代の畑作によって近代以前の様相は明確に判明しなかったが、遺物量から推察すると当該地には SD01 以外にも飛鳥時代・奈良時代・中世の遺構が展開していた可能性がある。今後の調査によって浜田遺跡の様相がより鮮明になることを期待したい。　　（川西啓喜）

第1表　浜田遺跡出土遺物観察表

図版No.	No.	取上No.	遺構	種別	細別	残存%	反転	器径cm	器高cm	口径cm	底径cm	頭径cm	色調	その他
3	1	24	包含層	須恵器	坏蓋	10以下	反			12.8			灰	
3	2	28	包含層	須恵器	坏身	10以下	反				3.3		灰	
3	3	28	包含層	須恵器	坏身	10以下	反	14.6					灰	
3	4	27	SD01	須恵器	坏身	10以下	反	12.8					灰	
3	5	9	SD10	須恵器	有台坏身	10以下	反				15.4		灰白	
3	6	28	包含層	須恵器	無蓋長頸壺	10以下	反			9.6			灰白	口縁部内外面自然釉
3	7	21	SD01	土師器	甕	10以下	反			19.4			浅黄橙	
3	8	4	SD04	土師器	甕	10以下							浅黄橙	口縁部内面スス付着
3	9	28	包含層	土師器	台付甕	10以下	反			38.6			浅黄橙	
3	10	28	包含層	中世陶器	山茶碗	10以下	反			15.2			灰白	
3	11	28	包含層	中世陶器	山茶碗	10以下	反			15.6			灰白	口縁部内面自然釉
3	12	28	包含層	中世陶器	山茶碗	10以下	反			15.6			灰白	口縁部内外面自然釉
3	13	28	包含層	中世陶器	山茶碗	10以下	反				6.2		灰白	
3	14	28	包含層	中世陶器	山茶碗	10以下	反						灰白	
3	15	24	包含層	中世陶器	山皿	10以下	反			8.0			灰白	口縁部内面自然釉
3	16	15	SD40	土製品	土錘	100		0.8	1.1	0.8			にぶい橙	3.0g
3	17	21	SD01	土製品	土錘	100		2.5	1.8	2.5			浅黄	42.0g



第3図　浜田遺跡出土遺物

1　調査区完掘状況（北東から）

2　SD01完掘状況（北西から）

３．万斛西遺跡（旧鈴木家屋敷跡）調査概要報告

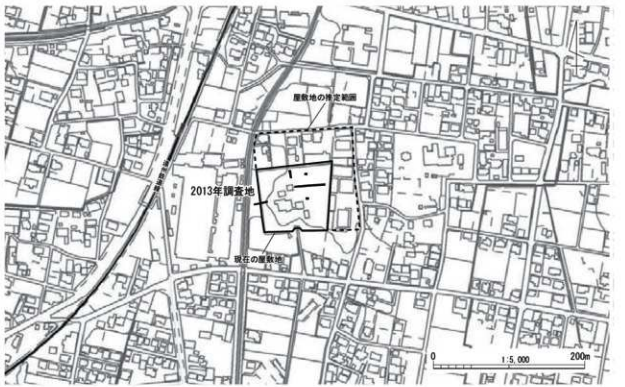
（１）調査の概要

遺跡の立地と概要　旧鈴木家屋敷跡は、浜松市東区中郡町の平野上に位置している。遠州鉄道線西ヶ崎駅の東側にあり、周辺は宅地化が進んでいるが、旧鈴木家屋敷の敷地は広大な屋敷林に囲まれた旧来の景観を保っている。屋敷の主である鈴木権右衛門家は、江戸時代に浜松藩主に直接拝謁が許された「独礼庄屋」の筆頭として知られる家柄である。江戸時代末に書かれた家系図によれば、鈴木家の初代良宗は室町時代前期にこの地に定住したと考えられる。

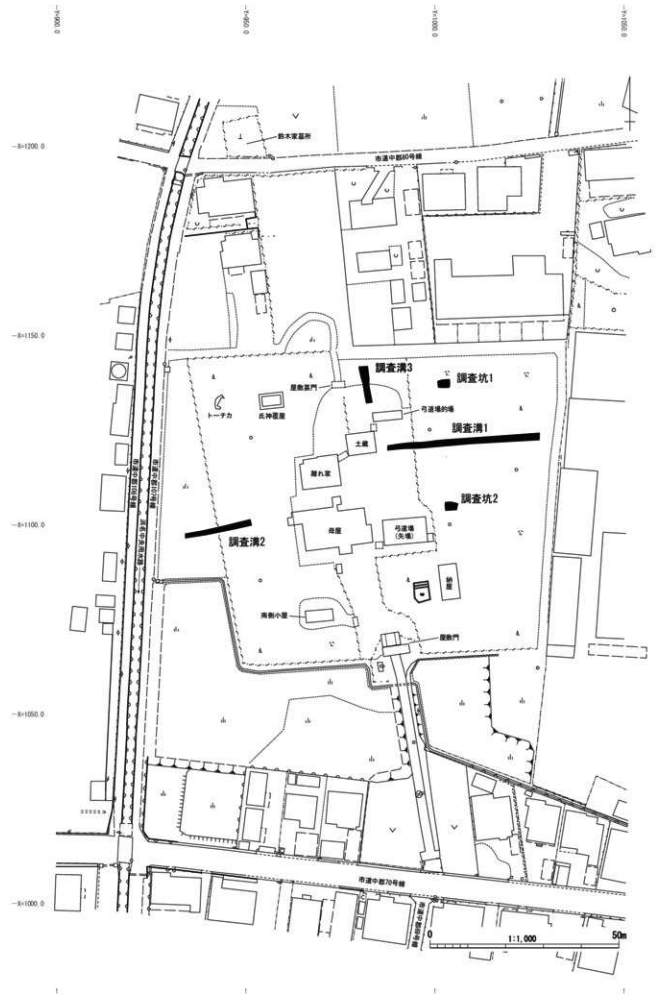
現在、屋敷跡は東西約 100m、南北約 80mの逆台形の区画の中に母屋や土蔵、納屋、弓道場などの建物が残存している。中世からこの地に定住し、徳川家康を始めとする歴代浜松城主に「御目見独礼」が許された家格である鈴木家の屋敷地は、土塁や堀を伴う中世居館跡を利用したものと推定されるが、現状ではそうした構造物の痕跡は確認できない。

調査経緯　鈴木家代々の屋敷地は、当主が浜松を離れた後は無住の地となり荒廃が進んでいた。このような状況の中、土地所有者から地域の憩いの場として活用するため、旧鈴木家屋敷跡の敷地を寄付したいとの申し出があり、2010 年 12 月に土地と建物が浜松市に寄付された。

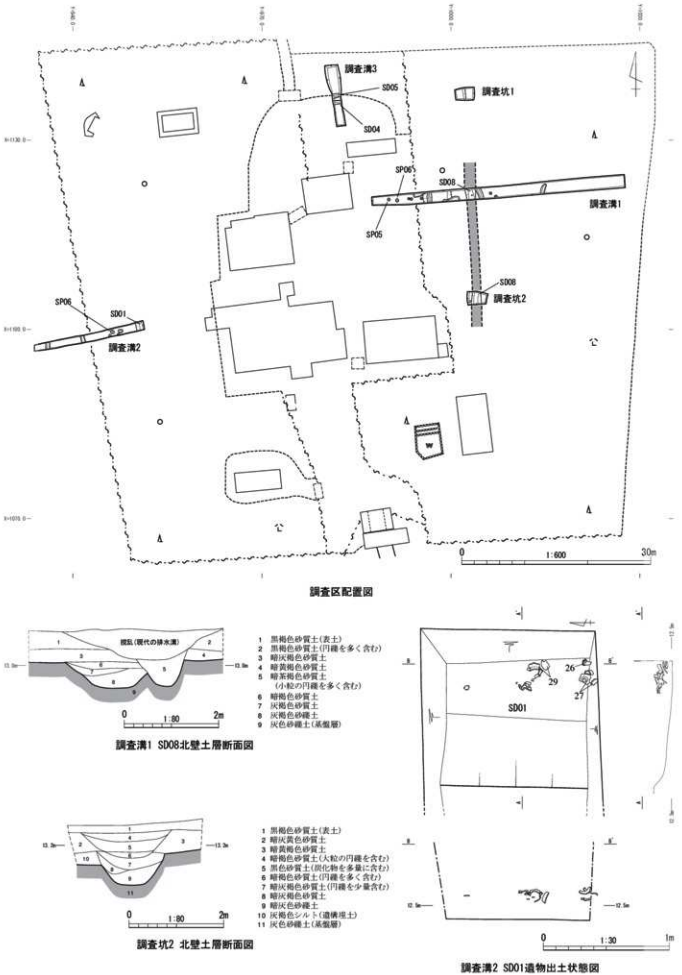
土地と建物の寄付を受けた浜松市では、浜松市公園課を主管課とし、旧鈴木家屋敷跡の歴史的価値を把握するための調査を開始した。その一環として旧鈴木家屋敷に関わる考古学的な情報を得るため発掘調査を実施することになり、2013 年 1 月 15 日から 1 月 23 日と 3 月 5 日に現地調査を行った。その結果、鈴木家にかかわる中世から近世の遺構や遺物を検出するとともに、想定外の古代の遺構と遺物を発見した。現地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、周辺の分布調査も並行して実施し、旧鈴木家屋敷跡とその周辺を新たに万斛西遺跡として包蔵地登録を行った。



第１図　旧鈴木家屋敷跡（万斛西遺跡）の位置



第２図　旧鈴木家屋敷跡現況と発掘調査箇所



第３図　調査詳細図および土層図

（2）調査の詳細

1月に実施した調査では、現状の屋敷地の東側と西側、北側に3本の調査溝を設定した。調査溝1では土坑や溝、小穴などを確認した。調査溝の中ほどで、南北方向に横切る溝SD08を検出し、溝内から山茶碗、かわらけ、擂鉢、中国産の染付皿などが出土した。遺物の時期から16世紀後半から17世紀半ばに掘削されたと推定される。調査溝2は現況の屋敷地の外側まで、調査溝を延長して調査を行った。調査溝の西側では、堀跡に相当する大規模な掘り込みは確認できなかった。周囲の水田と屋敷地とでは、80 cmほどの比高差があり、水田が堀としての役割を兼ね備えていたと推定される。また、調査溝東端のSD01からは古墳時代後期の遺物が出土した。調査溝3では、東西方向に横切るSD04、SD05を検出した。溝の方向は屋敷地の方向と一致しており、区画溝と推定される。

3月に実施した調査では、1月に調査溝1で検出したSD08の延長方向を探る目的で2箇所の調査坑を設定した。想定通りいずれの調査坑においても溝を検出したが、調査坑1の溝はSD08とは埋土が異なり、同一の遺構である確証は得られなかった。調査坑2で検出した溝は、規模や方向、土層堆積状況、出土遺物の時期などからみて、SD08と同一の遺構と考えられる。

（3）出土遺物

1～40には調査溝1～3の出土遺物を示した。1～3はSD08から出土した山茶碗、4～6はかわらけ、7と8は瀬戸美濃窯産の擂鉢、9は志戸呂窯産の徳利、10は貿易陶磁器の染付皿である。11はSP05から出土したかわらけ、12はSP06から出土した山茶碗である。13～17は包含層から出土した須恵器、18～20は山茶碗で、18の底部には「上」の墨書が記されている。21はかわらけ、22はく字内耳鍋、23は瀬戸美濃窯産の天目茶碗、24と25は近世の植木鉢である。26～31は調査溝2のSD01からの出土品で、26は須恵器の返り蓋、27は無台坏身、28は有台坏身、29は広口壷である。30は土師器の台付甕、31は小型甕である。32はSP03から出土した古瀬戸の瓶子、33は包含層から出土した山茶碗、34は須恵器の横瓶である。35はSD04から出土したかわらけ、36は山皿、37は山茶碗、38は初山窯産の徳利、39はSD05から出土した灰釉陶器碗、40は山茶碗である。

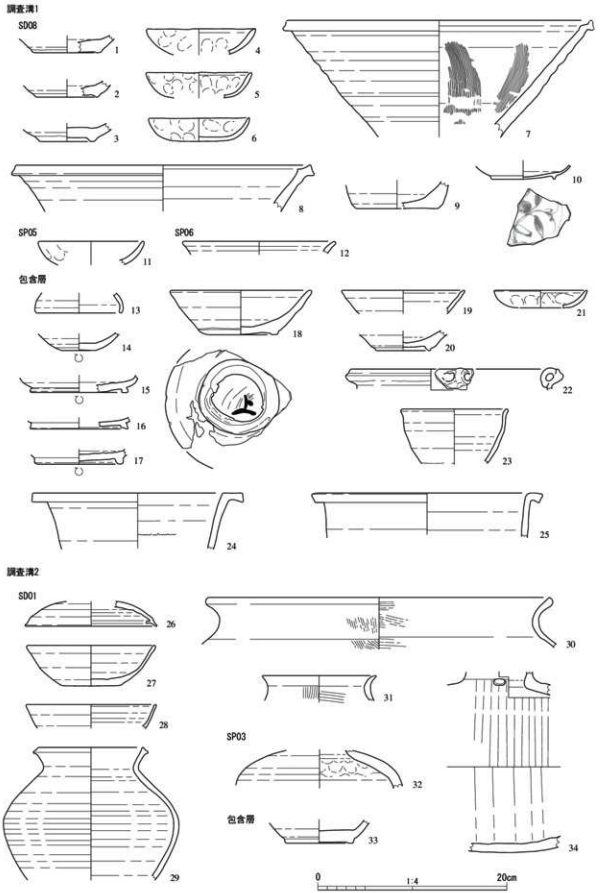
41～43には調査坑1の出土品を、44～57には調査坑2の出土品を示した。41は須恵器の陶臼、42は渥美窯産の甕、43は常滑窯産の甕である。44～49はSD中から出土した遺物で、44は須恵器の有台坏身、46は瀬戸美濃窯産の擂鉢、47は内湾内耳鍋の口縁、48は内耳鍋の底部、49は羽釜である。50～57は包含層中から出土した遺物で、50と51はかわらけ、52は美濃窯産の尾呂茶碗、53と54は瀬戸美濃窯産の丸碗、55は方錐印塔の部材、56と57は近世の植木鉢である。

（4）まとめ

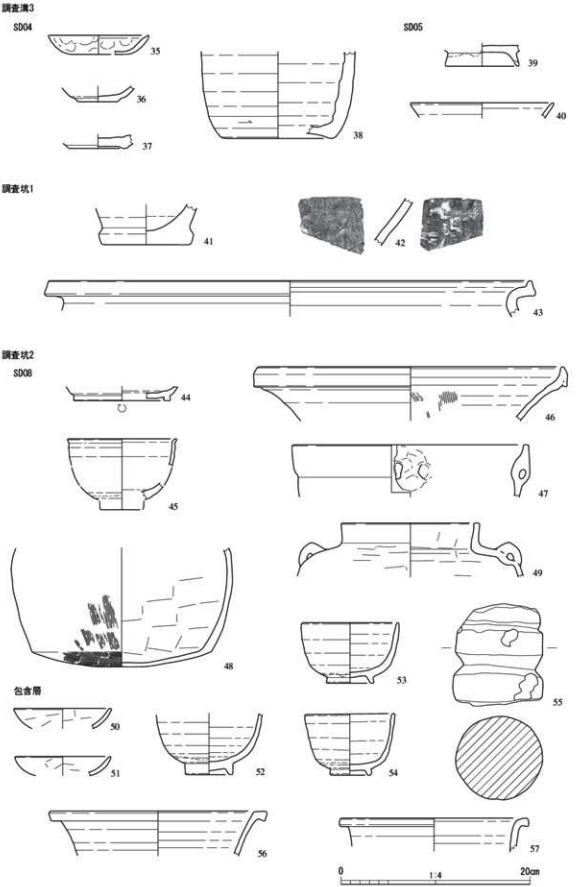
今回の調査の結果、旧鈴木家に関連する中世から近世の考古学的成果を得られたのに加え、古墳時代後期から奈良時代の遺構や遺物を検出するなど、想定外の古代の調査成果も得られた。

旧鈴木家屋敷跡に関わる遺構としては、調査溝1や調査坑2で検出した溝があげられる。江戸時代後期の家相図には、屋敷の中心建物を取り囲むように掘削された溝が描かれている。今回の調査で検出した溝と家相図に描かれた溝の位置関係を検討すると、ほぼ一致することが判明した。

今回の調査では、屋敷地全体のごく一部を発掘するに留まった。家相図には溝の他に土塁状の高まりが描かれており、今後も引き続き発掘調査による情報収集が必要と言える。（井口智博）


調査溝1
SD08
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SP05
11
SP06
12
包含層
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
調査溝2
SD01
26
27
28
29
30
31
SP03
32
包含層
33
34
0
1:4
20cm

第 4 図　出土遺物（1）


調査溝3
SD04
35
36
37
38
SD05
39
40
調査坑1
41
42
43
調査坑2
SD08
44
45
46
47
48
49
包含層
50
51
52
53
54
55
56
57
0
1:4
20cm

第５図　出土遺物（2）

PL. 1

1　調査溝 1　全景（北東から）

2　調査溝 1　SD08 遺物出土状況（北東から）

3　調査溝 2　SD01 遺物出土状況（北西から）

4．郷ヶ平古墳群５次調査報告－郷ヶ平４号墳の調査成果－

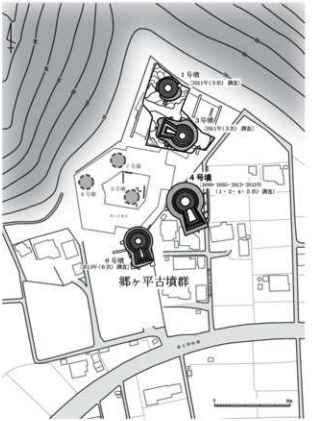
（1）調査にいたる経緯

概　要　郷ヶ平古墳群は、４号墳をはじめとする３基（３・４・６号墳）の前方後円墳を含む７基の古墳により構成される初期群集墳で、浜松市北区都田町字郷ヶ平に所在する。三方原台地の北縁に位置し、眼下には都田川により形成された都田盆地を臨む。

これまで、郷ヶ平古墳群では４号墳の部分的な調査（1998・2005・2012 年調査）と１・３号墳の調査（2011 年調査）の計４度の調査が行われた（第１図）。

４号墳は、６世紀中頃に築造された前方後円墳で、現在は市指定史跡として保護されている。４号墳は 1998 年と 2005 年、2012 年に発掘調査が行われ、今回で４度目の発掘調査である。

調査の経緯　郷ヶ平４号墳の西側において、特別養護老人ホーム第二九重荘の改築工事が計画されたため、開発に先だって発掘調査を実施した（調査溝Ｌ）。また、工事の進捗状況に合わせて、２地点の工事立会（調査溝Ｍ・Ｎ）を実施した。調査面積は、発掘調査 30 ㎡と工事立会６㎡、計 36 ㎡である。



第１図　郷ヶ平古墳群の古墳分布と調査状況

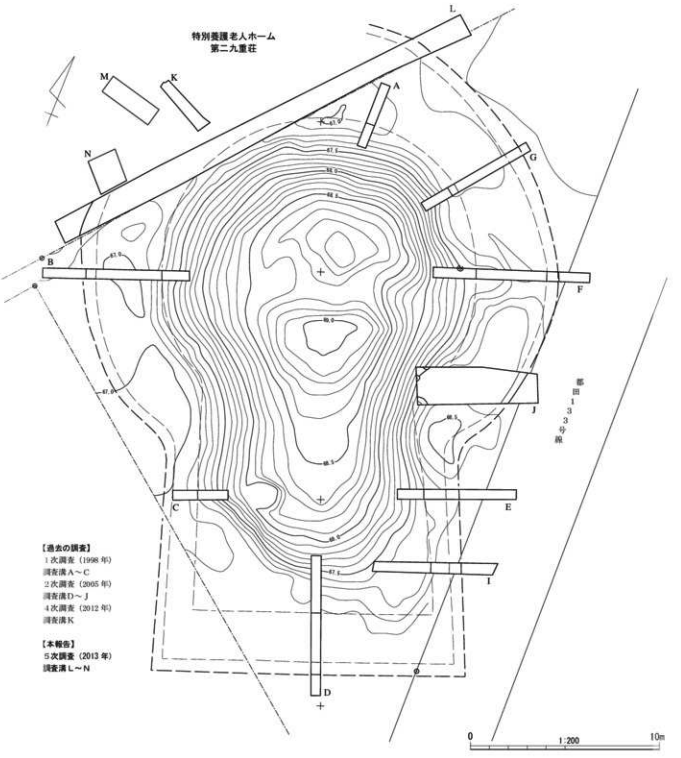
（2）古墳の概要

墳　丘　郷ヶ平４号墳は、全長 26.5m、現地表面から遺存高 2.0m を測る２段築成の前方後円墳である。過去の調査において、墳丘の１段目と２段目の間に平坦面が設けられ、そこに円筒埴輪が樹立された状態で検出された。円筒埴輪の間隔は、中心間の距離で約 0.8m を測る。埋葬施設については調査を実施していないが、木棺直葬と想定される。

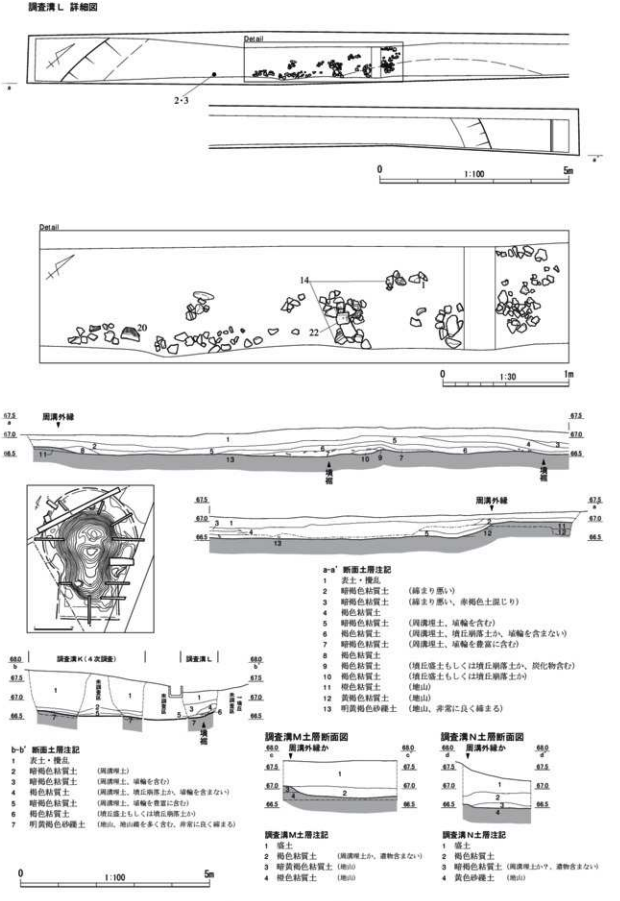
周　溝　周溝は、過去の調査により、前方後円形を呈すと想定され、検出面で幅 1.5～4.5m、深さ 0.5m を測る（浜文振 2006）。今回の調査では、調査溝Ｌにおいて後円部の周溝を検出し、幅は不明だが、深さは検出面から 0.3m を測る。いっぽう、工事立会地点では、墳丘に向かって落ち込む部分を確認した。しかし、調査面積が限定されることや出土遺物がないこと、周溝外周の検出位置が他の調査区と整合性を求め難いことから、周溝が不整円形である可能性と攪乱を受けている可能性が想定され、今後の検討課題としたい。

土層の堆積状況は、上層から表土、攪乱、暗褐色粘質土、周溝埋土、地山がみられる。周溝埋土には、地山直上から、埴輪を多く含む暗褐色粘質土（a-a’断面７層）と埴輪を含まない褐

色粘質土（6層）、墳輪を含む暗褐色粘質土（5層）がみられ、墳丘は大きく3回に分けて崩落したことが窺える。地山は、検出面から周溝上半が橙色粘質土（11層）や黄褐色粘質土（12層）、周溝底付近が黄褐色砂礫土（13層）である。



第2図　郷ヶ平4号墳の調査区配置図



第3図　郷ヶ平4号墳　詳細図

（3）出土遺物の概要

出土状況　周溝埋土を中心に複数個体の埴輪と3個体の須恵器が出土した。埴輪は、周溝全域から出土し、須恵器坏蓋は、後円部北西側の周溝内、壺・甕類は、後円部西側の周溝内から、いずれも埴輪に混ざった状態で出土した。

須恵器　坏蓋（1）は、口径15.2cm、器高5.2cmを測る。天井部外面には回転ヘラケズリが施され、その範囲は天井部の1／3程度である。口縁端部の処理や稜の鈍さからTK10型式期の特徴を示している。壺・甕類（2・3）は、胴部片のみの出土で、点数も限られることから全体形は不明である。

円筒埴輪　郷ヶ平4号墳の円筒埴輪の特徴は、3条突帯4段構成であること、正位成形と倒立成形の2つの成形技法があること、突帯は低く、断面形は所謂M字形であること、円形透孔であること、窯焼成であることがあげられる。以上の特徴は、過去の調査により指摘されている点（鈴木敏2006）と相違ない。

4～11は円筒埴輪の口縁部であり、端部は面もしくは匙面を持つものが主体であるが、9のように丸く収めるものもある。口径は42～30cmのものがみられ、4・9・10はヨコナデ、5～7はタテハケ、8・11はヨコハケによる2次調整がみられる。

12～15は、突帯や円形透孔をもつものを示した。透孔の径は約8～9cmである。12・13は外面にタテハケがみられ、原体は1cmあたり3本の凸部をもつものである。内面は、ナデやオサエがみられる。14は、C種ヨコハケ調整がタタキ後に施され、内面には、同心円文アテ具痕がみられる。15は外面にタタキ具痕がみられ、内面はヨコナデ調整が施される。

朝顔形埴輪　朝顔形埴輪は16～18に示した。16・17は口縁部であり、16は口径約48cmに復元できる。外面はナデ調整が主体で、一部にヨコハケやタテハケがみられる。

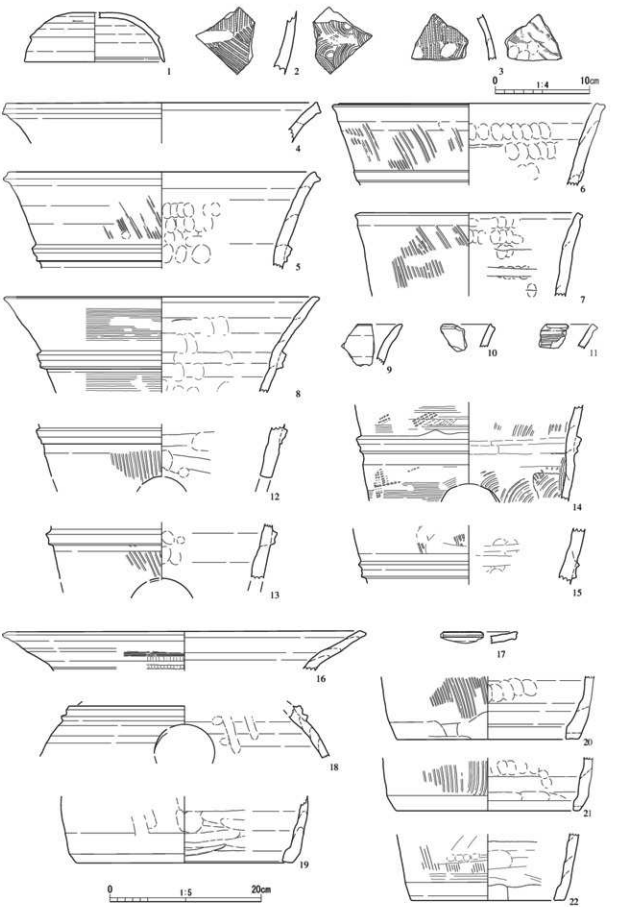
19～22に基底部を示した。これらは正位成形された円筒埴輪または朝顔形埴輪の基底部と捉えられる。底径は28.4～20.0cmに復元でき、端部付近は内外面ともにケズリ調整が施される。外面はタテハケ調整のもの（20～22）が主体だが、ナデ調整のみのもの（19）もある。

（4）まとめ

郷ヶ平4号墳は、6世紀中葉に築造された埴輪を伴う全長26.5mの前方後円墳で、郷ヶ平古墳群において最後に築造された古墳である。今回の発掘調査により、後円部西側の周溝が確認でき、また、多くの出土遺物を得たことで、4号墳の規模と造営時期を追認することができた。

第4図　調査溝L 全景

第5図　調査溝L 遺物出土状況



第6図　郷ヶ平4号墳 出土遺物実測図

郷ヶ平古墳群の被葬者は、都田川中流域の首長層と捉えられ、新しい墳墓形式の採用のほか、周辺の古墳や遺跡において渡来系文物である鋳造鉄斧や当時最新の墓制である横穴式石室の導入が認められるなど、革新的な性格をもっていたことが指摘されている（鈴木一 2012）。

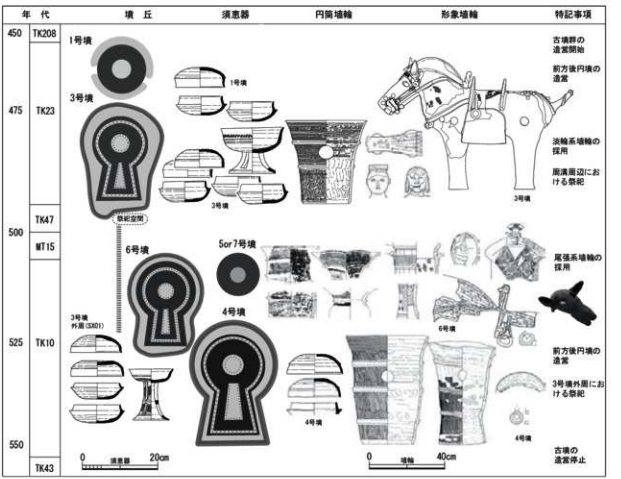
郷ヶ平古墳群は、近年の調査成果により３号墳、６号墳、４号墳と、埴輪を樹立する小型前方後円墳が３基続けて築造されていることが明らかになってきた。３号墳と６・４号墳の間には、墳丘主軸の違いや樹立される埴輪系譜の違いがあり、郷ヶ平古墳群の造営者集団を取り巻く環境の変化がうかがえる。しかし、郷ヶ平古墳群のなかで、埴輪系譜や墳丘主軸の向きが変化する画期に位置づけられる郷ヶ平６号墳については、平成 25 年度に調査を実施し、現在、整理作業中である。６号墳の情報が揃うのを待って、検討することとしたい。　　（和田達也）

参考・引用文献

鈴木敏則　2001　「郷ヶ平４号墳」『静岡県の前方後円墳 ―個別報告編―』　静岡県教育委員会

鈴木敏則　2006　『郷ヶ平４号墳Ⅱ』　（財）浜松市文化振興財団

鈴木一有　2011　「第３章 後論」『郷ヶ平古墳群』　（財）浜松市文化振興財団



第７図　郷ヶ平古墳群の動態

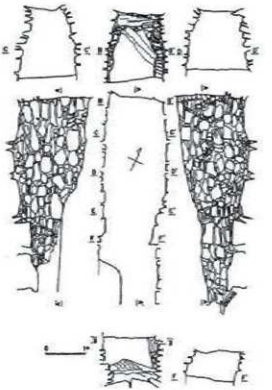
5．泉Ａ１号墳（将軍塚古墳）調査報告

（１）遺跡の概要

浜北区北部の丘陵地帯には古墳群が多くみられ、浜北北麓古墳群あるいは麓玉古墳群などと総称されている。その中で泉Ａ古墳群は、浜北区根堅の古刹岩水寺北側の丘陵に位置している（7 頁地図参照）。これまでに発掘調査が実施されたことはなく全体の基数は不明だが、現状では１０基程度を確認することができる。

今回調査を実施した泉 A１号墳は、群中で唯一、天井石が残存し横穴式石室が開口している古墳であり、立地する丘陵の頂に坂上田村麻呂を祀る田村神社が鎮座することから、「将軍塚古墳」という俗称で知られている。古くは 1930 年に発刊された『旧静岡県史』第１巻において、「岩水寺古墳」として、本墳の石室実測図および写真が掲載されており、1979 年には浜名高等学校史学部によって、同墳の墳丘と石室の測量が行われている（浜北市教委『浜北市北麓古墳群』1988）が、これまでに出土遺物は確認されていない。

本墳の石室は、主軸を N－25° －W に向ける無袖式の横穴式石室であり、硅岩及び石灰岩の角礫によって構築されている。玄室と羨道の区別は明確ではないが、天井の高さが低くなっている箇所を玄門とすれば、玄室の規模は全長 3.2m、最大幅 1.6m、現状の高さ 1.9mである。羨道部の規模は現状で長さ 2.1m、推定の高さ 0.8m である。



第１図　石室実測図(1/100)

（２）調査の結果

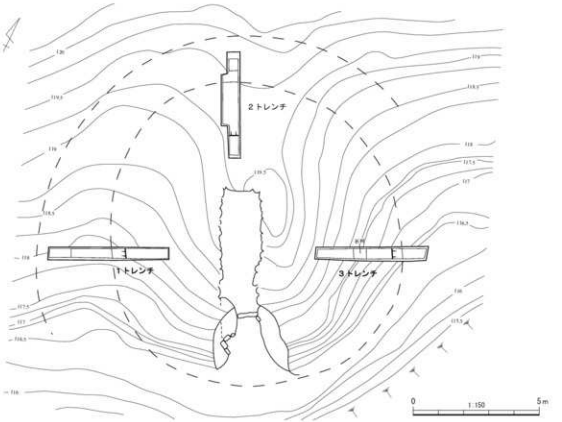
今回の調査の経過や方法等については、第３章 78 頁を参照していただきたい。

調査の結果、３箇所の調査溝のいずれからも、墳丘及び周溝を確認することができた。

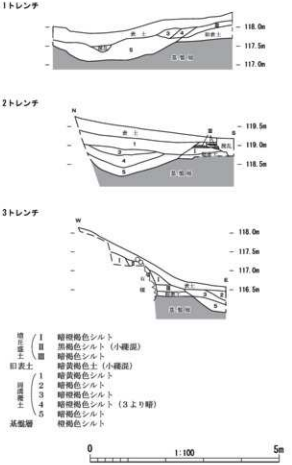
墳丘については、旧表土上に盛土が残存していることが確認され、墳丘の北側に設定した調査溝２では、暗褐色土と暗橙褐色土を交互に盛ったような土層が検出された。また、墳丘の東側に設定した調査溝３では、墳丘盛土内に構築されたとみられる石積みが検出された。

周溝については、いずれの調査溝でも外側の上端を確認することができなかった。調査溝３を設定した墳丘東側は急傾斜であるため、周溝は存在せず、地山を削り出していた可能性が考えられる。

なお、出土遺物はいずれの調査溝からも確認されなかった。



第２図　墳丘平面図(1/150)



第３図　墳丘断面図(1/100)

（３）まとめ

調査の結果、墳丘の規模は東西 11.5m、南北約 12mの円墳であり、墳丘の南側から西側にかけては周溝が存在していることが判明した。また、墳丘の東側のみに墳丘内の石積みが確認されたことは留意すべき点である。墳丘の構築に伴い、急傾斜地である古墳の東側において、土留めを目的として構築された可能性が考えられる。

今回の調査では出土遺物が確認されず、造営時期や被葬者の性格などについて明らかにすることはできなかった。今後、石室内や前庭部付近の調査が行われれば、そうした点のいくつかは解明されていくと思われる。

なお、本墳については、市民有志によって墳丘及び周辺の草刈り作業や、通路・案内看板等の整備等が行われている。こうした地域住民の取り組みと、行政の文化財保護事業が継続的に補完し合うことで、本墳の保護・活用が一層図られていくことが望まれる。　（鈴木京太郎）

6．中屋遺跡工事立会報告

（1）立会の概要

遺跡の立地と調査経過　中屋遺跡は天竜川西岸の扇状地に立地する。第二東名建設事業に伴う財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の試掘調査によって遺跡の存在が確認された。発掘調査の結果、東西約 160ｍの方形区画溝と土塁基底部が検出され、溝内からは山茶碗や瓦が出土した。また、旧浜北市教育委員会の試掘調査によって、方形区画溝の西側及び北側が捉えられた。今回の工事立会は道路拡幅工事に伴い平成 23 年 10 月 17 日から平成 23 年 10 月 18 日に実施した。

（2）立会の詳細

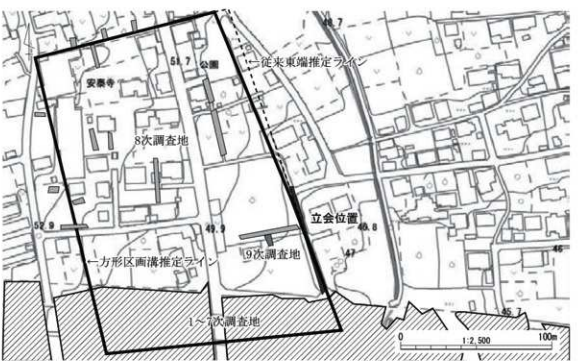
立会成果　基本土層は上から 1 層：表土、2 層：黒褐色粘土、3 層：黒褐色砂（溝埋土）、4 層：暗灰色粘土（溝埋土）、5 層：明褐色砂礫（溝埋土）、6 層：褐色砂礫（溝埋土）、7 層：暗黄褐色粘土、8 層：黄褐色粘土（地山）、9 層:明黄褐色砂礫（地山）である。

立会の結果、北側の No. 1、No. 10 地点を除く全ての地点で、方形区画溝を検出した。遺物は須恵器、鎌倉時代の山茶碗、土師器、中近世陶器等が出土した。

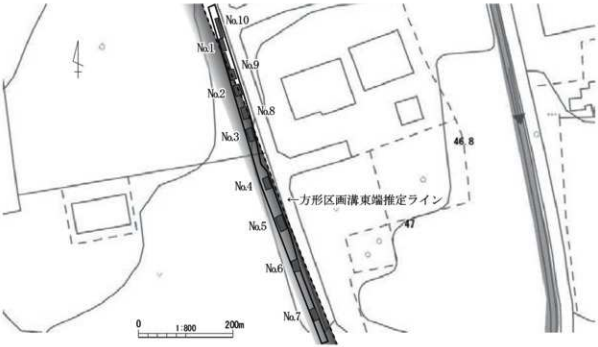
方形区画溝の堆積状況は、溝が捉えられた 8 箇所ともにほぼ共通するものの、NO. 2 地点では 3 層が見られなかったことから、後世の改変を受けている可能性がある。また、NO. 2 から NO. 4 地点でのみ砂礫層（5・6 層）の堆積が見られた。当該範囲では、現在も特に湧水が多く溝底部まで掘削が不可能であったことから、湧水との関連性も推定できる。

No. 9 地点では調査区北側で溝が切れている事を確認したことから、方形区画溝の東側は従来の推定位置よりも若干西方へ振っていると考えられる。よって、No. 10 及び遺構を検出した No. 1 地点は方形区画溝の外側と捉えられる。

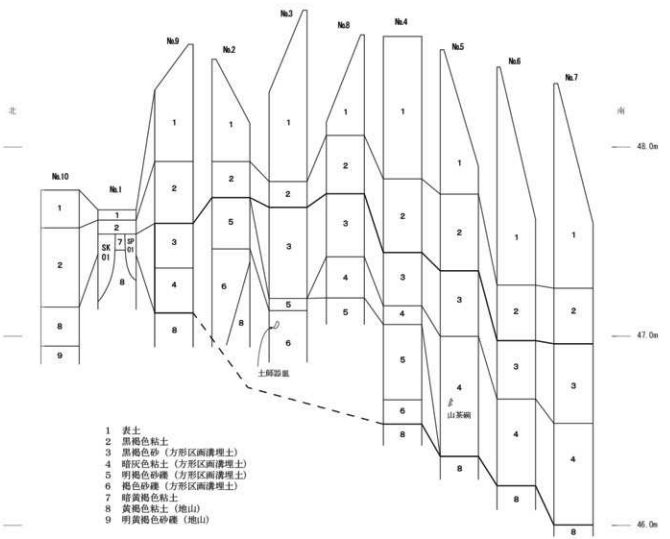
以上より、立会地点は方形区画溝の東側溝内及び溝外であると考えられる。　（首藤久士）



第 1 図　中屋遺跡の立会位置図



第２図　立会箇所位置図

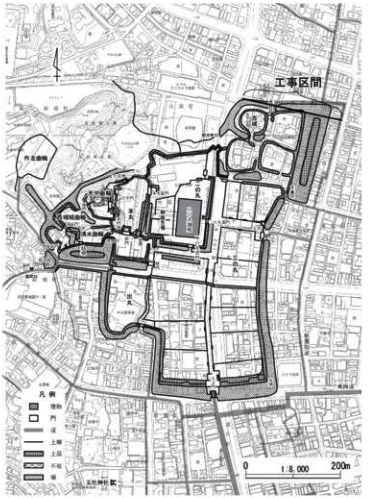


第３図　土層柱状図

7．浜松城跡工事立会報告

（1）遺跡の概要

浜松城は浜松市中区の三方原台地東縁部の段丘に築かれた平山城である。浜松城の前身は 15 世紀頃に築かれたとされる引馬城で、16 世紀前葉からは、今川氏の家臣である飯尾氏が 3 代にわたって城主を務めていたが、遠江へと侵攻した徳川家康が、元亀元（1570）年に岡崎城から引馬城へと居城を移し、西側のさらに高い段丘面へと城域を拡張して浜松城と改称した。家康の関東移封後は、堀尾吉晴によって、現在天守や本丸周辺に見られるような高い石垣を有する城郭となり、江戸時代に入ると三の丸等が整備され、城下町が形成された。



第 1 図 浜松城跡推定復元図(1/8,000)

今回の立会対象地である引馬城は、近世段階では古城と呼ばれて四つの曲輪が残され、堀がめぐっていたことが絵図から知られているが、現在は北西の曲輪の一部が東照宮として残されているほかは、堀は埋め立てられ、曲輪は削平されるなど、市街地化の影響によって地形の改変が進行している。

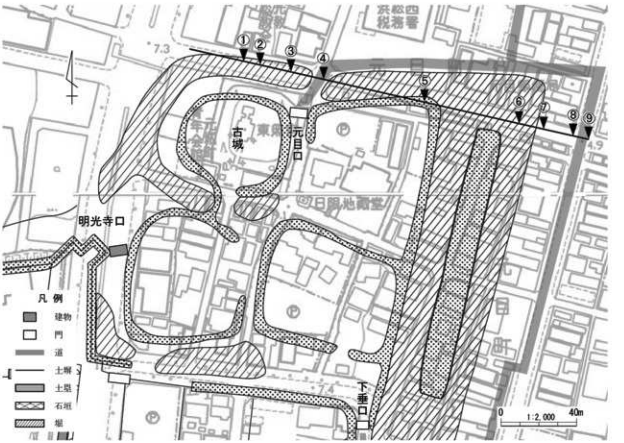
（2）工事立会の概要と成果

今回の立会は、引馬城北側の堀跡と想定される部分において行われた配水管埋設工事（中区元目町及び尾張町地内）に立会う形で、2012 年 12 月 3 日から 2013 年 1 月 21 日までの間に 9 回実施した。立会時には土層を確認・計測し、遺物が出土した場合には層位を確認しながら取り上げた。基本層序については以下の通りである。

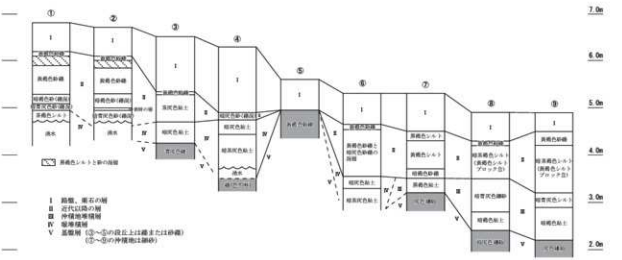
Ⅰ層：路盤・路床及び現代の埋土。Ⅱ層：近現代の埋土。ガラスやトタン等が混ざる。Ⅲ層：沖積地堆積層。シルトや粘土の層で、立会箇所⑦～⑨の東側低地部で確認される。1 点のみ 7 世紀頃の須恵器小片が出土している。Ⅳ層：引馬城の堀覆土とみられるシルトや粘土の層で、地形や絵図から堀と想定される立会箇所①～④、⑥で確認されている。遺物は確認されなかった。Ⅴ層：基盤層。段丘上では礫層または砂礫層、沖積地の立会箇所では細砂層である。

現地は、低い段丘の縁辺部にあたり、地形は西から東へと下がっている。立会箇所⑤と⑨では基盤層で約 2.8m の比高差がみられる。

出土遺物は、Ⅱ層（近現代の埋土）に近世の瓦や陶磁器がわずかに混入する程度であった。



第２図 引馬城跡推定復元図と工事立会箇所（1/2,000）



第３図 土層柱状図(1/80)

（３）まとめ

立会の結果、立会箇所①～④、⑥については堀、立会箇所⑤では土塁とみられる土層の状況を確認した。立会箇所③、④付近で存在が想定された元目口は確認できなかったものの、絵図等にみられる近世段階での引馬城の縄張りと今回の立会結果は、ほぼ符号することが判明した。

浜松城城のうち引馬城（古城）や三の丸の周辺は、市街地化により表面上はほとんど当時の姿をうかがえず、これまでほとんど調査も行われなかったため、遺構の残存状況は不明であったが、今回の立会によって堀が残存していることが明らかとなった。今後は、発掘調査はもとより、こうした小規模な予備調査や工事立会等の積み重ねによって、次第に市街地に埋もれた浜松城の姿が鮮明になっていくことが期待される。（鈴木京太郎）

8．辺田平１号墳出土埴輪の再検討

（1）はじめに

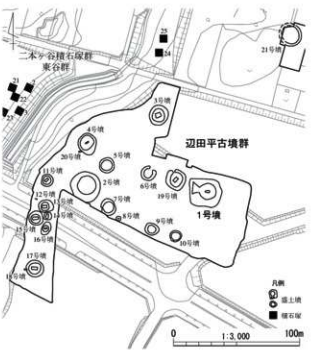
辺田平（へたびら）１号墳は浜松市浜北区染地台六丁目に所在した前方後円墳で、1997 年に区画整理事業に伴い浜北市教育委員会によって全面発掘された。調査の結果、木棺直葬の埋葬施設を確認し、小刀、鉄鏃、玉類などが出土した。また、くびれ部の周溝内を中心に、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪を検出した。副葬品や須恵器、埴輪の特徴から、古墳の築造時期は古墳時代中期末（TK47 型式期、５世紀末）頃と判断でき、東海地方でも諸情報が整う標識的な古墳として重要視されている。この古墳から出土した埴輪については、部分的な接合作業を実施するにとどまっていたが、2012 年から 2013 年にかけて出土品を再検討し、主要な埴輪について全体復元を行った。本稿では、その内容を報告する。

（2）再検討にいたる経緯

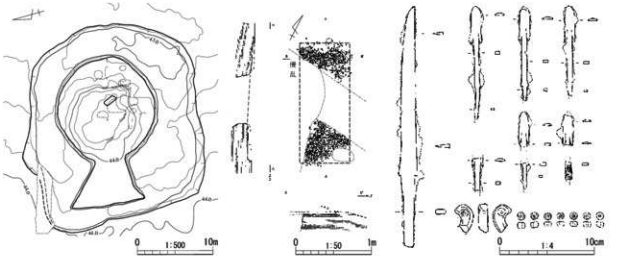
辺田平１号墳の調査成果は、2000 年に刊行された発掘調査報告書にまとめられた（浜北市教育委員会 2000）。膨大な出土量がみられた埴輪にかんしては、報告書の中で概要が示されるにとどまったが、その後『浜北市史』の編纂事業に伴い再整理が試みられ、主要な出土埴輪の実測図が提示された（浜北市 2004）。この整理事業によって、辺田平１号墳から出土した形象埴輪の大略が示されたが、遺物の復元検討は未実施のまま残された。

2005 年に浜松市は浜北市を含む周辺 11 市町村と合併し、旧市町村の豊富な文化財を統一的な視点を通じて公開できる条件が整った。合併後、辺田平古墳群に隣接する二本ヶ谷積石塚群は歴史公園として整備され、2013 年には静岡県の史跡に指定された。同年、史跡指定を契機に浜北区にある展示施設（市民ミュージアム浜北）の充実を企画し、その一環として辺田平１号墳から出土した埴輪の再検討および復元作業を実施した。

出土遺物の再検討は 2012 年 11 月から開始し、2013 年４月まで断続的に行った。後述するように、鹿形埴輪１点、鳥形埴輪２点、女子埴輪１点、円筒埴輪２点の復元を行い、合わせて狩人を象った可能性が高い人物埴輪についても部分的な修復、復元を実施した。これらの埴輪群は 2013 年７月 12 日から９月１日にわたって開催した企画展示「浜松の渡来文化と埴輪群像」展（会場：市民ミュージアム浜北）に出品し、多くの市民の関心を呼んだ。



第１図　辺田平古墳群の詳細



第２図　辺田平１号墳の墳丘、埋葬施設、副葬品

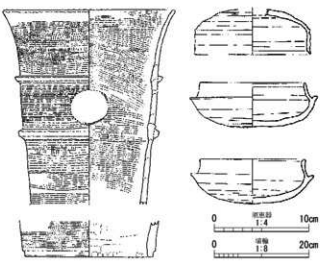
（３）辺田平１号墳の概要

辺田平古墳群は、浜北区の西南部、三方原台地の縁辺部に位置する。内野古墳群と総称される古墳群の一角に形成されており、前方後円墳１基、円墳 16 基、積石塚（方墳か）１基、形態不明３基の合計 21 基の古墳が確認されている。古墳群の西に接して、二本ヶ谷積石塚群が構築されている。

辺田平１号墳は、辺田平古墳群の盟主的な存在で、古墳群の東端に構築されている。主軸を東西にとる全長 20.1ｍの前方後円墳で、短小な前方部を西に向けている。後円部の中心には南北方位に設置された埋葬施設が確認できている。埋葬施設は箱形の木棺を直葬したもので、棺底には小礫が敷かれている。木棺の幅は 0.75m、長さは 1.6ｍと推定できる。発掘調査では木棺をおさめた墓壙が確認できておらず、墳丘構築過程において埋葬施設を設置する、いわゆる無墓壙の構造であると考えられる。棺内からは小刀１、鉄鏃８、ガラス製勾玉１、ガラス製小玉 13 が出土した。副葬品に用いられた鉄鏃は両刃の長頸鏃で、比較的短小な頭部をもち、茎関は裾広がりの段をなす。中期末頃の典型的な形態である。

周溝からは円筒埴輪、形象埴輪が豊富に出土している。周溝には礫がほとんど確認できていないことから、葺石は施されていなかったと捉えられる。埴輪は周溝の全域から出土したが、とくに南側くびれ部において、形象埴輪がまとっていた。前方部の端部に形象埴輪群が樹立されていたものと考えられる。

古墳に樹立された円筒埴輪はいずれも２条突帯３段構成で、淡輪技法をもつものである。これらの埴輪は全体的な大きさや外面調整の特徴から、TK47 型式期を中心とするものと評価できる（鈴木 2013）。周溝から出土した須恵器も若干新しい時期のものを含むが、ほぼ同じ年代を示すものとみてよい。



第３図　辺田平１号墳出土円筒埴輪・須恵器

（4）修復・復元の概要

辺田平1号墳出土埴輪の再検討は、形象埴輪を中心に実施した。主に『浜北市史』作成時にあたり、同一固体と認識された部材を中心に、接合検討、石膏による補填、修復を行った。その結果、鹿形埴輪1点、鶏形埴輪2点、女子埴輪1点、円筒埴輪2点について全体復元が可能と判断し、修復作業を行った（第4図）。また、男子埴輪（推定狩人）1点についても、自立できるように底部の補填と裾の補填、復元を実施した。

鹿形埴輪　鹿形埴輪については、『浜北市史』作成時において頭部が後方を向く可能性が指摘されていたが（白井・鈴木 2004）、今回の作業によって首まわりを中心に新たな接合部位が確認でき、「見返り」の所作を表現したものであることを確定するに至った。足と胴部は接合関係にないが、四本足の動物埴輪は鹿形埴輪以外に確認できないことから、同一個体と判断した。足の破片は胴部に近い部分まで遺存しており、足の長さもほぼ確定できたといってよい。尻尾についても胴部との接合関係は認められなかったが、鹿以外の動物形埴輪が出土していないため、同一個体と認識した。尻尾の向きは必ずしも明確でなかったが、他の鹿形埴輪の類例比較から、下向きと判断した。

以上の検討を通じて全体形を検討した鹿形埴輪は、全長 80cm、高さ 90cm、幅 35cm の大きさに復元できた（第6図）。頭部は、完全に後方を向くのではなく、左斜め後方を向く。後述するように、辺田平1号墳には狩人埴輪が伴う可能性があり、その場合は振り向いた延長上に狩人埴輪が置かれた可能性が考えられる。

鶏形埴輪　鶏形埴輪は、『浜北市史』の編集作業と平行して修復が進められていたため、今回の作業では欠損部分の補填と彩色を行った。2点ある鶏形埴輪は、鶏冠の有無や大きさの違いから判断して、雄と雌の一対を表現したものと考えられる。

女子埴輪　女子埴輪は、出土状態から同一個体の可能性が高いと判断できる胴部（浜北市 2004、728 頁 24）と頭部（浜北市 2004、739 頁 31）を補填接合し、底部については同墳の人物埴輪基底部（浜北市 2004、753 頁 62･63）を参考にして、復元を行った。女子埴輪がまとう袈裟状衣は、欠損している部分を補い、格子状の線刻も可能な限り表現した。いっぽう、腕については、肘より先端の破片が見つからなかったことから、積極的な復元は行っていない。この個体は両腕を前の上方に捧げ持つような格好をしており、同墳から出土した別個体（浜北市 2004、743 頁 47）のように壷を捧げ持つような所作をしていた可能性がある。

男子埴輪（推定狩人埴輪）　靫を背負う人物（浜北市 2004、733 頁 26）について、衣服の裾や靫の背負い紐などを補填、自立できるように底部を復元した。弓をもつ腕（浜北市 2004、745 頁 49）と同一個体の可能性が高いことから、鹿を狙う狩人を象った埴輪と想定した。ただし、胴部と腕との接合関係は確認できなかったことから、両者は接合していない（PL. 1-2）。

第4図　辺田平1号墳出土形象埴輪

円筒埴輪　遺存状態が比較的良好な円筒埴輪2個体について不足している円筒部と底部を補填し、2突帯条3段構成に復元した。

（5）鹿形埴輪について、

今回の再検討の結果、辺田平1号墳から出土した鹿形埴輪は、首を大きくひねり後方を向く、いわゆる見返りの鹿（第5図）であることが明確になった。『浜北市史』の編集時に検討されていたものの他に、新たに首を構成する部材が判明し、振り返る角度もほぼ確定できた意義は大きいだろう。両脚の基底部には、4箇所のスカシ穴があけられている。スカシ穴の配置は、浜松市郷ヶ平3号墳から出土した馬形埴輪（鈴木 2012）と共通するが、スカシ穴の大きさは小さい。スカシ穴が小型化していることは、後出的要素として捉えられる。円筒形の脚部は端部まで単純な円筒形を呈しており、踏を表現する郷ヶ平3号墳例と比べて同じく新相の様相が認められる。

第5図　鹿形埴輪

見返りの鹿を象った埴輪は極めて珍しい。類例として、島根県松江市の平所埴輪窯跡例（重要文化財）と奈良県橿原市四条1号墳例の2点をあげうるにすぎない。鹿形埴輪そのものも類例が少なく、全国でも50例程度が認められる程度である。静岡県では、浜松市郷ヶ平6号墳（2013年調査）で破片が確認されているのみであり、辺田平1号墳例は全体形が復元できる稀少な事例といえる。辺田平1号墳では、見返りの鹿と狩人の埴輪が組み合っていた可能性が指摘できることも特筆できる。狩人埴輪と考えられる人物の腕には弓やつがえた矢が写実的に表されており、見返りの鹿は狩人の射掛けを警戒した情景を表したものと捉えても矛盾はない（PL. 1-3）。

埴輪で鹿を象る意味については、明確に示すことが難しいが、『古事記』や『日本書紀』、『風土記』などの記述をもとに判断すると、鹿は森や稲の精霊とかかわる霊獣と認識されていたことが分かる（平林 1992）。鹿を狩る行為には、土地を治める正当性を示す象徴的意味が付与されていたと考えられ、鹿と狩人が組み合う可能性がある辺田平1号墳は、首長層が執り行った儀礼の具体的な所作を示すものとして、全国的にも注目できる事例といえるだろう。　（鈴木一有）

参考文献

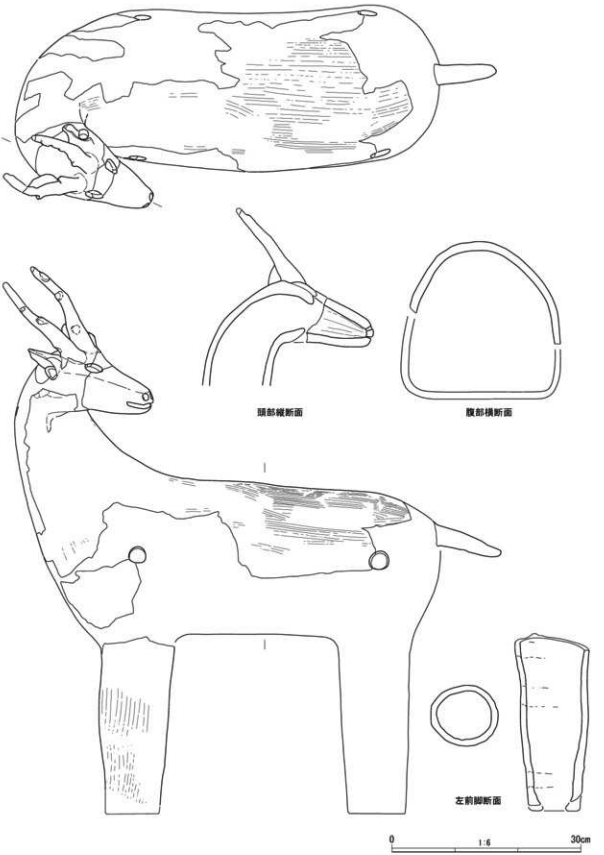
白井秀明・鈴木京太郎 2004 「辺田平一号墳出土の埴輪について」『浜北市史』資料編 原始古代中世　浜北市

鈴木一有 2012 「三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義」『郷ヶ平古墳群』（財）浜松市文化振興財団

浜北市教育委員会 2000 『内野古墳群』

浜北市 2004 『浜北市史』 資料編　原始　古代　中世

平林章仁 1992 『鹿と鳥の文化史』 白水社



第6図　鹿形埴輪実測図

PL. 1

1 鹿形埴輪側面

2 推定狩人埴輪

3 推定狩人埴輪と鹿形埴輪

第6章

文化財年報

（平成24年度）

文化財の新指定等

浜松市では、平成24年度に、新たに4件（県指定3件、市指定1件）の文化財が指定・登録された。ここでは新しく指定された文化財について紹介する。

Ⅰ　新たに指定されたもの

【静岡県指定有形文化財（絵画）】

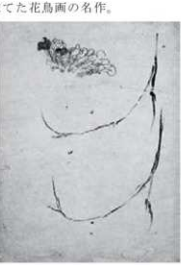
蠡魚帖稿　　14葉

指定年月日　平成25年3月15日
所 在 地　中区松城町100-1　浜松市美術館内
所 有 者　浜松市
材質形状　紙本墨画（一部淡彩）　帖
作　　者　渡辺崋山
制作年代　天保12年（1841）8月
指定理由　一．各時代の遺品のうち製作優秀で静岡県の文化史上貴重なもの
　　二．静岡県の絵画・彫刻史上特に意義のある資料となるもの

「蠡魚帖稿（ちゅうぎょじょうこう）」は、幕末期に活躍した田原藩家老で南画家の渡辺崋山（わたなべかざん）の代表作「蠡魚帖（※1）」（国指定重要文化財）の唯一の稿本である。渡辺崋山が蛮社の獄で田原に蟄居中の天保12年（1841）8月に描かれたもので、その目録も現存している。重要文化財に指定されている正本「蠡魚帖」との差異を確認することができる資料として、また、正本の制作過程を知ることができる資料として貴重である。

崋山は風景画・肖像画を得意とし、その作品は、南画の系譜を踏襲しながらも、洋学から学んだ西洋画法を取り入れ、融合させた作風が高く評価されている。「蠡魚帖稿」は、実際の写生による描写で、正本にも劣らない生き生きとした筆致で草木、虫、茄子、亀等動植物の生態や動きを表現している。崋山晩年の作画思想や表現方法を考究できる大変貴重な作品である。

（※1）「蠡魚帖」…身近な草木虫魚を活写した詩書画冊で、画図12葉に中国の唐宋元明時代の詩を相対応させ、合わせて24葉を1帖に仕立てた花鳥画の名作。



【静岡県指定有形民俗文化財】

佐久間の林業と山村生活の用具　　220 種 1,105 点

指定年月日　平成 24 年 11 月 30 日

所 在 地　天竜区佐久間町中部 510-1　旧さくま郷土遺産保存館内

所 有 者　浜松市

指定理由　1　衣食住、生産・生業、交通・運輸・通信、交易、社会生活に用いられる有形の民俗文化財のうち、その形態、製作、技法、用法等において、静岡県民の基盤的な生活文化の特色を示すもので、典型的なもの

2　前項に掲げる有形の民俗文化財の収集でその目的、内容等が地域的特色、職能の様相を示すものに該当し、特に重要なもの

天竜区佐久間町は三遠南信国境山岳地帯に位置し、天竜川とその支流が流れる、山と川の恵みに育まれた地域である。人々はこの地で、山と川との地勢・風土のなかで連綿と日常生活を営んできた。これらの地に生まれ暮らしてきた先人たちが、現代の我々の暮らしにつながる生活用具と生産技術を生み出し、生活様式を形成し、暮らしの文化を伝えてきたことは非常に重要である。

山村生活で中核的な役割を果たしていた林業に直接関係する木樵用具、山から川への木材運搬用具のほか、天竜川中流域の山村の人々の生産用具と食用具、さらに山村生活に不可欠で、今となっては収集が困難な衣類や信仰に関するものが資料化され整理されていることは貴重である。

生活文化が急激に変化している現代社会にあって、それら諸道具の実用的価値は急速に失われ「文化」や「歴史」を語る貴重な資料が消滅しつつあるなか、1,100 点を越えるものが今日まで伝えられてきた意義は大きい。

佐久間の歴史・地域性と密接に関係する、林業と山村生活の用具 1,100 点余が資料化され保存されていることは、静岡県の山と川に育まれた地域の生活文化の特色を示す貴重なものである。県内には、かつての山村生活を伝える多様な諸用具が一括して残存している例は他になく重要である。

【静岡県指定史跡】

二本ヶ谷積石塚群　　1件

指定年月日　平成25年3月15日

所 在 地　浜北区染地台5丁目（4,154.1平方メートル）

所 有 者　浜松市

指定理由　貝塚、遺物包含地、居住跡（竪穴住居跡、敷石住居跡、洞穴住居跡等）、古墳、神籠石その他この類の遺跡のうち、静岡県の歴史の正しい理解のために重要なもので、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術的価値のあるもの

二本ヶ谷積石塚群は、三方原台地東縁部の河岸段丘に形成された二本の谷の中に立地しており、これまでに28基が確認されている。今回、現存する8基のうち史跡整備が完了した6基が指定された。墳丘は、直径10～40㎝程度の小型の円礫を積み上げて築かれており、裾や埋葬施設の周囲に、やや大型の礫を並べ、それ以外の部分はやや小型の礫を雑然と積んでいる例が多い。墳丘は方墳が多く、規模は一辺 5m前後と小型である。いずれも墳丘上部は失われているが、周辺の礫の崩落状況等から、築造当初の高さは0.5～1m程度と推測される。

本積石塚群は、通常は古墳が築かれない谷に立地していること、及び、方形または不定形の低墳丘の小型積石塚のみで構成されていることが特徴として挙げられる。築造された5世紀代は、朝鮮半島から渡来人が多く流入した時期であり、甲信・北関東を中心に、この時期の積石塚群の存在が知られている。他県の類例や在地の墓制にない特異な立地や墳丘構造等から推定して、当地方に移住してきた渡来系集団の墳墓群であると考えられる。

静岡県における古墳時代の渡来系集団の様相や、社会構造を考えるうえで重要な遺跡である。

【市指定史跡】

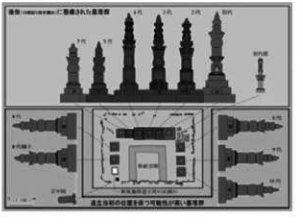
宿蘆寺大澤家墓所　　120 平方メートル

指定年月日　平成 24 年 11 月 30 日
所 在 地　西区庄内町 719 の一部（120 平方メートル）
所 有 者　宗教法人宿蘆寺

宿蘆寺大澤家墓所は、江戸時代に遠江国堀江（浜松市西区）周辺を領した旗本、大澤家が営んだ墓地。長軸 11m、短軸 8.5mほどの区画の中に、宝篋印塔（ほうきょういんとう）3 基、五輪塔 8 基の合計 11 基の石塔と関連石塔部材が確認できる。各石塔は、歴代（旗本初代～10 代）の大澤家当主と 8 代当主の嫡子のものであり、当主らの戒名と没年が刻まれている。このうち、最も古い年号は、初代基宿（もといえ）塔にみられる寛永 17 年（1640）であり、10 代基暢（もとのぶ）塔にみられる文久 2 年（1862）に至るまで、江戸時代を通じて墓地の造営が続けられたことが分かる。

墓所中の石塔では、2 代の基重（もとしげ）から 4 代の基恒（もとつね）の 3 基の石塔が注目できる。これらの石塔は、宝篋印塔とよばれる形式に属し、石塔に刻まれた細かな模様が江戸で流行した特徴と共通する貴重な事例。

平成 22 年度から平成 23 年度までの文化財調査を通じて、宿蘆寺大澤家墓所は高禄の旗本階層が領地に営んだ墓所の具体像を伝える貴重な事例であることが明確になり、学術的価値が高い。



平成 24 年度 浜松市文化財調査報告

2014 年 3 月 10 日

編集 浜 松 市 文 化 財 課

発行 浜 松 市 教 育 委 員 会

印刷 松 本 印 刷 株 式 会 社